693-176
1200501580640

268

著袋花山田

花袋全集

第九卷

ある僧の奇蹟・外二十三編

花袋全集刊行會

著袋花山田

花袋全集

第九卷

編三十二外・蹟奇の僧るあ

花袋全集刊行會

著　　者　（大正十一年一月）

693
176

田山花袋氏と私

生田葵山

私が田山花袋氏を能く訪問したのは、牛込喜久井町に住居してゐられた頃で、新婚後間もない家庭にはお子さんもまだなかつたのでした。最初蒲原有明氏に連られて往き、それから一人で訪問するやうになつたのでした。原書がまだ讀めなかつた私は、氏からいつも佛蘭西作家の作品の話を聽かされたもので、殊に氏が傾倒してゐたドオデエの作品の梗概やゾラの作品の梗概や批評を語り聽かされてどんなに啓發されたことか。

當時の文壇は新進作家として鏡花、風葉二氏が華やかに登

場してゐて、氏は幾分立遲れ氣味でした。氏の書くものはセンチメンタリズム一點張りの單調さで、小說と云ふよりも田園詩と云ふ可きものでした。しかし氏は讀破した佛蘭西小說を咀嚼して、自身の創作態度を變革しようとする精進は凄まじいもので、隱すところなく語る言葉の端々に火花のやうに顯はれてゐたのでした。

私の花袋氏訪問は、私が中耳炎を患つて、四年間湘南地方に引退を餘儀なくされて中絕したのでしたが、病癒えて歸京した後、氏が新築した代々木の家に久振りに訪ねて行くと、以前見た田山氏とは全く異つた姿の氏を見たのでした。以前の氏はどちらかと云へば女性的で、他人の心に痛く觸れるやうな言葉は力めて口にせず、擧動にしても消極的であつたのが、そんな殼を脫

ぎ捨てゝ、思ふさま大きく笑ふ聲にさへきび〳〵した男性的の響きがあるのでした。出世作の蒲團を始め數々の傑作を世に送つた後で、文壇的地位が高く定まりかけつゝあつて自信が出來たせゐでもあつたらうが、私としては愕かされたのでした。然うして私が病後の意氣消沈した思ひで、妻と餘儀なく別れねばならなかつた顚末を、先輩の友人として語ると、同情の言葉を吐く代りに、作家の立場からは得難い經驗であるから、少しも化粧を施さずに書けと勸めるのでした。

私は氏の創作態度の殘忍さに從ふ可く、心の傷が餘りに大きかつたので、一旦は尻込みしたのでしたが、軈て氣を取直して、書出しかけたのを、外遊の爲に果されなかつたのでした。私が氏の言葉に從つて逸早くその時の心象を書上げてゐたなら、違つ

た運命が私に來たかもしれないと、時に觸れ思起されるのです。

花袋全集第九卷目次

序文（生田葵山）……三
ある僧の奇蹟……一二
Sとその妻……一〇八
號泣……一三一
彼の一日……一五五
彼女の幻影……一七九
山上の震死……二〇五
2と3……二四七
鸚鵡……二七三
遺傳の眼病……二三一
Nの水死……二四四
萎れた草……二四四

土藏のかげ……五六六
錆びた沼……五九九
再生……六四八
一夜……六四九
強い心……五五三
絶壁……五五七
林に添つた道……五八〇
足……六〇〇
Kの死因……六〇八
一つの空想……六四二
ぬかり道……六七七
島の虐殺……六九二
一つの恐怖……七一二
解説（松波治郎）

ある僧の奇蹟　外二十三編

ある僧の奇蹟

一

久しく無住であつた田村の長昌院には、今度新しい住職が出來た。それは何でも二代前の老僧の一番末の弟子で、幼ない時は此の寺で育つた人だといふことであつた。『ほ、あのお小僧さんが？　それはめづらしいな。』などい村の人達は噂した。

先代の住職が女狂ひをして、成規を踏まずに寺の杉林を伐つて賣つたりして、そのため寺にもゐられなくなつてから、もう少くとも十二三年の歳月は經過した。初めは一里ほど隔たつた法類のT寺がそれを監督したが、そこの和尚も二三年して死んで了つたので、あとは村の世話人が留守居などを置いて間に合せに來た。寺は唯荒るゝに任せた。

長昌院と言へば、この界隈でもきこえた古い寺である。德川時代にもいくらか御朱印のついてゐる格式の好い方であつたし、田地も十分についてゐたし、境内も廣い廣いものであつたし、先々代の老僧な

どは、駕籠に乘つて伴廻りを三人も四人も伴れなければ決して戸外には出ないほどであつた。それに古い由緒が更にこの寺を價値づけた。寺の奥にある大きな五輪塔形の墓、苔の深く蒸した墓、それは歴史上にも聞えたこの土地の昔の城主なにがしの遺骸を埋めたところで、戦國時代にあつては、この城主は、この近隣數郡の地を攻略して、後にはその勢威がをさ〳〵一國を震慴させたといふことであつた。今でもその住んでゐた城の址はその村の西の一隅に草藪になつて殘つてゐるが、半ば開墾されて麥畠、豆畑、桑畑になつてゐるが、それでも館の址だけは開墾すると祟があると言つて、誰も鋤も入れずにそのまゝにして置いた。取卷いた壕の跡には、深く篠笹が繁つて、時には雨後の水が黑く光つて湛へられてゐるのが覗かれた。春はそこから出て野に行く道に、蓮華草や菫の一面に咲いたところがあつて、村の小娘達はそれを採つては束にして終日長く遊んでゐるのを誰も見懸けた。

梅雨の降頻る頃には、打渡した水の滿ちた田に、菅笠がいくつとなく並んで、せつせと苗を植ゑて行つてゐる百姓達の姿も見えた。かれ等は用水の漲つて流れる緣を通つて、この昔の館の址の草藪に埋められてある傍を掠めて、そしていつも揃つて野良の方へと出掛けて行つた。

少くとも、この日村では、半ば野に、半ば丘に凭つてゐるこの日村では、その城主の館の址と、五百年も前からあつたといふ寺と、その寺に殘つてゐる苔蒸した墓と、この三つが、長い『時』の力の中に僅かに滅びずに殘つてゐるもので、それ以外には何物も昔の跡を語るものはなかつた。寺の大檀越で、

舊家で、昔は寺の爲めに非常に寄捨をしたといふSTといふ家でも、その分家の分家が僅かに小さく殘つてゐるばかりで、古い苔蒸した無數の墓の外にはその昔の何事をも語らなかつた。唯、雲雀が高く囀つて空に上つた。

今から數年前であつた。ある夏の日の晴れた午後の日影を受けて、此處等にはつひぞ見たことのない新しいパナマ帽を冠つた、絽の紋付の羽織にちやんと袴を着けたハイカラの若い綺麗な紳士が、銀の環の光つたステッキをつきながら、村長につれられて夥しく荒廢したその無住の寺の山門へと入つて來た。

こんな會話を二人はした。

『えらく荒れてますな！』

『どうも……好い住職がないもんですから……それに、もとの住職が寺の借金を澤山殘して行つたもんですから……。』

『もう、長くゐないのですか、住職は？』

『八九年になります。』

村長は丁寧な言葉で深く尊敬するやうにして話した。

紳士は庇の落ち、軒の傾き、壁の崩れてゐる本堂の中に下駄のまゝ上つて行つたり、留守居の男の淋

しさうに住んでゐる古い庫裡の方へ行つて見たりした。奥の苔の蒸した五輪形の墓の前に行つた時には、紳士は長い間跪いて手を合せた。

この紳士は今朝突然この村にやつて來た。そして村長の宅を訪ねた。かれは其處から一里に近い田舍町の旅舍に昨夜わざ〳〵やつて來て宿を取つてゐたのであるが、その出した名刺を見た村長は、俄に言葉を丁寧にして、紳士の綺麗な顏を恐る〳〵見た。名刺には田舍の村長を驚かすに足る官名が書いてあつた。

紳士は寺のことを聞き、墓を聞き、またその昔の館の址を聞いた。今だに壕の跡が依然として殘つてゐるといふことを村長から聞いた時には、紳士の顏にはある深い感動の表情が上つた。やがて紳士はその墓と館の址とを殘して永久に立去つた昔の城主の遠孫であることを村長に話した。村長は愈〻辭を低うした。

『何も他には殘つてはゐませんかな。』

『何も……舊家といふのも大抵潰れて了つたものですから……。』

『ふむ……。』

かう言つたが、『さうすると、その先祖は小田原に亡されて、それから、野州に行つて、そこで今の主人を持つたんですな。何でも、野州で今の藤侯の家來になつたのは、こゝに墓のある人の孫に當つてゐるさうですから……。』

『さやうで御座いますか。こゝから、お跡が野州に?』

かう村長は別に感動するやうな風もなしに言つた。

紳士は最初に村の西の隅にある館の址に行つた。濠、草や篁に埋められた壕、それもかれには非常になつかしさうに見えた。かれはわざわざ草藪をわけて、その小高いところまで入つて行つた。しかし其處には何もなかつた。

『城ッて言つても、その時分は、館なのだから——』

こんなことを獨言のやうに言つた。で、そこを出て、かれは用水緣の路にその都人士らしい姿を見せつゝ寺の方へとやつて來た。途中では、丁度ひろい庭で麥を打つてゐる百姓達が連枷を留めてじろ〳〵かれの方を見た。

寺にも一時間ほどゐた。留守居の男が赤く濁つた茶などを勸めた。

かれは又訊いた。

『寺に、先代の弟子と言ふものもなかつたのですか?』

『大勢あつたのですけれども……。それも先々代のですが……。先住にはありませんけれど……。何うも皆な還俗したり何かして了ひましてな……。しかし、いづれは住職を置かないでは困るんですから、

そのうち好いのがあつたらと思つてはをりますのです。無住でおきましたから、もう先住の拵へた借金もあら方ぬけました……。』

『兎に角、由緒のある寺をかうして置くのは惜しい。』

『さやうですとも……。』

で、その紳士は多くの布施を置いてそして歸つて行つた。あとはまた長い月日が經つた。

二

新しく出來た住職は、四十二三位で、延びた五分刈頭、鐵緣の强度の眼鏡、單衣にぐるぐる卷いたへこ帶、ちよつと見ては何うしても僧侶とは思へないやうな風采であつた。『あれが慈海さんけえ？　何うしてもさうは思へねえだ。丸で變つちやつたな。何處かの別な人としか思へねえな。あの可愛い小僧さんとは何うしても思へねえ。』昔を知つてゐる年を取つた村の婆さん達はかう言つて噂した。

若い住職に取つても、あたりは餘りにひどく變つてゐた。變りすぎてゐた。これが昔のあの寺かと思つた。あの盛んな立派な堂々とした寺かと思つた。最初來た時には、これが先々代の老僧が威權を振つたあの寺とは何うしてもかれには思へなかつた。數年前に紳士がやつて來た時とは、更に更に寺は荒れた。裏の大きな垂木は落ち、壁は崩れて本堂の中は透いて見え、雨は用捨なく天井から板敷の上へと落

ちた。佛具なども、金目のものはもう何もなかつた。金の燭臺、鍍のキラキラと日に輝く天蓋、雲龍の見事な彫刻のしてあつた須彌壇、さういふものはもう跡も形もなかつた。本尊の如來佛が唯さびしさうに深い塵埃の中に埋められたやうにして端坐してゐるばかりなのをかれは見た。

庫裡から本堂に通ずる長い廊下は、風雨に晒されて、昔かれが老僧に叱られながら雜巾がけをしたところとも思へなかつた。中庭の樹木も唯繁りに繁つた。蜘蛛の網や塵埃や乞食の頭のやうにボサボサと延びた枝や――その中でも、金目な大きな伽羅の丸い樹はいつか持つて行つたと見えて、掘つたあとが大きくそこに殘つてゐた。唯、霧島の躑躅が赤くあたりを繪のやうにした。

年老いた世話人が來てかれにかれの先代――かれの兄弟子の話をした。

あのおとなしい靜かな兄弟子が、世話人の話すやうな殘忍無恥な、又は貪慾な、又は無殘な行爲をして、あの老僧の經營した寺をかうした廢寺にして了はうとはかれは夢にも思はなかつた。世話人の言ふ所に由ると、この先住の女戒を破つた形は殊に烈しかつた。最初の中は此方から身を躲して、こつそりさういふ土地に出かけて行つたが、後には平氣で、幅で、女を庫裡へ伴れて來ては泊らせてやつた。かれは放蕩のための金がなくなると、佛具を賣り、植木を賣り、經文を賣り、後には僧衣や袈裟までをも賣つた。たうとうそのために問題が大きくなつて、寺にゐられなくなつた。伐採した杉森の跡は、今でもちやんと指點された。

『今は何うしてゐるだらう？』

かう新しい住職はをりをり兄弟子のことを考へた。『何でも、東京に行つてゐるさうです。最後の女と淺草あたりで道具屋か何かしてゐるさうです。』かう世話人は言つた。しかし、それももう八九年も前のことであつた。今は死んだか生きてるかわからなかつた。

兎に角、庫裡……二三年前まで留守居の男のゐた庫裡を掃除して、そこに住居することの出來る準備を世話人達がして呉れた。黑く煤けた天井を洗つたり、破れた壁をざつと紙で貼つて繕つたり、園爐裏の縁を削つたり、疊を取り替へたりして、世話人達は新しい住職のやつて來るのを待つた。庫裡の前の庭も皆なしてかゝつて綺麗に掃除した。『長い間、無住にして置いたので、金はいくらかは出來てるだで、二三年したら、本堂の修繕も出來ると思ふが、まァ、それまでは我慢してゐて下せい。これも先々代の寺だと思つてな。』かう世話人達は新しい住職に話した。

三

『老僧だつて、決して女戒を守つた人ではなかつた。』

かれはかう思はずには居られなかつた。……ふとある光景が浮んで來た。それは新しい住職がまだ此寺に貰はれて來たばかりの時であつた。老僧も六十位であつた。ふと二階へあがつて行く。さつきの女

がまだゐる。綺麗な女が……。時々やつて來て三味線なんかを彈く女が……。扉を明けると、老僧の赤い顏、太い腕、女の變に笑つた顏！

と、今度はそれと違つたあるシィンが浮び出して來た。かれはもう十五六であつた。

かれは庫裡の玄關のぢき傍の三疊——さつきそこをかれは明けて見た。一杯蜘蛛の網、山のやうに積つた塵埃、ぷんと鼻を撲つて來る『時』の臭ひ、なつかしく思つて明けては見たが、かれはすぐその扉を閉めて了つた。その三疊の格子の前のところで、輕い艶めかしい駒下駄の音が來て留つた。かれは幼心にもそれが誰だかちやんと知つてゐた。そこから眞直ぐに向うに行くと、鐘樓——それは今でもある。その鐘樓の隣りの不動堂、蠟燭の灯、讀經の聲、消えたことのない不斷の火、その賑やかな光景の向うには、更に一層賑やかな明るい灯、料理店、湯屋、三味線の湧くやうにきこえる音、月の光の下に巧い祭文語が來て、その周圍に多數の男女を黑く集めてゐる——そこからその輕い艶かしい足音がやつて來たのであつた。

かれは默つて經を前にして坐つてゐる……。と、こと〳〵と音がする。唾で窓の紙をぬらす氣勢がする。黑い瞳をした二つの笑つた眼が其處に現はれた。

『慈海さん！』

かうその靜かな聲で言つた。

默つてゐる。

『慈海さん！』

まだ默つてゐる。

しかしかれは自分の小さな心臟の烈しく動くのを感ぜずには居られなかつた。二つにわかれた心、その幼い時ですら、かれはその『二つのわかれた心』を既に深く經驗してゐた。その涼しい二つの眼ではない方の眼、可愛い涙をふくんだやうな眼、それでゐて怒るとこはい眼、さういふ眼をかれは恐れた。その眼がすべてかれの後にあるやうな氣がした。

『慈海さん！』

また女は呼んだ。

『あとで、あとで……。』

『そんなことを言つちや、いや――』

かう言つて頭を振つてゐるのが窓に映つて見える。

『ぢや、待つて……』

かう言つてかれは立上つた。

かれは其處を出て、この庫裡――園爐裏のあるこの庫裡に來た。今と少しも變らないこの庫裡に……。

現に、その板戸がある。竹と松の繪が黑く烟に煤けた板戸が依然としてある。その庫裡に何のために？その一つの心をわけた方の怒るとこはい眼が何處にゐるかを見るために――。

幸ひにその眼は其處にゐなかつた。かれはこつそりと玄關の戸を明けて、そして戸外へ出た。月の美しい夜であつた。樹と樹と重り合つた黑い影がところどころに絣のやうなさまを展げた。本堂の灯がほつつりとさびしく見えた。

かれはあたりを見廻した。

其處にゐる筈の女の影が何處に行つたか見えない。屹度調戲ふつもりに相違ない。かう思つて靜かに樹の影の中に入ると、影と影の重り合つた中に、更に濃い影があつてそれが動いてゐる。急に、微かに笑ふ聲がした。つゞいてかれは柔かい女の腕の自分に絡みついて來るの感じた。女の髮の匂ひがした……。

『慈海さん。』かう微かに女は言つた。

こんなことをかれはもう何年にも思ひ出したことはなかつた。それも、かれが深く戀したやさしい涙を含んだ眼の方を思ひ出さずに、却つてそれを思ひ出したといふことが不思議であつた。

その心が、そのやさしい心が、又は男を思ふ心が、今だに、廿五六年を經過した今だに、そこに殘つてゐて、その窓の下の空氣の中にちやんと殘つてゐて、そしてそれが自分の心に迫つて來たのではない

か。かう思ふと、かれは不思議な一種の恐怖を感じた。

もう死んでゐるのかも知れない。弱い身體の女だつたから、おとなしい女だつたから、不仕合せな女だつたから……。と、その肉體が亡びて、その思ひだけがその空氣の中に生きて動いてゐるのかも知れなかつた。そんなことはない筈だ。かう打消しても打消しても、矢張それがついて廻つた。

ふと氣がつくと、自分は蚊帳の中に寢てゐるのだつた。それは圍爐裏のある隣の一間であつた。世話をする婆さんの寢てゐるいびきの音は向うの間からきこえて來てゐる。蚊のぶんぶん唸る聲が聞える。かれは容易に眠られなかつた。

『遠い昔だなァ――』

かう思ひあつめたやうにしてかれは考へた。

此間も一度さういふことを考へたが、其夜もかれはかれ自身と放蕩無殘な行爲をした兄弟子との二つの生活をつゞいて考へずには居られなかつた。兄弟子は慈雲と言つた。かれより四つ五つ上であつた。學問も出來て老僧の氣に入つてゐた。老僧の了簡では、それを柔しい涙を含んだ眼の持主の配偶者にしようと思つたらしかつた。現に、かれが寺から東京へ、僧から俗へと移つて行つたのも半ばそのためであつたのであつた。十九でかれはそれまで學んだ佛の道を捨てた。それからそれへと種々なことをして歩いた。臺灣にも行けば滿洲にも行つた。佛の戒めた戒律をわざと破つて行くやうに見えるほどそれほど荒んだ生活をやつて來た。或は寺にゐられなくなつた兄弟子よりも、もつと〳〵烈しいデカダンの生活を送つて來たかも知れなかつた。

寺の世話人――今度此處にかれを伴れて來た寺の世話人に東京でゆくりなく逢つた時、かれは寺のことを聞き、老僧のことを聞き、兄弟子のことを聞き、最後に柔しい涙を含んだ眼の持主のことを聞いた。

『さうですか、K町に行つてゐますか。K町の商人の妻になつてゐますか。それは何より結構ですな……。子供は？　へゝえ、御座いませんか。一體、何方かと言へば體の弱い女でしたからな。』

かう何氣ない風をしてかれは言つた。

世話人の話で、かれは始めてその寺の娘が兄弟子の妻にならなかつたことを知つたのであつた。世話人はつゞいて話した。『いゝえ、別にさういふわけではないですけれども、……老僧のある中は、隱居してからも、先代ほ固かつたのですけれども。ふとしたことから……、さァ、そのふとしたことは何ういふことかわかりませんけれど、兎に角急にあゝいふ風に、惡魔でも魅入つたやうになつてしまつたものだから。』

『娘の片附いたのは、老僧が死んでからですか？』

『いえ〳〵、貴方が寺をお出でになつてから二年ほど經つか經たないほどです。』

『さうですか……。』

意想外な氣がかれはした。

それからそれへと種々なことを思つてゐる中に、かれはいつとなく睡眠の襲つて來るのを感じた。そのまゝぐつすりと寢込んで了つた。

朝起きると、日がもう高くあがつてゐた。婆さんはもうとうに起きて、廣い勝手元で、昔のまゝの土竈で、釜と火箸で朝飯を炊いてゐるのを見た。何を見ても、昔のことが思ひ出されないものはなかつた。かれは夏草に半ば埋められた井戸を見た。本堂から山門につゞいてゐる長い敷石を見た。それも依然として元のまゝである。唯、その時分には掃除が綺麗に行屆いて、その石に添つて松葉牡丹の赤く白いのが長く見事に咲き續いてゐた。

かれは横楊枝で齒をみがきながら、鐘樓から、昔賑やかであつた不動堂の方へと足を運んだ。そこでは不動堂の他にかれは殘る何物をも發見することが出來なかつた。門前町と言ふほどではないが、一時は兩側に人家が並んで、參詣者がかなり遠い處からやつて來た。やれ護摩をたけの、やれ蠟燭を呉れのと言つて、かれも慈雲も忙しい思ひをした。しかもその人家は『時』の大きな手にすつかり掃つて取去られて了つたかのやうに一軒もそこに見出されなかつた。すつかり桑畑と野菜畑とになつてゐた。何う考へて見ても、其處にあの遊蕩の氣分が渦卷き、三味線の音が聞え、赤い裾をチラホラさせた色の白い女

達が往來し、老僧は老僧で、同じ年恰好の世話人と一緒にあの湯屋の二階の女を傍に終日碁を打つてゐたとは思へなかつた。かれは不思議な氣がした。瞬間も『址』をつくらずに置かない『時』が恐ろしいやうな氣がした。そしてその『址』が唯だ『址』として埋められては了はずに、いつかそれの再び蘇つて來ずには置かないやうな氣がした。

かれはもう不動堂の中の荒廢した形をのぞいて見る元氣も何もなかつた。昨年のあの時から習癖になつた恐怖――いつ襲つて來るか知れない災厄の恐怖がかれを少なからず不安心にした。かれは急いで庫裡の方へと引返した。

四

自分ももう少しであの『恐ろしい群』の一人になるところではなかつたか。あの時もし東京にゐたならば――。

外國でなければ見ることの出來ないやうな事件、乃至は空想したロオマンスでもなければ出逢ふことの出來ないやうな事件、かれ等は皆獸のやうに一人々々引き出されて、斷罪の場にひかれて行つたのであつた。

意志の實行――意志の實行のために虐げられた人間の魂ではなかつたか。あらゆることを實行しても

差支ない。世に罪惡と言ふものはない。惡と言ふものはない。唯自由があるばかりである。責任を負ひさへすれば――。かう言つたが、その責任が卽ちかれ等の死ではなかつたか。

その意志の實行は、果して死を價値してゐたか否か。ゝつて考へて見なければならない餘地はないか否か。かれ等は少くとも犬死ではなかつた。すぐれた芽を蒔いたには相違なかつた。しかしその芽を蒔かなければならないほどの必要をかれ等の魂は感じつゝあつたのであらうか。

かれは失敗して本國に歸る舟の中でそれを聞いた。かれはその時の烈しいショックを忘れることが出來なかつた。急にかれの世界は狹くなつたやうな氣がした。其處にも此處にも自分を監視する眼がついて廻つてゐるやうな氣がした。かれは自分の舟の本國に向つて航しつゝあるのを恐れた。かれは船室の中にのみ閉籠つた。

エイア・ブウルからは美しい碧い海が見えた。行つても行つても海である。掀翻し、飛躍し、奔跳する海である。その上には時には明るい朝日が照り、わびしい黃い夕日が落ち、赤い湧くやうな雲が浮んだ。『群』の人達の記憶は拂つても拂つても絕えずかれの魂を襲つた。かれは時にはいつそ身を海中に躍らせようと思つて甲板の上を往來した。

――『何うです、一度故鄕の寺に歸る氣はありませんか。あなたが跡をついで下さるなら、それに越したことはないのですが、世話人達も、村の者共も、貴方ならば喜んでお迎へするにきまつてをります

が。』かうその世話人から言はれた時には、そこより他に、その古い人知らない田舍の廢寺より他に、自分の身を、體を置くところはないやうにかれは思つた。老師の魂が荒んだ自分の魂を救つて呉れるやうにすらかれは思つた。

かれは尠くとも落附いて考へて見なければならないと思つた。これまでに自分のやつて來たことは、すべて皆失敗に終つた。あらゆる悲喜、あらゆる事業、あらゆる思想、すべて皆な不自然であつた。自由を欲する――唯この一語にすら、かれはあらゆる矛盾と撞着とを感じた。意志と魂との區別も、もつと深く靜かに考へて見なければならなかつた。それには、田舍の山の中の寺、廢寺、何の束縛もないのが好いと思つた。餘りに多く世に染まりすぎた。世間と人間とに捉はれすぎた。靜かに休息させて下さるなら……一二年行つて見たいからといふ手紙をかれは世話人に書いた。

かれは郊外の或る家に置いた自分の書籍――かれやかれの『群』が一生懸命に讀んだ書籍、パンの問題、精神の問題、自由意志の問題、さういふことを書いた澤山の書籍をある日古本屋を呼んで賣つた。古本屋に何も知らない半ば老いた男であつた。この書籍の中に、人間の意志が、魂が、恐怖が、事件が一々こもつてかくされてあるのは夢にも知らずに、平氣でそれに評價をつけて、錢をちやら〳〵そこに勘定して置いて、そしてそれを背負つて行つた。

かれはあらゆるものを捨てゝ、着物を入れた行李一つを携へて、そしてこの故鄕の寺へと來た。

五

寺に來てから、かれは種々な人達に逢つた。世話人の重立つた人達、それは昔見た時よりも年を取り白髪が多くなつてゐるばかりで、矢張或者は青縞の製織に、ある者は小作の取り上げに、或者は養蠶の事業に一生懸命に携はつてゐるのを見た。世の中にあつた種々な大事件、恐ろしい戰爭の殺戮、無辜のものの流るゝ血、乃至は新しい恐ろしい思潮、共同生活を破壞する個人思想、意志と魂との扞格、さういふものがこの世界にあらうなどゝは夢にも知らずに、朝は早く起き、夜は遲く寢て、唯その家業にのみいそしんでゐるのであつた。かれ等は廣い世の中を知らなかつた。都會の生活をも知らなかつた。文明といふことも、新聞の上で見るばかりで、それが果して何んなものであるか、何ういふことであるかを知らなかつた。いろいろな恐しいこと、醜いこと、聞くさへ眉の蹙められるやうなこと、さういふことも、ほんの一時の黑雲の影のやうなもので、その耳目から早く早く通過して行つた。そしてあとには田舍の平和がいつも殘つた。

かれ等の若い者は、婚し、生殖し、生活して、唯年月を經て行くのであつた　かれ等は循環小數のやうに子供から大人になり大人から老人になり老人から墓になつて行くのであつた。春が來て花が咲き、秋が來て紅葉が色附き、冬は平野をめぐる遠い山の雪が美しく日に光つた。

『何うも今年は雨が少くつて、田植にも困つた。一雨來れば好い。』

かれ等は何百年前から繰返した徽の生えたやうな言葉をくり返してのんきに生活した。

勿論、その間にも、家々の浮沈がないでもない。それはかなりにある。ある家では息子が放蕩で田地の半を失つた。ある家では養蠶に成功して身代がその三倍になつた。ある家では次男息子が學問好きで大學まで行つてこの夏學士になつた。かれの知つてゐる、かれと同じに遊んだ貧乏人の息子は、田舍では何うすることも出來ないので、東京へ出かけて行つて、種々の艱難辛苦を嘗めた揚句、貧民窟近くに金貸の看板をかゝげて、十年間に巨萬の財産を造つた。今では東京に大きな邸宅を構へて、大名のやうな生活をしてゐるといふことであつた。

これが世の中の變遷である。しかし、さういふことが、さういふ表面の運が、どれだけの意味を持つてゐるのであらうか。かうは思ふものゝ、かれは時々、『それが人生ではないか。それが本當の人生ではないか。自分のやつて來た生と死、戀愛、個人と自由、さういふことは、餘り深く自己に執着しすぎたためではないか。』といふやうにも飜つて考へて見た。

『そんなことはない。』

かれはすぐかう打消した。

かれはあらゆる艱難の中をも、巴渦の中をも、恐怖の中をも通つて來た。そしてその中からすぐれた

眞珠の玉のやうな寶をつかんだと思つた。しかし、つかんだと思つたその珠は、いつの間にかかれの掌中から落ちて行つてゐた。

かれは時には一里ほどある町の方へと出かけて行つた。麥稈帽をかぶつた單衣に絽の古びた羽織を着たかれの姿は、午後の日の暑く照る田圃道を靜かに動いて行つた。町は市日で、近在から出た百姓がぞろぞろと通つた。種物屋の暖簾は、昔と少しも異らずに、黑い地に白く屋號をぬいて日に照されてゐるのを見た。氷屋の店では、赤い腰卷をして田舍娘が二三人腰をかけて、氷水を匙ですくつて飲んでゐた。

ある店の前を通ると、

『慈海さんぢやないか？』

かうある婆さんがいきなり呼んだ。ちよつとはその誰れであるかゞわからなかつたが、暫くしてそれは不動堂の前の湯屋をした上さん――その時分は三十位でいきな如才のない上さんであつたといふことがわかつた。『まァお上り……歸つてゐるつて聞いたから、一度逢ひたいとは思つてゐたんだよ。』かう言つてかれは無理に引上げられた。上さんは亭主に四五年前に死なれて、今は息子が家のことを萬事やつてゐた。湯屋から町へ出て、今の小間物商を始めたといふことであつた。

話の中には再び昔の不動前の賑やかな光景が蜃氣樓のやうに浮んで來た。老僧、世話人、三味線、賑

やかな參詣者、上さんに取つてもその一時代は追憶の最も派手なものであるらしく、それからそれへといろいろなことが浮び出して來た。こつちから訊ねもせぬのに、寺の玄關の三疊の窓へ來た女のことをも上さんは話した。

『あれもな、不仕合せでな。足利に行つてついこの間まで一人でゐたが、今ぢや亭主でも持つたか何うか。』

かう上さんは話した。

其處を出てかれは猶あちこちと町を歩いた。上さんの話で、自分が長い年月種々な經驗を體感した間に、この昔馴染の人達がいかに生活してゐたかと言ふことが漸くわかつて來たやうな氣がした。かれは自分の辛い恐しいデカダンの生活を思ひながら、町の外れに出來た小さい停車場の方まで行つて見てそこから引返した。

六

かれが來て、最初にやつて來た葬式は、生れて一月しか經たないといふ子供の棺であつた。

『其處へ持つて來て置いたで、ちよつくらお經を讀んで吳れなせい。』父親らしい男は庫裡の入口に顏を入れてのんきさうに言つた。

夕暮の色は既に迫つてゐた。

かれは外に出て見た。果して小さい棺が山門と本堂との敷石の上に置いてあるのが白くさびしく見えた。

かれは傍に行つた。

『穴は掘つてあるのか？』

『今、掘つてらあ！』

見ると、もう一人の男が墓地の方で頻りに鋤を動かしてゐるのが見えた。

『本堂へ持つて行つたら？』

『さうすべいか。』かう言つたが、『新しい和尚さんだで、餓鬼も浮ばれべい。』

こんなことを言つて、輕々とその棺を持つて、さながら小さな荷物でも運ぶやうにして、本堂の前の木階――それはひどく壞れた木階を上つて、賽錢箱の向うに置いてある棺臺の上に置いた。

かれは古い僧衣に袈裟をかけて、草履を穿いて、廊下から本堂の方へと言つた。もう蚊がわんわんと音を立てゝゐた。歩くとそれがバラバラと顔に當つた。

かれは一本持つて來た蠟燭を取出して、それにマッチをすつて火を點した。本堂の中はもう眞暗であつた。蠟燭の火は靑くかれの鬚の濃い顔を照した。つゞいて奥に寂然として端坐してゐる本尊の如來の

像を微かに照した。

流石にかれは經を忘れなかつたが、しかし不思議な氣がせずには居られなかつた。かれは讀んで行く經の中に自分の遠い過去が再び蘇つて來たのを感じた。始めは靜かであつた聲は次第に高くなつて行つた。その聲の中にはまだけがれない無邪氣な心が籠められてあつた。

暫くの間、その讀經の聲は、荒れたさびしい本堂の中にきこえた。

で、それがすむと、その父親は、そのまゝ小さな棺をかついで、サッサと墓地の方へと行つた。かれは不思議な氣がせずには居られなかつた。かれはその姿の夕暮の闇の中に見えなくなるまで見送つた。

『佛は人間のことのすべてを知つてゐる。人間の犯した過去の罪を總て知つてゐる。』かう思ふと、かれは其處に落附いてぢつとして立つてゐられないやうな心の恐怖を感じた。

急いで庫裡へと戻つて來た。

『何故、あの時、あの女はあの子を抱いて井戸に身を投じたであらうか。何故？　何故？』かうかれは心の中に絶叫して、長い間その答を待つたが、竟にその答はやつて來なかつた。自己は自己である。愛した女だとて、自己の總てを占領することは出來ない。それが出來ない爲に死んだとて、恨を他に投げかけて死んだとて、それが誰の責任になるであらう。占領させなかつたこの自己がわるいのか。それとも又それを嘆いて子を抱いて死んだ女がわるいのであらうか。かれは其時は唯、『自己』に取縋つて强ひ

てその苦痛を處分した。しかしそれで完全にそれが處分され解釋されたであらうか。かれは今でもその溺れた女と子供とが自分に向つてその解釋を求めてゐるのを覺えた。かれはぞつとした。

七

渡船小屋の雁木がずつと川に延びて行つてゐた。そこには船が一隻繫いであつた。人が五人も六人も乘つて、船頭の下りて來るのを待つてゐる。大きな河は傳馬やら帆やら小蒸汽やらをその水面に載せてたぷたぷとして流れてゐる。艪の聲が靜かに日中の晴れた水に響いた。

帆が鳥の翼のやうに大きく動いた。

土手の上には、人や車が陸續として通つてゐた。氷店、心太を桶に冷めたさうに冷して賣つてゐる店、赤い旗の立つてゐる店、そこにゐる爺の半ば裸體になつた姿、をりをりけたゝましい音を立てゝ通つて行く自動車、川の向うに見えてゐる大きな煙突から渦まきあがる煤烟、――ふと、『あれ、あれ！』とけたゝましい聲が起つた。

其方を振向くと、丁度、今二十位になる女が、派手な着物を着た女が、その渡船小屋の雁木の少し手前のところから水へと飛込んだ處であつた。

水煙がサッと立つた。

『身投げ！　身投げ！』

かう言ふ聲が其處此處から起つた。誰の心も皆なそれに向つて躍つた。

丁度その傍を大きな帆をあげた舟が通つてゐた。舵のところにゐた船頭もそれを見たらしく、急いで此方へとやつて來た。と、手が浮いた。淺黄がゝつた着物と帶とが見えた。しかし、船頭の持つた棹はそこに達しなかつた。

その手は、着物は又沈んだ。あとには大きな川のたぷたぷとした滑らかな水面。

『あゝもう沈んだ！』

『救けてやれ、おい船頭！』

暫くすると、

『南無阿彌陀佛――』

『可哀さうだわねえ。』

『まだ若いのに……』

かういふ聲がした。誰も見てゐるに忍びないやうな氣がした。

土手の上には、白樺色の蝙蝠傘と派手な鼻緒のすがつた下駄と――。

かうした光景は其處にも此處にも起つた。廣い世間には、かうして自から殺すものが何人あるかわか

らない。現に、今でも、かうして寂然としてかれが坐つてゐる間にも、さういふ悲劇が何處かで繰返されてゐるかも知れない。何のために、滿たされざる心のために、辛い辛い捨てられた心のために、痛い痛い刺戟のために……。

自から殺さうとしたことの一度ならず二度まであるかれに取つては、さうしたシィンが殊に堪へ難い痛い刺戟を與へた。

それは近いことではなかつた。かれに取つてはもう遠い昔だ。しかしをりをりその心の光景が描き出された。二つにわけられた心と二つに突き詰めた心と、この心は實は一つである。わけられる心も突詰める心も同じ心である。その區別は唯境遇に由るのである。その時の存在の形によるのである。一と一とぴたり合つたものは幸福である。一と二と合つたものは不幸である。しかし幸福と言ひ、不幸と言つても、それは共に外形であつて、もう少し深く考へると、幸福なもの必ずしも幸福でなく、不幸なもの必ずしも不幸でない。何の故に？　一つと一つと合つたものも矢張もとは二つのもので、永久に一つであることは出來ないが故に——。一つと二つと合つたものも、遂には一に歸さなければならないが故に——。

自己の持つたものを失ふの辛さ、自己の持ち得たと思つたものを失ふの辛さ。これほど辛いものはない。それがよく女や男を川へと伴れて行く……。

かれは其處まで考へて、大きな溜息を吐いた。そこに大きな缺陷があるやうな氣がした。染まるべからざるものに染つて行く可能性を賦與した自然は？　絶對に自己のものにする事の出來ないものを自己のものとなし得る可能性を賦與した自然は？　滿たされたる心の飽滿から生ずる倦怠、餓やされたる心の寂寥から起つて來る憧憬、これは實は一つであるのではないか。同じことではないか。

しかし滿されざる心と餓やされたる心とは同じでない、飽滿と寂寥とは同じでない。倦怠と憧憬とは同じでない。それでゐてこれが同じであると言はなければならなくなるのは何の故であらう。死にまで深く染着した心は美しくはないか。勇ましくはないか。雄々しくはないか。また優しく悲しくはないか。これが人間の最後の『詩』であり且つ『宗教』ではないか。

文明は虚僞を生んだ。デカダンを生んだ。勝者の權利を生んだ。『自己』を生んだ。現にかれなどはそれを眞向に振翳してこれまでの人生を渡つて來た。知慧を戦はして勝たんことを欲した。自己の欲するまゝにあらゆるものを得んことを欲した。そのために、かれには富んだもの榮えたもの主權を把持したものがその對象となつた。山も丘も平野も一緒に平らにならなければならないと思つた。

しかし平等は物質にあるのではない。人生と人性との表面にあるのではない。勝利者にあるのではない。知慧と手段とを戦はして勝つたところにあるのではない。かう考へると、『恐ろしい群』の人達のことが、再びかれの胸に迫つて來た。折角さぐり出した祕密の絲がそこでぷッつり絶えてゐるのを感じた。

『あゝ、もうよさう、考へるのは止さう。もつと靜かに休まなければならない體だ。何事をも捨てたやうに、この簇つて來る千萬の考慮をも捨てよう……。』かう思つて、かれは庫裡の一間から出て來た。

いつもゐるところに婆さんがゐない。道具と言つては唯これ一つしかないと言つても好い長火鉢、その上には鐵瓶がかゝつて、しかも沸え立つてプウプウ白い湯氣を立てゝゐた。

かれはそれに水を足した。

そしてそこにあつた下駄をつッかけて戸外に出た。

廣々として美しく日にかゞやいた野がその前に展けた。夏のさかりの大地から湧き上る暑氣は、草にも木にも一面に漲りわたつて、キラキラとかれの眼と體とに反射して來た。

畠には笠をかぶつて百姓が頻りに草を取つてゐた。

ふと昨夜世話人がやつて來ていろ〳〵に言つた寺の經營の話がかれの頭にのぼつて來た。『兎に角、昔から由緒のある寺だから、この儘かうして置くのは殘念だ。何うか、貴方が來たのを機會に、昔のやうには行かなくとも、本堂も修繕し、庫裡ももう少し住み好いやうにし、寺としても餘り人に馬鹿にされない寺にしたい。……中興の祖には、貴方より他になつて下さるものはないんだから。』かう言つて、重立つた世話人は、寺の財産や、無住にして置いた間に出來た金や、乃至はその中から先住の借金を埋めた話などをした。かれはそれに對して深く心を留めてはゐなかつた。『段々さういふことにして……ま

ア、さう急がなくつても好う御座んすから。』かうかれは靜かに言つた。

かれの足は行くともなく墓地の方へと行つた。それもそこに行かうと言ふ意志がかれを其處に伴れて行つたのではなかつた。かれは唯ぶら〳〵と歩いて其方へと行つた。

墓地は昔と比べては頗る明るくなつてゐるのをかれは見た。それも先住がその後の杉森を伐つた爲めであつた。女に對する愛慾の結果がかうした形に影響するといふことも、彼には不思議なやうな氣がした。つゞいて先住と自分との生活がちよつと比べて考へられ、二人が會ては此處で同じ飯を食ひ、同じことを考へ、或は同じ寺の娘を戀したかも知れなかつたことがつゞいて頭に上つて來た。偶然——偶然。『本當に、偶然の二字でこれを解釋して了つて好いのであらうか。』

かれの今までの經驗は、何も彼もその『偶然』で解釋された。考へて不思議の境に至ると、『これも偶然の事實だ。』と考へて、そして片を附けた。時には內心に不滿足を感じ、餘りに疑惑の伴はない薄い心を感じたこともないではなかつたけれど、それ以外に、その『偶然』以外に何う解釋して好いかわからないので、有耶無耶の中にその不思議な心理を抑塞した。

それに、その『偶然』と考へる處に、あらゆるものを『無意味』にして了ふところに、一種微妙な科學の權威があつた。また肯定された科學の不思議があつた。敢て深く入つて行かないところに、勇ましい男らしさと誤りのない精確さとがあつた。知らないものは知らないものとしてこれから研究しよう、報

告しよう。知らないものを知り得ると考へるやうな危險な直覺は成るたけ避けよう。かう考へたところに、『偶然』の價値があるのであつた。しかしかれがこれに不滿足を感じ出したのはもう餘程前のことである。女と子供の溺死體を見た以來のことである。……突然かれの心は内から外に向つた。墓があらはれて來たのであつた。

要垣の綠葉に圍まれた墓があるかと思ふと、深い苔蘚に封じられた墓があらはれて來た。新しい墓もあれば、古い墓もある。或は五輪塔型、或は多寶塔型、其他いろいろな型がある。或は倒れてゐるのもあれば、長い間の風雨を平氣で凌いで來たらしいのもある。中にはその墓石の表面に佛像が刻まれてあるものなどもあつた。かれは立留つて一つ一つその墓を撫でゝ行きたいやうな氣がした。

かれは茫然として立盡した。

このかれの立つてゐる向うに、深い深い草藪があつて、その中に黑い暗い何年にも人の入つて來たことのない古池が湛へられてあつた。そこには雲の影も映らなければ、日影も滅多にはさして來ない。しかも人知れず埋れたその池の中にも、生物は絶えずその生と滅とを續けてゐるのであつた。夜は蛙の鳴く聲が喧しくそこからきこえた。

八

新しい住職の世話をするために來た婆さんは、始めの一人は十日ほども經たない中に、世話人の許に行つた。

『國から急病人があると言つて來たもんですから。』

かう言つて、二三日の暇を貰つて行つたが、日限が來ても、その婆は竟に歸つて來なかつた。二人目も五六日で暇を乞ひに世話人の許にやつて來た。

三人目、四人目……。

世話人は訊いた。

『何うして、さうだらう。何か和尚がいやなことでもするのかな?』

『いゝえ。』

別にさうしたことがあるのでもないらしかつた。ある婆さんは言つた。『でもな、ひとりぢや淋しいだ。和尚さん、何も言はないで、一日自分の室に引籠んでゐて、話もしねえから——。』

『出て來ねえか。』

『出て來ねえどころか、飯に呼んでも、それがすむと、すぐ居間に入つて行つて了ふだでな。』

『本でも讀んでるのか？』
『いや、本なんか一册もねえ。』
『ぢや、物でも書くのか？』
『書きもしねえ。』
『それぢや唯ごろごろしてゐるのか？』
『唯、一日中ちやんと、机に向つて坐つてゐるだ。』
かう言つて、その婆さんは、比較的詳しくかれの平生の狀態を世話人達に話した。葬式が來ると、古びた僧衣を引かけて、默つて本堂に行つて、いつものやうにお經を讀んで、それがすむと、そのまゝ元のやうにその居間へ行つて坐つた。
『朝のおつとめは？』
『朝のおつとめなんかしねえ。』
『ぢや、葬式の時きり、お經はよまねえんだな？』
『さうだな、まア、よまねえつて言ふ方が好いだんべいな。それでも、此間雨のふるさびしい日に、何うした拍子か、大方和尙さんも淋しかつたんだんべい。本堂でお經を上げてゐる音がするから、不思議に思つてそッと行つて見ると、本尊樣の前で、一生懸命にお經を讀んでゐるだだ。それもいつもの葬式

の時などに讀むやうな小さな聲ぢやねえだ。大きな聲で、後ろに私が行つて見てゐるなどは夢にも知らねえで、一生懸命に讀んで御座らつしやる。……不思議な氣がしたにも何にも……。』
『淋しいんだな、矢張……。』
『淋しかんべいよ。』
世話人達は、これでは駄目だと思つた。折角、寺の復活を考へて伴れて來たが、これでは駄目だ……。しかし、一人あゝして放つて置くといふことが間違つてゐるのである。何處の寺でも、今では女房子を持たないものはない。和尙にも一人相應なのがあつたら、持たせるに限る……。かう世話人達は寄り合つて相談した。
しかし、あの寺に、あの廢寺に、本堂に雨が洩り、庇が落ちてゐるやうな寺に、誰が女房になりに來るものがあるであらうか。『とても來手はねえな。すたり者のねえッていふ女つ子だ。誰が物好きにあんな寺に行つてさびしい思ひをするものがあるもんか。』かうそこから出て來た婆さんは笑ひながら言つた。
世話人は猶いろいろなことを婆さんから聞いた。誰もたづねて來るものはないか。郵便は來ないか。又誰か訪ねて和尙は行きはしないか。——その答はすべて「No.」であつた。
ある日、世話人は二人して出かけた。一人はかれを都から此處に伴れて來たものであつた。かれ等は庫裡から入つて行つた。婆さんに出て行かれたかれは、ひとりぽつねんとして庫裡にゐた。かれはひと

りで土鍋で飯を炊いて食つてゐた。

『何うも世話をするものがなくつてお困りでせう？』

かう一人が言ふと、

『いや――』

『何うも矢張、お寺はさびしいと見えて、落附いてゐるものがなくつて困りましたな。』

『いや――』

『さぞ御不自由でせうな。』

『いや、別に……』

鬚の深く生えたのを剃らうともせずに、青白い肌膚の色をその中から見せて、さびしげにかれは笑つた。

世話人達が獰らして來た話を聞いた時には、かれは何等の答をも與へなかつた。

かれは唯笑つた。それも快活に笑つのたではなく、にやにやと笑つたのでもなく、反抗的に冷かに笑つたのでもなく――唯、笑つた。

暫くしてかれは言つた。

『まア、暫く、かうやつて、落附かせて置いて下さい。……イヤ、世話するものなぞはなくつても好

う御座んすから。』

『でも、相應なのがあつたら、一人お貰ひになる方が好う御座いませう。貴方だつてまだお若いんだから。』

『まア、その話は、もう少し先に寄つてからにして戴きませう。』

それよりも他に何も言はないので、世話人達は止むを得ずに引返した。

世話をする婆さんももうやつて來なかつた。かれは一人でその廢寺の中に埋れたやうにして住んだ。小さな土鍋、一つの茶碗に一つの味噌椀、皿はところどころ缺けたのが二三枚あつた。腹が減ると、かれは立つて、七輪に火を起した。

時には以前の生活がかれの心に蘇つて來た。新しい思想のチャンピオンであり、『恐しい群』の第一人者であり、デカダンの徒の一人であつたかれが、かうして田舍の廢寺の中に孤り生活してゐるといふ事が不思議に思はれた。廣い世間にも、かれ程有爲轉變の生活を送つたものはないであらう。また明るい影と暗い影と互に縺れ合つた生活をしたものはないであらう。罪惡と慈善との一緒になつた生活をしたものはないであらう。彼の心は時には一人の孤兒の爲め、一人の飢ゑた者のために振ひ立つた。また或時は欲求した染着した心の虜となつて、美しいものすぐれたものに向つてその魂を浪費した。かれは本當

なもの眞劍なものゝ探檢者であつた。本當のものを求めるためにかれは水火の中に入ることをも辭さなかつた。虎穴に向つて突進して行くことをも辭さなかつた。ふとかれは考へた。『かうしたいまの生活も矢張その探檢者の心ではないか。虎穴に向つて突進して行くものゝ心ではないか。』

さうだ、それに相違ない。昔は、聖者はあらゆる苦行を行した。一生を苦行の中に終つた人達もあつた。婆羅門の徒の苦行――そこまで考へて行つてかれは思つた。自分のこれまでの生活は、あらゆる苦行ではなかつたか。あらゆる忍苦ではなかつたか。放蕩もまた苦行、殘忍無殘もまた苦行、デカダンもまた苦行、『恐しい群』もまた苦行、歡樂もまた苦行ではなかつたか。美しい少女の肌に觸れ、美酒にあくがれ、音樂に心を蕩かしたのも亦苦行ではなかつたか。

山海の珍味を盡し、美を盡し、善を盡し、出るに自動車あり、居るに明眸皓齒あり、面白い書籍あり、心を蕩かす賭博あり、飽食し、暖衣し、富貴あり、名譽あり、一の他の不滿不平あるなくして、それでも猶ほ魂に滿たされざる聲を聞くのは何の故か。かうしたことも亦苦行の一つであるからではないか。

ふとある光景がかれの眼の前に起つた。それは恐ろしい光景であつた。弱きものゝ虐げられ、滅さる光景であつた。數本の足――或は毛深い、或は青白い、或は滑らかな數本の足がだらりと空間に下つて見られた。かれは思はず手を合せて、口に經文を唱へた。

次第に幼ない頃の空氣がかれの心の周圍に集り且つ醸されて來るのを覺えた。最早初めに來た時に感

じたやうな『孤獨』と『寂寥』とをかれは感じなかつた。また華やかな面白い『世間』に向つて引戻さるゝやうな心をも感じなかつた。

飢ゑを覺えた時に、かれは始めて立つて七輪の下を煽いだ。また、世話人の持つて來て置いて行つて呉れた四角の小櫃の中の米をさがした。

夕暮になると、夥しい蚊が軒に蚊柱を立てた。室の中を歩いても、それがバラバラと顔に當るほどである。かれは思つた。『これも自分と同じ生物だ。飢ゑたがために食を求めてゐるものゝ聲である。でなければ、生殖のために、不可解の生命の連續のために盲目の戀をしてゐるものゝ聲である。生命のために冒險をしてゐるものゝ聲である。『恐ろしい群』の人達のあげた悲鳴と同じ悲鳴を擧げるものゝ聲である。』

かれは思ひつゞけた。

『しかし、この冒險のためには、盲目の戀のためには、食を求めるためには、生死を問題にしては居られない。從つて、かれ等に取つて、生死はその運不運であり幸不幸であるのは勿論である。しかし、更に一歩を進めて考へて見る。運不運ではあり、幸不幸ではあるけれども、それ以上に生の力が、盲目の生の力が肯定されてゐるではないか。生死を問題にしてはゐられない境があるではないか。扞格した力の上に起つて來る悲劇は、これは何うも致し方がない。』

かれは苦行といふことについて、三日も四日も考へた。『苦行は僧や婆羅門の徒の行するものばかりではない。人間はすべてこれを行してゐるでないか。意識せると、意識せざるとの區別はある。蚊の食を求めるのもまた是れ行、盲目の戀をするのも亦これ行、生死も亦是れ行ではないか。』

かうしてゐる中にも、時は經つて行つた。ある夜は凄じい風雨がやつて來た。本堂ばかりではない、自分の居間にも雨が盛んに洩つた。

かれは裸蠟燭に火をつけて、それを持つて立上つた。あまりに凄じい音に起されて、その光景を見ようとかれは思つたのである。

破れた雨戸から雨が礫のやうに降込んで來た。從つて何處も濡れてゐないところはなかつた。廊下に出ようとすると、風が凄じく吹いて來て、手に持つた蠟燭は危くそのために消されようとした。

かれは袖でそれを蔽つた。

廊下には裏の林の木の葉が雨に濡れて散り込んで來てゐる。銀箭のやうな雨脚が烈しく庭に落ちて來てゐるのが、それと蠟燭の光に見える。裏の林は鳴つて、枝と枝との觸れる音、葉と葉とのすれる音が一つにかたまつて轟と言ふ音を立てた。空は墨を流したやうに暗かつた。

ともすると風に吹き消されさうになる裸蠟燭を袖で護りながら、一歩一歩長い廊下を歩いて行くかれの蒼白い鬚の深い顔が見えた。それは丁度罪惡の暗い闇夜に辛うじて佛の慈悲の光を保つてゐるやうに、又は恐ろしい心の所有者が闇の中に怖れ戦いて立つてゐるかのやうに……。

廊下の途中で、かれはまた凄じい風雨の吹き込んで來るのに逢つて、立留つて、その蠟燭の火を保護した。

轟といふ音、ザアと降る音、それがあとからあとへと續いてやつて來た。樹の鳴る音、枝の撓む音、葉の觸れ合ふ音、あらゆる世の中の雜音、悲しいとか佗しいとか辛いとか恨めしいとかいふ音が一齊に其處に集つてやつて來たやうにかれは感じた。

かれは漸く長い廊下を通り越して、本堂へ入つて行く扉の前に行つて、靜かにそれを明けた。

闇にもそれと見える屋根や庇の壞れたところから、車軸のやうに雨は落ちて來てゐた。堂の板敷はすべて水で滿たされてあつて、それに、かれの手にした蠟燭が微かに照つた。

この風雨の凄じい音の中に、この洪水のやうになつた大破した堂宇の中に、本尊の如來佛は寂然として手を合せて立つてゐられるのである。かれは自分の體が、魂が、又は罪惡が、欲望がすつかり佛に向つて靡いて行くのを感じた。かれはこの世では見ることも味ふことも出來ない光景に出逢つたやうな氣がした。かれの口からは思はず佛を念ずるの聲が出た。

贖罪——神の贖罪、佛の贖罪と言ふことが、漲るやうに、今迄つひぞ感じたことのないほどの強さを以てかれの總身に迫つて來た。かれはそのまゝ手にした蠟燭を燭臺の上に立てゝ、そのまゝ佛の前に來

て坐つた。

一しきり讀經の聲が風雨の吹き荒るゝ中に聞えた。

九

新しい覺醒が來た。

恐怖を感じ、寂寞を感じ、孤獨を感じ、倦怠を感じた時にのみ佛の前に行つて手を合せたかれは、今では自から進んでその本堂の本尊の前に行くやうになつた。最早かれの讀經はかれのための讀經ではなかつた。また佛に向つて合掌するかれの手は、かれのための合掌禮拜ではなかつた。新しい力はかれの魂を蘇らせた。かれはかれの後半生を佛の功德を讃するために用ゐることを悔いなかつた。

不思議の心理ではないか。また不思議な顚倒ではないか。かれは今まで消極的であつた自己を最早何處にも見出すことが出來なかつた。かれを苦しめたあらゆる幻影、恐ろしい溺死の光景、恨を含んだ心の形のあらはれた光景、絞首の刑に逢つた『恐しい群』の人達の光景、さういふ無限のシィンは最早かれを脅かすことはなかつた。新しい力は滿ちた。

貧、苦、乏、病に滿ちた世界である。それは皆我に着いたために起つて來たあらゆる光景である。ある國はある國と爭つて、無辜の血を流してゐる。ある人間はある人間と爭つて、互に虛僞の勝敗を爭つてゐる。デカダンはデカダンと相食んでゐる。惡と惡とは互にその牙を磨いてゐる。それは皆我に着した處から起つて來る。現に自分すらその染着を捨てることが出來なかつた。捨てることの出來ないがために、かれは『幻影』に脅かされた。この『幻影』――あらゆる世間の人達を絕えず苦しめるこの『幻影』のために、佛の前に手を合せなければならないと思つた。

ある日は殆ど一日本尊の前に行つて讀經した。世話人がやつて來て、用事を話さうとしても、かれは竟に其處から立上らうともしなかつた。世話人は仕方がないので、一度歸つてそして又やつて來た。矢張かれは讀經を續けてゐた。

寂然として端坐してゐる如來像、それはもう昔の單なる如來像ではなかつた。あの時ある人の手で鑄られたブロンズの佛像では猶更なかつた。かれは其の端麗な顏に、人間の慈愛を發見し、その威嚴を保つた表情に人性の根本に橫つた金剛の相を發見した。そしてまたその寂滅の姿には、着したものを拭ひ去つたあとの不動不壞の相の名殘なくあらはれてゐるのを發見した。今まで廣い空間に孤獨を歎き、自然の無關心を慨いた自己は、杳かに遠い過去に沒し去つた。今はその如來の像はかれに向つて話し懸けた。又かれに向つて微妙不可思議の心理を示した。

佛の前に端坐讀經してゐる時ばかりではなかつた。日常の坐臥進退にも、その本尊は常にかれと俱にあつた。かれと俱に笑つた。かれと俱に語つた。古い長火鉢の前に坐つた時にも、七輪の下を煽いてゐ

る時にも、暗い夜の闇の中に坐つてゐる時にも、をりをり颯風のやうに襲つて來る過去の幻影の混亂した中にも……。

かれの姿はをりをり寺の境内の中に見えた。幾日も頻に剃刀を當てたことがないので、鬚は深く顏を蔽つた。誰が見ても、かれが此處にやつて來た時の姿を發見することが出來なかつた。かれは夥しく變つた。

かれの立つてゐる垣の傍には、紅白の木槿の花が秋の靜かな澄んだ空氣を彩つて咲いてゐた。

十

『何うかしたな。氣がふれたぢやないかな。』

かう世話人は言つた。

『あゝして一人でゐるんだから、それも無理はないな。困つたもんだな。此頃は丸で此方の言ふことなどは取り合はないつて言ふ風だからな。』

かう言つて、ある人は首を傾けた。種々な人々が種々のことを言つた。

米をきまつて運んで行く一人は、『此間なんか、つい自分の忙しいのにかまけて、二三日米を持つて行くのを忘れてゐて、あわてゝ持つて行くと、もう櫃には米は一粒も殘つてゐない。あの和尙め、一日二日米を食はずにゐたと見える。』

『それで何とも言つて來ないのか。無けりや、乾干になつても食はずにゐるのか。何うしても變だな、不思議だな。』考へて、『此頃は前よりも一層何も言はなくなつて了つた。前には寺のことなどいろいろ心配したり何かしたが、此頃では、もうそんなことは少しも言はない。唯、默つて聞いてゐる。困つたものだな。』

寺の近くに住んでゐるある百姓の嚊は言つた。

『すつかり變つて了つた。もう元のやうな姿はなくなつた。そして、いつでもお經べい讀んで御座らつしやる。此間、本堂の前で出會したから、お辭儀をしたが、默つて莞爾と笑はしやつた。えらく痩せなすつたな。』

それでゐて、葬式が行くと、どんな貧乏なものでも、乃至は富豪でも、同じやうな古い僧衣を着て、袈裟をかけて、そして長い長い經を誦した。そしてその聲も初めに比べて、次第にその聲量を增し、威嚴を增し、熱意を增して來るのを誰も認めた。淋しい大破した本堂の中に漲り渡る寂滅の氣分は、女や子供、乃至は眞面目に考へる人達の心を動かさずには置かなかつた。他の寺の僧達の誦した讀經ではとても味ふことの出來ない微妙な深遠な感じに人々は撲たれた。

さまざまの評判の中に、秋は去り、冬は來た。木の葉は疎々として落ち、打渡した稻は黃く熟した。

ある朝は霜は白く本堂の瓦の上に置いた。村の人達は段々朝毎の寺の讀經の聲に眠をさまされるやうになつた。

十一

『淨乞食――淨乞食。』

口の中にかう言つて、かれは僧衣の上に袈裟をかけて、何年ともなく押入の中に空しく轉つてゐた托鉢を手にして、そして出かけた。

かれは藁草履をつッかけて穿いた。かれは寺を出て、一番先きに、近所にある貧しい長屋の人達の門に立つた。

破れた笠の中からは、かれの熱した眼が光つた。

『オ、オ、オー、オー。』

と言つて鈴を鳴らした。

ある老婆が、最初に五厘錢を一つその鉢の中に入れた。

かれに取つては、それは最初のまことの寄捨であつた。かれは老婆の冥福を祈つて長い間讀經した。

『乞食坊主、乞食坊主――』

あるところでは、大勢の子供達がかれの周圍を取卷いた。

かれはをりをり路の眞中に立留つて讀經した。

家から家へとかれは行つた。ある家では、

『まア、お寺の和尚ぢやないか。托鉢に出なすつたがな。世話人たちは何うしたんぢやな、米も持つて行つて置かないと見えるぢやな、もつたいない。』などゝ言つて、袋に入れた米を渡した。

かれの眼には、到るところでいろいろな光景が映つた。收穫の忙しい庭、唐箕のぐるぐる廻つてゐる家、あるところでは、若い女が白い新しい手拭で頭を包んで、せつせと稻を扱いてゐた。誰も彼も世のしわざにいそしんでゐた。しかし、この穩かな平和な田舍も、それは外形だけで、爭鬪、瞋恚、嫉妬、執着は到る處にあるのであつた。道ならぬ戀の罪惡、乾くことなき我慾の罪惡、他を陷れなければ止まない猜疑心、泥土に蹂躙せられた慈悲、深く染着しつゝもその染着をわるいと思はない心、さういふ光景は一々かれの眼に映つて見えた。

ある大きな家では、かれは長い間立つて讀經した。

『出ないと言ふのに、うるさい坊主だな！』

かういふ主婦の尖つた聲がした。

『やれよ、やれよ、一文やれよ、うるせい坊主だ。』

かういふ主人らしい男の聲が奥からきこえた。

やがて五厘は投げ入れられた。

しかしかれは讀經の聲をやめなかつた。また容易にそこを立去ることをしなかつた。靜かにかれは讀經をつゞけた。

かれ自身にもそれはわからなかつた。何ういふ理由で、その家の前で、さうして長く立留つて讀經しなければならないかと言ふことが解らなかつた。不思議の奇蹟がかれの心の周圍をめぐつた。

幼時に習つた經文に書いてあつた奇蹟、そんなことがあるわけがないと思つたやうな奇蹟、それが今不可思議の事實としてかれの前にあらはれて來た。古來存在した幾萬億の佛達、菩薩達の行が、言葉がかれの心に蘇つて來た。

かれの姿はあちこちに見えた。時には寒い碧い色をした小さな沼の畔の路に見えた。時には川添の松原のさびしい中に見えた。かと思ふと、ある小さな町の夕日を受けた家並の角に見えた。

寒い西風の吹き荒るゝ路を靜かに歩いて通つてゐたりした。

かれは日毎に出懸けては、家々の軒に立つた。

辛い悲しい生活をかれは其處此處で見かけた。しかしさうした生活以上に我々人間の大切なことがあるのを誰も知らない。人々はそれを知らないがために苦しんでゐる。慨いてゐる。その無知な、無辜な人

達のために、殊にかれは手を佛に合はせなければならないことを思つた。

ある寒い夕暮に、かれは自分の居間で默つて坐つてゐた。かれの衣は薄く且つ汚れてゐた。破れたところをかれは自分で處々繕つて着た。

『御免なさい。』

かういふ聲がした。

しかしそれはやさしい聲だ。若々しい女の聲だ。この頃では、世話人ももう滅多にはやつて來なかつた。かれ等は自分の勝手に托鉢に出たかれの行爲を不快に思つた。『あゝいふものに構つてゐては仕方がない。』かうある者は思ひ、あの者は、『餘りに勝手だ。何うかしたに違ひない。』と思つた。寺には人はつひぞやつて來なかつた。

『御免なさい。和尚さん、お留守ですか。』

かれは顔を其處に出した。見たこともない二十三四の若い女がそこに立つてゐた。

『何か？　用？』

女は顔を赧めたが、抱へて來た包の中から、一枚の綿入を出した。新しくはないが、綺麗に洗ひ、縫ひ疊んだ綿入を……。

『失禮ですけれども、これを和尙さんにさし上げたいと思ひまして……。私が心がけて、この間から洗つたり縫つたりしたものです。何うか、私の些かばかりの志だけを納めて下さいませ。』

かう言つた女はまた顏を赧めた。かれは深く心を動かされずには居られなかつた。かれは凝と女を見詰めた。

『志ばかりで御座いますから、何うか……』

『これは難有いお志だ。』

かう言つたきりで、かれの眼から涙がにじみ出さうとした。

しかしかれは何も言はなかつた。默つて禮拜合掌した。

十二

『ヤア、また、あの乞食坊主が何かしてらあ……』

かう言つて人達は其方の方へと走つて行つた。それは町の角である。長い町を通つてこれから寒い風の吹く野に出ようとする角である。通りかゝつた荷車や人足や女子供などが一杯に其處に立留つた。

深い鬚の中に明るく眼をかゞやかし、破れた僧衣に古い袈裟をかけ、手に珠數を持つたかれの前には、二十八九になる一目見て此處等に大勢ゐる茶屋女だとわかる女が、眼に涙を一杯に溜めて、そして矢張手

を合せて立つてゐた。

『坊主、女でもだましたかな！』

かうした惡聲を放つた人達も、そこに來て、その狀態を見ては、思はず不思議な思ひに撲たれた。

女は合掌して涙を流してゐる。そしてその前にゐる一人の乞食坊主――汚い坊主が神か佛でもあるやうに、それに向つて隨喜渴仰してゐる。

かれは唯默つて讀經した。

かれは五六日前に、その女の抱へられてゐる小さな料理屋の門に立つた。それは夕暮で、これから忙しくならうとする頃であつた。奧には、もう客が二組三組も來てゐた。そこの上さんは、面倒だと思つたかのやうに、一錢をその托鉢の中に入れてやつた。しかしかれは容易にその讀經と祈念とをやめなかつた。かれの心がこの門に引かれたと同じやうに、かれの讀經の聲に心も魂も歸依せずには居られないやうな女が其處に一人ゐたのであつた。それはかの女であつた。男に對する苦痛と罪惡とに日夜虐なまれ通しで生きて來たかの女であつた。かの女はその重荷に堪へかねた。

かの女は店から外に出て來て、かれの前に跪いて合掌した。

その話を聞いた時には、そこに集つた人達は皆な不思議な思ひに打たれた。

トボトボと野に向つて行くかれのさびしい姿を人々は見送つた。

『本當かな!』

『本當ですともな……。あの和尚さんは、普通の和尚さんではない。あゝして托鉢して歩いてゐるけれども、苦しい辛い罪惡がある家の前に行くと、きつと立留つて長くお經を讀んでゐる。きつとそれが中る。そのお經の聲がじつとその人の胸にこたへる。現に、私なんかも、その一人で御座います。私は心中をしました。男が死んで自分が生き殘つたのです。その時は別に何とも思ひませんでした。好いことをしたとも思ひませんが、生命があつて好かつたと思ひました。しかしそれが何んなにその後私を苦しめましたか。私は行く先き先きで、きまつて男から心中を誘はれました。男がそのために生命を失つたものは一人ではありません。そしてその度毎に、私はいつも生殘つて來るのでした……。あゝ、もうしかし、生きた佛に逢つて、この苦惱を救はれました。』かう言つて女は手を合せて珠數を繰つた。

『あの和尚さんは仰有つた。一度心中しそくなつたものは永久に心中のしそこなひをするものだ。姉を姦したものは、又必ずその妹を姦するものだとかう仰有いました。あの和尚さんは私の苦しみを救つて下すつた。佛に向つて手を合せるやうにして下すつた。生みの親の恩よりももつと深い。』かう女は群集に向つて言つた。

不思議な思ひに滿たされた群集の上に、薄暮の色は蒼く暗く押寄せて來た。

十三

不思議な乞食坊主の話は、時の間にそれからそれへと傳へられて行つた。ある者は否定した。ある者は肯定した。

否定したものは、『今の世に、そんなことがあつて堪るものか。それは丁度その女がさうした苦痛を持つてゐたからだ。自分の影だ。自分の影を見て驚いたに過ぎない。』と言つて笑つた。

『そんなことを言つて、良民を迷はすものは、捨て置かれない。第一、人の門に立つて乞食をするさへ邪魔なのに、その家の内部まで見え透かしたやうなことを言ひふらすのはけしからん……。警察で取りしまつて貰はなければならん。』

かう敦圉いて言ふものなどもあつた。慈海の生立を知つてゐるものは、『あの坊主、二十年振りで國に歸つて來たが、その間には何をやつて來たかわかりやしない。風説によると、何處にも行きどころがなくなつて、それであの寺に入り込んだつていふ事だ。油斷がなりやしない。現に、ちよつと見てもわかる。薄氣味のわるい眼をしてゐるぢやないか。』などと言つた。しかし中にはかれの不斷の讀經やら、寺に來てからの行狀やらから押して、普通の僧侶――其處等にざらにある嗅を持ち、被布を着、稼穡のことにのみ沒頭してゐる僧侶とは違つてゐるのに眼を留めるものなどもあつた。ある大きな青縞商の主人は

その一人で、その家の門に慈海の立つた時には、いくらか尊敬の念を以て、その姿と行動を凝視した。成ほど世間の評判のやうに、その讀經の聲に深く人の魂を引附けずに置かないやうな深遠微妙の調子を持つてゐるのをかれは見た。

『兎に角、普通の僧侶とは違つてゐる。』

かうかれは人々に話した。不思議な乞食坊主の話は、次第に村から町、町から野へとひろがつて行つた。

ある日、また一場の話が傳つた。それは町の外れに住んでゐる鋤や鎌や鍬などをつくる鍛冶屋の店での出來事であつた。鍛冶屋の亭主は岩乘な五十男で、これまでつひぞ寺にお詣りしたことなどはない男であつたが、その坊主が來て門に立つて讀經してゐると、忽ち深い感動に心を動かされたらしく、仕事をしてゐた金挺の手を留めて、いきなりその前に行つて、隨喜合掌した。

それを見てゐた弟子や嚊は吃驚してそれを人々に話した。

鍛冶屋の亭主は、聞く人がある度毎に言つた。『俺にもわからない。しかし、俺ァ、あのお經を聞いて手を合はせずには居られなくなつた。實際、俺ァ、何も知らずに來た。わるいこともわるいと思はずにこれまでやつて來た。女も何人泣かせたかわかりやしねえ。弟子共にも薄情な眞似をした。親には殊に不孝をした……。泣いても悔んでも足りねえやうな不孝をした。不思議だ。金挺を持ちながら、あのお經を

聞くと、急にそれが堪らなくなつて、自分で自分を忘れて、そして飛び出して行つた。えらい和尙さまだ。生佛だ。この恩は忘れられない。これからは俺は善人だ。』

かう言つて涙を流した。

これに限らず、さうした不思議の話は、その近所の町と村とを中心にして波動のやうにして傳つて行つた。ある時はひそかに嫂に通じてゐた小商人の店にあらはれて、それをして悔い改めさせた。ある時は長い間人知れず自から咎めてゐた殺人の罪を持つた男をしてその胸を開かしめた。父親の子を生んだ娘は泣いてその汚れた袈裟に縋つた。

その冬から春にかけては、何處に行つてもその噂が繰返された。『そんなことがあるものか。』と言つて否定した人達も、後にはそれを信じない譯に行かなかつた。

ある時には、その不思議を知りたいと言ふので、その町の唯一の大學生――心理學研究の大學生が、正月の休暇に歸省してゐるのを好い機會に、ある人達と共に慈海のゐる寺へと出かけて行つた。

荒廢した寺のさまが先づかれを驚かした。山門は半ば倒れかけてゐた。本堂は本堂で、庇は落ち、屋根は崩れ、草が一杯にそこらに生えてゐた。

つゞいて大學生を驚かしたのは、疊の眞黑になつた中に、ひとりぽつねんとして坐つてゐる僧の姿であつた。しかもそれは普通の僧侶のやうに頭も剃つて居なければ、僧衣も着てゐなかつた。普通のやう

にして慈海は話した。

大學生は一時間ほど其處にゐた。

別に話といふほどの話はなかつたが、その態度の片鱗にも、容易に知ることの出來ない心理が深くかくされてあるをかれは感ぜずには居られなかつた。その僧は新しい科學の話をも深い洞察と自信とを以てかれに話した。

大學生は歸つて來てから言つた。『さうですな。すつかり感心させられて了ひました。とても、私達にはあの境はまだわからない。普通の催眠術などと言ふものよりはもつとぐつと奥ですな。』

『矢張、不思議ですな。』

かう人々は言つて眼を睜つた。

十四

世間の罪惡が此頃では愈々深くかれの體に纏り着いて來た。

しかもそれは皆な自己を透して、立派な證券を持つてかれに迫つて來た。かれは愈々佛の前に手を合せなければならないことを感じた。

かれは求めざる處に集り、離るゝところに卽き、捨てたところに拾ひ得る心理を深く考へた。

かれは朝早く起きて本尊の前に行つて讀經した。

明けの明星の空に寒くかゞやく頃には、かれはいつももう起きてゐた。寄捨された暖かい衣はそこらに澤山にあつたけれど、かれは矢張一枚の衣しか着なかつた。櫃にも米が滿ちてゐたけれども、かれは一鉢の飯しか食はなかつた。

寒い朝は續いた。霜は本堂の破れた瓦を白くした。時には雪が七寸も八寸も積る時もあつた。食がなくなつて軒に集つて來る雀にかれは米を撒いてやつた。寄捨の米を、淨い心のあらはれである淨い米を……。人に食を乞ふ身は、生物に食を與へる身であることをかれは考へた。

感極つたやうにしてかれは默つて合掌した。

雀は、ちゝと鳴きながら、軒から其處に下りて來て、かれの顏を見るやうにして、又は食を與へて吳れるかれの恩を感ずるやうにして、首をかしげながら、小さな嘴で、雪の中に半ば埋れたやうになつてゐる米粒をついばんだ。中には、緣側まで入つて來るものなどもあつた。

今までに味ふことの出來なかつたやうな歡喜がかれの胸に漲り渡つた。

十五

垣に梅が咲き、田の畔に綠の草が萠える頃には、托鉢に出るかれの背後にいつも大勢の信者が集つて

ついて來た。

驚くべき光景が常にかれの周圍にあつた。鍛冶屋の亭主、靑縞屋の主人、苦しみを持つた女、戀にもだえた女、若いのも老いたのも皆なぞろ〳〵とかれの後について、合掌しながら歩いた。

初めの中は、町の警察の人達は、愚民を惑はすといふかどで、頻りにそれを取締つたが、しかもこの不思議な信仰の『あらはれ』を何うすることも出來なかつた。ところどころで、巡査が劍を鳴してやつて來て、その群に解散を命じた。一時は群集はあちこちに散つて行つても、瞬く間にまたあとからぞろぞろと續いた。店で仕事をしてゐた女が跣足で飛び出して來てその群の中に雜つた。

ある時は、寺の世話人達が町の警察署に呼ばれて行つた。

世話人は種々なことを訊かれた。しかしその不思議な僧の行爲の中には、あやしいやうなことは少しもなかつた。すべて自然であつた。愚民を惑はすための行爲らしい行爲は何處にも發見することが出來なかつた。

世話人の一人は言つた。

『何うも、私達も困つてをりますのです。實は、寺の再興のために呼んで來たのですが、私達の申すことや、普通の僧侶のしなければならないことや、寺のことは何にもせずに、朝からお經ばかりを讀んでゐるのですから……。米を持つて行かなければ行かないで、二日も三日も食はずにゐるやうな坊さんですから……。いゝえ、別に不思議なことをすると言ふのではありません。唯、お經を讀んでゐるばかりです。別に說敎めいたことは致しません。あゝして托鉢して歩いてゐるばかりです。』

署長も後には首を傾けずには居られなかつた。

かれのあとについて行く群集は、次第にその數を增した。或は町の角、或は停車場の方へ行く路、或は小學校の裏の畑、或は小川に沿つた道、さういふところを大勢の信者達はかれと同じやうにして合掌讀經してついて行つた。ある驛からある驛へと通じてる長い街道には、うらゝかな春の日が照つて、かげろふが靜かにその群集の上に靡いた。

時には今出たばかりの月が、黑いはつきりした林を背景にして、圈を成して集つてゐる群集と僧とを照した。

十六

この不思議な僧の托鉢の話は、五六里隔つた町に嫁して行つてゐる寺の先々代の娘の許まできこえた。娘はもう三十六七の上さんであつた。そこは穀物を商ふやうな店で、街道に面した家の前には、馬に糧をやるために、運送の荷車などがよく來てはとまつた。上さんは、ふすまを馬方の出した大きな桶に入れてやつたりした。

上さんとその亭主の間には子供がなかつた。

亭主は四十五六位の正直な男で、せつせと箕で大豆や小豆に雜つてゐる塵埃を振つてゐるのを人々はよく見かけた。

その村の不思議な僧の話を馬方や町の人達が上さんに話した。

初めはそれが自分の成長した寺での出來事とは知らず、また先代の放埒のために廢寺同樣になつてゐる寺にさういふことがあらうとは思はないので、好い加減に聞いてゐたが、その話が度々耳に入るので、ある時、

『何て言ふんだね、その寺は？』

『何て言つたけな……』馬方は考へて、『さう〳〵長昌院ッて言つたつけ。』

『長昌院？』

上さんは眼を睜つた。

そればかりではなかつた。段々聞くと、その不思議なことをする僧は、かれの知つてゐる慈海らしいので、いよ〳〵驚愕の念を深くした。

『その和尙、慈海ッて言ひやしねえかえ。』

『何んて言ふか名は知らねえが、何でも先代の弟弟子だッて言ふこつた。』

『それぢや、慈海さんに違ひない。何時から來たんだ？』

『何でも去年あたりだんべ。丸つきりお經べい讀んでゐるッていこつた。』

『へえ？』

上さんの心は動かずには居られなかつた。東京に行つてからの慈海の噂も初めは少しきいてゐたので、さうした和尙になるとはちよつと想像が出來なかつたが、段々聞糺して見ると、てつきりそれは慈海であるに相違ないことが段々わかつた。

上さんは不思議にもじつとしては居られなかつた。ある深い渴仰に似た念が溢れるやうに漲つて來た。それは昔の慈海に逢ひたいといふ心持ではなかつた。單になつかしいといふやうな心持でもなかつた。長年抱いてゐた重荷を下ろして救つて貰はなければならないやうな氣がした。

店が忙しいために、その願ひも遂げられずに幾日か經つたが、其間にも片時もそれを忘れることは出來なかつた。上さんは願をかけて佛にお禮參りを怠つてゐるやうなすまなさを感じた。

ある晴れは日に、かの女はガタ馬車で出かけた。指折り數へて見ると、もう十二三年、それ以上もその故鄕に行つて見たことはなかつた。町が近づくにつれてその心は躍つた。やがて昔剛染の町や人家や半鐘臺や小學校があらはれた。やがて馬車の繼立場に來ておろされたかの女は、一番先きに、その近くにある懇意なある家に寄つて寺のことを訊いた。

噂に聞いたどころではなかつた。それは非常な評判であつた。『生佛――』かう言つてその人も話した。

上さんの胸は愈々躍つた。何より先きに、車をさがした。そしてそこから一里位しかない村へと志した。

上さんは不思議な念に燃えた。珠數を持つてゐたならば、それを繰つて、幼い時に覺えたお經の一節を誦したいと思ふほどであつた。そしてその渇仰の念に雜つて、昔の幼なかつた時分のことが、美しく彩られた繪になつて見えた。次第になつかしい村は近づいて來た。

林、それにつゞいた森、その間からは寺の屋根が見える筈であつた。果して少し行くと見え出して來た。その壞れた屋根が、山門が、境内が、例の酒を禁じた石と鼻の缺けた地藏尊とが……。上さんは胸がある聖い尊い物に壓しつけられるやうな氣がした。

『そこで好う御座んす。』

で、車を上りて、上さんは靜かに山門の中へと入つて行つた。銀杏返に結つた髪、黑の紋附の縮緬の羽織、新しい吾妻下駄、年は取つてもまだ何處かに昔の美しさと艶やかさとが殘つてゐて、それがあたりの荒廢した物象の中にはつきりと際立つて見えた。

破れてはゐるが昔のまゝの寺である。昔のまゝの長い敷石である。井戸も深い草の中に埋れてはあるけれども昔のまゝである。かの女はさま〴〵の思ひに滿されながら庫裡の方へ行つた。

其時分には慈海はもう一人ではなかつた。群集の中の信者は、代り代りにやつて來てゐた。出來るならば、師の洗ひすゝぎをさせて頂きたい。朝夕の食事の世話をしたい。水を汲んで上げたい。高恩に堪ゆるための勞働に服したい。かう言つて、信者の男女はやつて來た。現に、かの女の行つた時にも、若い老いた女や男が五六人庫裡に集つて經を誦してゐるのを見た。

かの女は難有いやうな尊いやうな悲しいやうな涙の溢れて漲つて來るのを感じた。上さんは誓し立盡した。

信者達の熱心な誦經の聲はあたりに滿ちた。取附く島もないやうにして上さんは立つてゐたが、やがて庫裡の奥から五分刈位に髪の毛を延した髪の深い僧が此方にやつて來た。それはかれであつた。

かれはちよつと此方を見た。しかし別にこの不意の訪問に驚くといふやうな風もなしに、默つてじつと其處に近寄つて來た。さながらかの女の來るのを今日は待つてゐたと言はぬばかりに――。

少くとも上さんには無量な感慨が集つて來た。何を言つて好いか、何から話して好いかわからないほど胸が一杯になつた。しかし昔馴染と言ふやうな、又は昔の戀人と言ふやうな單純な氣分ではなかつた。凝として見詰めて立つた彼の前に、かの女の頭はおのづから下つた。

長い間抱いてゐた苦痛、重荷、罪惡――さういふものをすつかりそこに投出して、かの女は思はず合掌した。

かれは手を合はせながら唯一言かの女に言つた。

『今日からは、佛の道に、まことの道に……』

『難有う御座います。』

かうかの女は微かに言つた。

上さんはかれの足を洗ふ資格すら自分にないやうな氣がした。路々いろ〳〵に考へて來たことも、つひに一言も言ひ得なかつた。

暫くして、本堂の前に行つて端坐したかれは、長い長い間、誦經の聲をやめなかつた。それは皆なかの女の爲めに、罪の多いかの女のために……。

其處に集つた信者達は、それにつれて皆な熱心に聲を張上げて誦經した。崇嚴な氣分があたりに滿ちわたつた。

上さんは遂に信者達と其處に二日滯留して合掌誦經した。かの女も亦他の人達と共に熱心な信者の一人となつた。

その話――この一條の話は、上さんの口からやがて人々に傳へられた。『ちやんと、私のやつて來るのを知つてゐらしつた。もう來さうなもの、來さうなものと思つて待つてゐらしつた。私の罪の爲めに誦經して下すつた恩は、戀人の情よりも、親の恩よりも深い。』かう言つて上さんは話した。

それを聞いた多くの女達は、皆な隨喜の涙を流した。

十七

その平野の中でも、富豪として、品位ある舊家として知られてゐるS村のK氏の邸は、綺麗に刈込んだ樫の垣を前に、後に深い杉の森を繞らし、數多い白堊の土藏の夕日に照されてゐるのが常に遠く街道から指さされた。

主人夫妻は土地でも評判がよく、慈悲に富んで、多い小作人に對しても常に寛大な處置を取るのを以てきこえてゐた。村の内にはその家からわかれた分家、別家なども多く、その中にも既に巨萬の富を重ねてゐるものなども尠くなかつた。

ところが、ある朝、驚くべき報知が村の人達を驚かした。

それは娘の家出であつた。

娘は今年二十一歳、昨年まで東京の學校に出てゐて、暑中休暇、正月の休みなどにはよく洋傘を日にかゞやかして、停車場からの長い道を歸つて來たが、町の人達、村の人達にも、『それ、Kさんのお孃さんが通る。美しくならしたなア。』などゝ言はれてゐたが、今年は正月からずつと此方にゐて、東京に上つて行くやうな樣子もなかつた。『もうそろ〳〵良緣があるんだらう。』寄ると觸るとかう言つてあたりの

人々は噂してゐた。

それが突然姿を躲した。

昨日ちよつと用事があると言つて、餘所行きのちよいちよい着に、銘仙の羽織、縞のコオトといふ扮裝で、何氣なくひとりで出懸けた。その姿を村の人は其處此處で見かけた。ところがそれが夜になつても歸つて來なかつた。初めは町の友達の許にでも行つて、話が面白くなつて、つい歸るのを忘れたのだらうなどゝ思つて、思ひ當るところに彼方此方と迎への使者を出したが、その人達はやがて皆な手を空うして歸つて來た。夜は更けて行つた。

朝になつた。

それでも娘の姿は何處にも發見されなかつた。

父母、親類の心痛は一方でなく、村の人達は、一大事件としてやがて騒ぎ立つた。しかし成たけ、表沙汰にしたくない。不都合でもあつた時に困る。かう言つて、分家や別家の人達は町の警察に行つても賴めば、役場に行つても賴んだ。それを聞いた人々は皆な驚愕の目を睜つた。

これが不斷さうした操行のわるい評判でもある娘なら、別にそれほど世間の耳を驚かしもしないが、K氏の娘に限つては、これまでつひぞさうした噂は一度もなかつた。また家出をするやうな事情が家庭にあるなどとも思はれなかつた。それに、娘は學問もすぐれて出來、外國語の本も讀み、人一倍立優つ

た成績と評判とを持つてゐた。父母の愛も深かつた。

何うしても誰れか惡者か何かに誘拐されたに相違ない。警察でも最初の鑑定は主としてその方面に傾いた。しかし、その管内は平和で、此頃、さうしたわるい者が他から立廻つた跡もない。

『不思議なこともあるものだ。』かう署長も刑事も巡査も皆な首をひねつた。

一番先きに調べにやつた停車場では、昨日から今日にかけて、娘が汽車に乘つて行つたやうな跟跡はないと言つて來た。

娘は或は村や町の人々の眼に觸れるのを顧慮して、わざと別な停車場まで行つて、そこから乘つて上京しはしないかと思つて、念のため、前後二三の停車場をも調べて貰つた。しかし矢張さうした形跡は何處にもなかつた。

もしこれが誘拐でなしに、自發的だとすれば、何處かの淵川にでも身を投げやしないか。世間では何も知らないけれど、その奥に何かこんがらかつた事情があつたのではないか。捜しあぐんだ後には、警察でも、かう言つて、方針をかへて、あちこちと沼の畔や河の岸を探らせた。

矢張わからなかつた。

父母の悲痛の狀態は見るに忍びないほどであつた。さうした覺悟の家出なら、何とか書いたものか何かゞ殘つてゐさうなものである。又生きてゐるものなら、途中から何等かの便がありさうなものであ

る。しかし金も持つて行つた形跡もなければ、豫めさうした豫定があつたらしい跟跡も殘つてゐない。娘は奥の自分の居間に坐つてゐて、ふと思ひ立つて出かけたらしく、座蒲團も硯も筆もそのまゝになつてゐた。外國の小説らしい本が半ば開けられて、そこにちやんと赤い總のついた枝折が挾んであつた。

その日も暮れた。

ところが、更に驚くべき報知が町や村を騒がせた。それは娘が長昌院の信者の中に雜つてゐたといふことであつた。はたでそんなに大騒ぎをしてゐるのを少しも知らないやうにして、且つは信仰的エクスタシィが不意に娘の魂を誘つたといふやうにして、かの女は汚ない大勢の群の中に雜つて、一心に經を誦してゐたのである。人々は皆な驚愕の眼を睜つた。

署長や巡査はすべてを捨てゝ、劍を鳴して寺へと行つた。それと知つて、父親や分家の人達も車を飛ばした。

しかし署長や父親や村の人達が想像したやうなものではなかつた。慈海と娘とは未だに言葉すらも交へなかつた。群集の中の信者は話した。『何うしてそんなことが、あの生佛さまにあるものですか。このお孃樣は昨日の夕方にひよつくりお出なすつて、私達に雜つておつとめをなすつてゐらしつた。何處のお孃樣か知らぬが、めづらしい篤志の方もあるものだと思つてゐた。そして昨夜はかうして私達と此處に一緒にお出になつた――生佛さまは、少しもそんなことは御存じなかつた。』

一人ならず其處にゐた人達は、皆なさう話した。

娘は娘で、何うしても、此處に暫くの間、かうして置いて呉れと言つて、決して父親に從つて家へ歸るとは言はなかつた。警察の人達も何うすることも出來なかつた。

で、止むを得ず、一同は引上げたが、その噂は更に廣く深く人々の心を動かした。大きな誘拐者――かうした議論が一町村ばかりでなく、郡から縣までへも問題にされて行つたが、それと共に、不思議な坊主の噂は益々近縣に聞えた。ある田舍の新聞は二號活字か何かで、半ば信じ半ば怪しむやうな記事を載せた。

夏になり秋になつても、娘は竟に家に歸らなかつた。後には、その父母は娘の雜用の米やら衣類やらを其處に運んで行かなければならなかつた。母親もやがてはその信者の群の一人になつた。

十八

さうした不思議は猶ほこれに留らなかつた。貧しき者は富み、乏しき者は得、病める者は癒え、弱き者は力を恢復した。

『求めざるものは得、欲するものは失ふ。』かうしたかれの悟は、かれの日夜の行と共に益々生氣を帶びて來た。

半ば山に凭り半ば平野に臨んださびしい村は、今や驚くべき賑やかな光景を呈した。人々は山を越し野を越し丘を越して此處に集つて來た。

大きな誘拐者、大きな山師、かうした批評は、世間の一面にはまだ依然として殘つてゐるけれども、信者はそんなことには最早頓着してゐなかつた。荒れ果てた本堂に籠るものは日に日にその數を增して行つた。

かれ等は皆なその衣食を持つてやつて來た。破れた山門の前には、米や味噌を乘せた車が多く集り、あらゆるものが庫裡に滿ち溢れた。

初めはその態度に呆れ、中頃はその始末に困つた村の世話人達も、今ではこの盛んな光景に驚き且つ怖れた。遂には自から熱心なる信者にならない譯には行かなかつた。

朝の讀經の聲は一村に響きわたつてきこえた。

しかし、慈海かれ自身は、決して以前の生活を改めなかつた。かれは寂然として唯ひとりその室にゐた。小さな机、古い硯箱、二三册の經文、それより他はかれの周圍に何物もなかつた。かれは飢を感ずるのを時として、出て來ては七輪を煽いだ。

しかも、かれの命を聞くをも待たずして、やがて本堂の破れた屋根は繕はれ、庇は新しくせられ、倒れかけた山門はもとの狀態に修繕された。

女達は毎朝綺麗に廊下から本堂を掃除した。爺達は箒を持つて一塵も殘らないやうに境内を掃き淨めた。若い女達はさまざまの色彩を持つた草花を何處からか持つて來て栽ゑた。

昔のさびしい荒れた中に寂然として端坐してゐた如來佛の面影は段々見ることが出來なくなつた。大きな須彌壇、金鍍をした天蓋、賓頭顧尊者の木像、其處此處に置かれてある木魚、それを信者達は代るやつて來て叩いた。

本堂も隙間がない位に一杯に信者が集つて、異口同音に誦經した。その中に雜つて、慈海の誦經の聲は一段高く崇嚴に高い天井に響いて聞えた。

Sとその妻

一

周圍の人達は、この頃またS夫婦が喧嘩して出るの入るのと言つてゐるのを聞いた。

『何うしてあゝだかな？』

『本當に何うしてあの夫婦はあゝだかな？　ちよつと想像が出來ない。財産だつてあるし、Sだつてそんなにひどい道樂をする方ぢやなし、何方かと言へば、圓滿でなければならない家庭なんだがな。』

『本當だ……。一人ゐる姑さんだつて、やさしい、好いお婆さんだし、それに、もうあの夫婦だつてお互ひに五十近くなつてゐるぢやないか。若い中なら、お互ひに我儘が出たといふこともあるが、今になつて、まだあゝしたすつた揉んだをやるといふことは、ちよつと想像に苦しむね。』

『いつも、仲裁役はあの從弟のTがやつてゐるが、あの世話好きな、人の好い男すら、あの夫婦には手こずつてゐるよ。もう何遍出るの入るのつて言つて大騒ぎをしたか知れやしないんだからな……。實

に不思議だよ。』

『矢張、子供がないせゐかしら？』

『それは大にあるね……。何うしても、子供がない夫婦の仲は殺風景になるからね。情味がなくなるからね。』

『Sはそれでも矢張遊ぶんだらう？』

『遊ぶ方は此頃ぢやもうそれほどやらないけれど……。何かがあるにはあるらしいね。矢張、それが夫婦喧嘩の元になつてゐるにはゐるらしいがね。』

『あのお元ぢやない……？』

『あれとは十年も前に切れた筈だがな。……もうあれとの關係ぢやあるまいと思ふけれども……。それでも、あのお元を此の近所で見かけたと言ふものがあるから、何處かで、こつそりやつてゐて、それで揉めるのかも知れないがね。』

『よしんば、そんなことがあつたにしたつて、五十近くで、もう夫婦喧嘩でもなからうと思ふけれどもな……。お互ひにもう好い加減理解しさうなもんだがな。』

『本當だ……。』

かうした噂がそこでも此處でもきかれた。田舍でも中産以上で、田地は七八町も持つて居り、山も一二

町はあり、先代までは家でも自から鋤を取つて田畠を耕した舊家の農夫であつたが、Sになつてからは、無人なのを口實にすつかり小作任せにして、唯、俳の入つて來るのを待つて、そして何不足なく暮らしてゐるのであつた。從つてSは農夫でありながら、若い時分から東京に出て法律などを修め、また好きで文學などをもやり、地方の政治家として一時は郡會になども出たこともあつたが、そのつまらないのをさとつてからは、全く俳句に隱れて、のんきにふところ手をして、その半生を送つて來た。碧花といふ俳名は、かなりにその地方に知れてゐるばかりでなく、中央文壇にもをりをりその名は見えて、その社中の俳句がある雜誌の片隅に小さく毎月出てゐたりした。埼玉に碧花子のあるといふことは、俳句の宗匠達も皆よく知つてゐた。

殊に、昔を知つてゐる人々に、一層不思議に思はれたのは、その妻のM子が、その當時矢張非常なハイカラで、美人で、英語なども出來て、Sと深い戀に落ち、何うしても一緒にならなければ死ぬの生きるのと言つて、そしていろいろ障害があつたに拘らず、それを排して無理やりに夫婦になつたといふことであつた。M子の里は矢張その近所の町の豪商であつたが、二人は故鄕に於て相識つたのではなく、東京に遊學中、互ひに何處かで知り合つて、そしてそれの人々に知れた時には、既に深い深い戀に落ちてゐたのであつた。

從つてかれ等が戀を遂げて、一緒に東京に出かける時などには、隨分田舍の人達の目には立つたもの

であつた。大きな新式な旅鞄、厚ぼつたいコオル天の敷物、派手な大きな丸髷に綺麗な八字髭、『羨しかんべ。あゝ仲の好い夫婦は――。前世に、何か好いことでもして置いたんべ、』などと道すがらの噂達はかう言つて、その二臺つゞいた車を見送つたものだつた。

先代の爺はその頃五十八で、一生コツコツと祖先の產を殖すことにのみ力を盡したやうな人だけに、そのハイカラ娘との結婚には、最初は不同意を唱へて、容易にそれに承諾を與へなかつた方だつたが、Sが一人息子なのと、その戀に陷り方が一通りや二通りの眞劍ではなかつたので、止むなく承諾して、表向きに結婚の式を擧行させたが、生きてゐる中は、『宅の奴等にも困つたもんだ……。あの嫁にも困つたもんだ。』と口癖のやうに言つて、それから猶五六年生きて、そして、或日ぽつくり急病で死んで行つて了つた。

先代の生きてゐる中は、さういふ風だつたから、夫婦はその一年の半は東京暮しをして、田舍の家の方は餘り構ひつけなかつた。Sは英語の先生をしたり、ある時代には新しい文學の仲間に入る了簡で、それに妻からも勸められて、一生懸命に外國の小說を讀んだり、物を書いたりして、當時二流三流の文士などがよく家た出入りしたが、何うも思はしくないのと、一方田舍政治家に對する嗜好をSが持つてゐたのとで、父親が死んでからは、田舍に戻つて來て、次第に都會生活、文士生活から離れるやうになつて了つた。

『何うも、あの上さんがハイカラさんだで……中々亭主に負けてゐないからな。』喧嘩が始まると、周

園の人達はすぐかう言つて批評した。

二

Sの從弟は好人物で、よくSの家に出入りした。矢張その隣村の中產以上の農夫だが、Sがさうしたハイカラな妻を持つたのに引かへて、地味な近村の田舍の舊家の娘を貰つて、それには子供が既に五六人もあり、年中一緒に二人して田畠に出て働いてゐるといふやうな質であつた。平生、從兄のSが自分に比べて學問があり、都會人であるのを尊敬して、よくやつて來ては、いろいろとめづらしい話などを聞いたが、後にはSに勸められて、矢張柄にない俳句などに熱中した。かれの田舍生れの妻も一面ではSの妻を冷かに見てゐるところがありながら、一面ではその學問があり、理窟がよくわかり、何と言つても役者が一枚も二枚も上なのに兜を脱いで、『姉さん、姉さん』と言つてはよくやつて來た。亭主がS夫婦の喧嘩の仲裁にこまつてゐると、その妻は、『何うも困るねぇ、兩方とも學問があつて理窟があるんだから――。何方も何方つて言ふことが出來ないんだもの……。姉さんも、もう少し折れると好いんだけれども……』などと言つて額を押へた。

財產こそ二流三流に落ちてゐるけれども、村での舊家ではあり、樫の高い垣で取圍まれた白壁の土藏などもあたりに際立つて、天井も古びて高く、棟には大きな鬼瓦が載つて、祖先傳來の空氣があたりに

漲つてゐる中で、S夫婦は長いことその夫婦喧嘩の生活をやつて來た。時にはバイブルの話が始まつたり、イブセンが出たり、ハウプトマンが出たり、トルストイの性慾論が持ち出されたりした。

『何故、それぢや貴方はさうなさらない？　男性の孤獨の價値をさういふ風に仰有るなら、私は一緒にゐなくつて好いんです……。女性にも孤獨の價値と言ふことがあります。』

かうしたことを言ふかと思ふと、

『ノラなんかには私はなりません。私は出て行きません。一生貴方の傍にくつついて、貴方を鞭撻して上げるのが私のつとめです。妻としてのつとめです。貴方はかうして田舍に埋れてゐる筈ではなかつたではありませんか。文學で失敗し、田舍政治家で失敗し、俳句なぞといふ小さな道樂に甘んじて、それで一生を終つて了ふのを私は見てゐられません。』

かうその妻は眉を昂げ聲を高くしてSに喰つて蒐つた。

ノラといふ言葉が非常に多く出るので、從弟はある時、

『一體、ノラつて何です？』と聞いて笑はれた。

『何うもあの夫婦喧嘩の仲裁は俺には荷が勝ちすぎる……。何で喧嘩してゐるんだか、ちよつともわからないやうなことがあるんだから。』かうある時、心から自分の無學を恥ぢるやうにして、從弟はその妻に言つた。

と、その妻は、

『本當ですね……。でも、姉さんがわるいとは思はれないやうなところもありますね。姉さんの方が氣象が勝つてゐるんですね。兄さんがぐづぐづしてゐるのを見てゐられないつて言ふやうなところもあるんですね。』

『それはさうかも知れない。』

『姉さんの腹では、もつと兄さんに働いてしつかりして貰ひたいんですよ。……それを、好い加減に言つて置けば好いのに、あまり強く言ふもんだから、それで、兄さんもじつとしてゐられないので、それでつい怒らなくても好いところを怒るつて言ふやうになるんですよ。』

『つまりは仲が好いんだねえ。』

『それはさうですとも……。姉さんはあれで兄さんを思つてゐるんですよ。』

『困つたもんさ……。』

『兩方同じやうなところのある人が寄つたのですよ。そんなもんだから、いつでも好い時は好いけれども、わるい時にはまた馬鹿にわるくなつて了ふんですよ。』

『子供がないのもいけないんだね。』

『それはたしかにさうです。私達のやうに子供さへ多ければ、忙しくつて、喧嘩なんかしてゐるひまはないんですけども……。』

『それにしても、いつからあゝ喧嘩をするやうになつたらう？』

從弟はかう言つて昔を思ひ出すやうにした。

『伯父さんが亡くなられた頃までは、まだ仲があんなぢやありませんでした。』

『さうだね。』

『ひどい喧嘩をするやうになつたのは、郡會に出なくなつてからですね。それに、お元のこともありますね。』

『さうだな、あの時分からだな。』

かう言つて從弟はもう十年近くもなる昔のさまを頭に浮べた。

三

お元といふのは、Sの妻に比べては、やさしい、從順な、日蔭に生えた草のやうな女であつた。その地方に特有な茶屋などにもゐたことがあるやうな生立で、從つて學問などもなく、何方かと言へは思想も卑しい方であつた。しかし從弟などの眼から見ても、Sが一時夢中になつたのも無理はないと思はれるやうな女で、あまりに饒舌でもなく、情味もあつて、男に偏つて來る心には何處かいぢらしいところが

あつた。Sは郡會にゐた時分、それを何處からか伴れて來て、かなり長い間、誰にも知られずに、村から一里ほど離れた町に、煙草屋などを出させて圍つて置いた。

從弟は始めてそれと知つた時のさまを今でも思ひ出すことが出來た。『不思議だなァ！　よくあそこにSが出入りするなァ！』とかう思つてゐたが、遂にそれが知れさうになつたのがわかつて來たので、Sはある日それを從弟に打明けて話した。そしてかれをそこに伴れて行つた。

お元はその時二十六だつた。丸髷などに結つて、ちよつと小綺麗にしてゐたが、その何處かに溫かみを持つた眼と、心の影の複雜した表情と、ぢき顏を赤くするやうな純な姿とは、從弟にも決して惡い印象を與へなかつた。從弟は直にそれをSの妻に比べて考へた。あのやうなしつかり者の妻を持つたかれが、かうした女を愛するやうになるのも自然な道行だとすら思つた。從弟はSにもお元にも同情した。

しかもそれが隱してもかくし切れずに、遂にSの妻に知れた時のあの爭ひは何んなであつたらうか。Sの妻はそのためにヒステリイになつて、そして半年近くも里の方に歸つてゐた。

そのためにすつかり自分の生活が破壞されたとSの妻は言つた。自分がSに捧げた犧牲は決して尠いものではない。Sあつてのかの女、かの女あつてのSであつた筈であつた。それを、一生の力とも生命とも賴んだSはあゝした卑しい學問も何もない女に彼女を見替へた。そしてかの女にこの上もない恥辱を與へた。女としてのかの女の價値を奪つた。かう言つてかの女は容易に家に歸らうとはしなかつた。

いくら言つてもきかせてもわからなかつた。さうしたことは世間にいくらもある。またあのお元といふ女だとて、決してさうわるい女ではない。夫の心も汲んでやらなければならない……。かうしたことを口も酸くなるほど從弟は中に入つて言つたことを覺えてゐる。しかしSの妻は、Sがそのお元とすつかり離れて、手切金までやつて、その上猶ほいろいろとその眞僞をたしかめて、いよ〳〵それが本當だ、夫はあの女と確かに離れたといふことを確めるまでは、決して里から歸つて來なかつたことを從弟は思ひ出した。

從弟は猶それに連關して、あの悲しいロマンチックなシインを思ひ浮べることが出來た。それは忘れもしない　あの町の煙草屋を疊んでから、いよいよ別れるといふ時であつた。お元は身も世もないやうに泣いて泣き盡した。始めは『私は何うせ日蔭者だから何んなにされても好い。食はせて戴いて生きてゐさへすれば好い。旦那に別れさへしなければ好い……。一年の中に一度でもお目にかゝれば好い。決して奥さんなんかを何う斯うとは思つてゐない。奥さんのためには下女となつても好い。何んなことをされても好い。』かうお元はやさしく素直に出たのを、何うしてもSの妻が承知しないと言ふので、それで止むなく町の家をも疊むことになつた。手切金を從弟が持つて行つてやつた時には、何うしてもそれを受取らないで困つた。お元は泣き盡した。

さうしたやさしい心であつたから、Sにしても決してお元と離れようとはしてゐなかつた。その餘儀

ない別れの辛さが從弟にも目に餘つた。

從弟はSに言つた。

『ぢや、歸つて來て貰はなくつても好いぢやありませんか。かうした情がわからないM子さんでは、歸つて來て貰つても、行末が案じられる。いつそ斷乎とした處置を取る方が好いぢやありませんか。』

かう言ふと、Sは、

『いや、それはいけない……。僕がわるかつたのだ。妻の女としての價値を侮蔑したのは確かに僕だ……。人間の立場から言へば、何うしても妻の言ひ分に正理がある。正理はまげられない。妻が僕の爲めを思つて吳れてゐるのは僕にもよくわかる……。それが辛いとか、それがさびしいとか言ふのは僕がわるいのだ……。またその辛さ、淋しさからお元にまでかうした目に逢はせるのは、一層僕がわるいのだ……。お元は可哀相だが、妻もこれで捨てゝ了ふことは出來ない。』

で、お元とSとは、泣きの涙で別れることになつた。お元にはSの言ふこともよくわかつたらしかつた。雨の降る秋の日、あの路の角のところで、お元はわかれをつげて、傘をさしてそして向うに行つた。從弟もあの時は泣いた。

四

それから後も、SとSの妻の喧嘩は遂にやまなかつた。

五年も六年も續いた。

從弟はその間に、何遍その仲に入つたか知れなかつた。從弟はSに向つては、『だから、あの時、あゝすれば好かつた。思切つて斷乎とした處置に出れば好かつた。私の言つた通りだ……』と言つた。

Sの妻に向つては、『姉さん、それは無理ですよ。もう少し夫のことを考へておやんなさいよ。S君だつて、姉さんのことは考へてゐるんだから……』かう言つては、お元と別れる時に言つた言葉をよく持ち出した。

Sの妻にもそれはわかるらしかつた。また夫のかの女に對するさうした價値の認識を感謝してゐないではないらしかつた。しかも何ぞと言つてはよく爭つた。

從弟がひよいと遊びに行つて見ると、一目見たゞけで、(またやつてるな)といふことがすぐわかつた。もう今では流石に元のやうな烈しい喧嘩はしなかつたけれども、それでも三日や四日は兩方とも默つて互に睨み合つて、不愉快な思ひをしてゐるらしかつた。さういふ時には、Sの妻はよく納戸に行つて臥床の中に入つて寢てゐた。蒼白い興奮した顏に頭痛膏などを貼つてゐた。

『またやつてるのかね？』

笑ひながらかう從弟が言ふと、Sは、

『うむ。』

などゝ言つて、自分で立つて來て鐵瓶の下の火などを見た。

お元と別れて以來、Sは益ゝ消極的になつてゐるのを從弟は見落さなかつた。それ以來、Sの持つてゐた活氣とか、努力とかいふものは、日增に凋落して行つてゐた。Sはあらゆる世間から離れた。大勢の人達に交つて事業をしようなどゝはもう思はなくなつてしまつた。『何うせ人間のことは思ふやうにはなりはしないよ。焦つたり何かするだけ損だよ。出來るものは出來るし、出來ないものは出來ないんだからね。』こんなことを常に言つた。そしてその言葉の中には、かれが夫妻の間に於て經驗した儼とした事實がそれとあらはれて來るのであつた。從弟は平生さうしたことは餘り深くは考へない方の質であつたが、時にはS夫妻の事實に由つて覺醒でもさせられたやうに、『何うも夫婦と云ふものは難かしいものだ。あまりに同じやうな氣質のものは不仕合せだ。何方かに隙があるやうな夫婦でないと、お互ひの身の發達の上から言つても、いやに固まつて了つて暢びないもんだ。……亭主がえらくなるのも妻の力、妻が利口になるのも亭主の力だつてよく言ふが、實際さうだ。』などゝ言つた。

『もう、好い加減に、さうした喧嘩はよした方が好いでせう……。』

半ば笑ひながら從弟は言つた。

『うむ。』

かう鬚の生えた詰らなさうな顔をSは撫でゝ、『喧嘩つていふでもないがね。』

『何うしてさうだらうな。』

『氣質だな、矢張。』

『本當にこまるよ……。それで愛してゐないつて言ふなら、何うにでもなるけれども……。お互ひに愛してゐないんぢやないからな。』

『それはさうだ……』

『しかし、もう年も年だし、君にしても、もうさうのべつに顏を赤くし合つてゐる年ぢやないんだから……好い加減理解が出來さうなもんだがな。』

『理解はしてゐるんだよ、お互ひに……』

『なら、何うして、さういふことになるんだな？』

『元を糺せば、矢張、僕がわるいのかも知れない。僕がこれまで何事にも成功せずに、かうしてぐづぐづしてゐるのがその原因だと言つたやうな處があるんだね。そこが妻には物足らないんだね。』

『そんなことはないだらう？』

『さうだよ、何うもさうだ……。その證據には、僕は始終押されてゐるんだから。二人比べると、何うしても僕の方が弱いんだから、一體僕の妻は僕のやうなものに配せらるべき女ではないんだ。僕なんかよりももつと豪い奴の妻になるとぐつと引立つて來るし、幸福にもなつたのだよ。僕等がそもそも始めて逢つて、そしてラブし合つたといふことが不仕合せの元だといふことを僕はつくづく考へたね、此頃。』

『そんなことはないよ。』

『そんなことはないことはない。つくづくさういふ風に僕は考へて來た。僕は何うかすると、そのため却つて妻が可哀相になつて來て爲方がないことがある。妻の身になつて見給へ。面白くなくなるのは當り前ぢやないか。こんな田舍にくすぶつて、何一つ仕事らしい仕事をするではなし、朝起きて、夜寢るまで同じ緊張しない顏を見て、もぐらもちのやうな生活をしてゐるんだからね。これがね、君、僕等の生活が今よりもつと貧しくつて、働かなければ何うしても食つて行くことが出來ないとか何とか云ふのだと、またそこに新しい面白味とか意味とかゞ出來て來るのだらうけれど、下幸なことは、じつとしてさへゐれば食ふには困らない。ちやんと小作が冬にさへなれや一年中食ふ米を持つて來て呉れるし、何一つ不足つて言ふものはないんだからね。』

從弟は考へて、

『子供でも貰つて見たら何うだね？』

『いや、駄目だ……。僕の方はそれも面白いかも知れないと思ふけれど、妻が全然さうした氣がないから駄目だ。子供なんかを欲しがるやうな女なら好いんだけども……。とてもそんな心は露ほども持つてゐないやうな人なんだから……。お元のことの時だつて、さうした性質がよく出てゐるぢやないか。』

『それはさうだね。』

從弟も首肯かずにはゐられなかつた。

『ぢや、旅でもしたら何うだ？』

『旅だつて、駄目だよ。とても妻と旅行したつて落附いてなんかゐられつこはないから。』

『困つたねえ。』

かう言つて從弟は手を引いた。

從弟にしても、Sの妻の生活を見ると、矢張同情せずにはゐられなかつた。Sが言ふやうに、細君だつて決して面白いことはないらしかつた。白い興奮した青い顏をして、ヒステリツクに毎日納戸に入つて寢てゐるさまは決して慘めでないことはなかつた。それに、若い時の美しかつたこと、二人の仲の睦ましかつたこと、人に何の彼のと羨ましがられたことを知つてゐるだけそれだけ、從弟には一層あはれに感じられた。爲方がないので、從弟はいつも先きに立つて、細君を納戸から引張り出して、そのつまらない濁つた空氣から浮び上つて來るやうに仕向けた。

『貴郎が來て下すつたんで、大分氣分がよくなりました。』

かう細君は從弟に謝した。

ある時は、Sが突然從弟の家にやつて來た。

その不愉快さうな顏と、何處か興奮したやうな姿とは一目ですぐ從弟にその家庭の重苦しい空氣を思はせた。

『何うしたい？』

『いや今日は相談があつて來たんだ……。何うも、僕の家の空氣がわるい。あそこにゐると、イヤにじめじめして氣が滅入つて爲方がない。何處かに行つて來ようと思ふんだ、當分……』

『細君と一緒に……？』

『いや、ひとりで……。旅にまでM子に附纏はれては、わざわざ出かけて行つた甲斐はないからね。』

『何うしてさうだらうな。』

『僕にもわからない……』

『長く行つてゐる積りかね？』

『僕の希望を言はせると、もう二度とあの家には歸つて行きたくないやうな氣がしてゐるんだけど……』

『馬鹿言つちや困るよ。』

『だつて、本當にさういふ氣がするんだから爲方がない。つくづく惡緣だと思つた。離れたくても離れられない、愛したくつても愛されないつて言ふのは、僕のことだねえ。此頃では妙なことを考へた。……お元の心が始終僕等の上に働いてゐるんぢやないかと思ふよ。』

『馬鹿な。』

『だつて、さうかも知れないよ。』

『ぢや、君はまだお元のことが忘れられないんだね。』

『忘れられないんなら好いけれども、さうぢやないんだよ、忘れて了つてゐるのを恨まれてゐるんだよ。』

『馬鹿な……』

しかし從弟は何うすることも出來なかつた。Sはその時旅に出て二月ほど家に歸つて來なかつた。

五

Sの老母はその頃六十五六で、父親の頑固が努力家であつたに似ず、何方かと言へば、のんきに無頓着に、唯その日その日を送つて行くといふやうな質であつたが、それでも、S夫婦の暗闘、默闘を氣にし

て、從弟の顏を見ると、困つたものだと言ふやうにして愚痴をこぼした。

『嫁がわるいとばかりも言へないけれど、何方にもわるいところがあるに相違ないとは思ふけれど、もう少しすなほにして呉れると好いと思ふよ。M子は一白でSは五黄の弱い方の星ぢやでな。あゝして一生喧嘩ばかりして終るのかと思ふと、本當に可哀相にも可哀相だし、困つたもんぢやな。』

ある時には、そのおとなしい老母が威丈高になつて、『お前たちは、もうこの家から出て行つて呉れ。お前達の喧嘩は、もうわたしには見てゐられない。この世に生れてこの世の恩知らずといふのは、お前達のことぢや。その日樣に對しても申譯のないことぢや。淺間しいにも何にも……。年を取つてかうした思ひをしなければならないとは何といふことだらう。前の世にさうした種が蒔かれてゐるその劫が盡きぬのぢや。もうつくづくわしも愛想が盡きた……』かう言つて、果ては袖を掩つて泣いてゐるところに從弟は邂逅した。

從弟はその時ばかりは輕い心持で夫婦の喧嘩を見ることは出來なかつた。常識に富んだかれですら、そこには何か不思議なことがあつて、人力では何うすることも出來ないものがひそんでゐるやうに思はれた。恐ろしいやうな氣にさへなつた。Sの銷沈した顏とM子の興奮した顏とを見るのさへ氣味がわるかつた。從弟は歸つて來てその妻に言つた。『あゝもうつくづくあの仲裁は御免だ……。今日といふ今日は本當に恐ろしくなつて身の毛がよだつた。伯母が氣の毒だから、それでも言ふだけのことは言つて來

たけれども。もう成るたけ寄りつかないやうにする。實際、何か怨靈でも取附いてゐるかも知れないと思はれる位だつた。あの姉さんとSの顏を見るとぞッとしちやつた。』

『困つたねえ！』

從弟の妻も心から困つたやうな顏の表情をして見せた。

（だから、夫婦は始めをよく見なければならない。）とか、（星といふものはだから肝心だ。）とか、（原因がなくつてする喧嘩だから何うもしやうがない。）とか、さうしたいつも出る言葉もその日は二人の間に交はされなかつた。かれ等も何だかその陰氣な重苦しい空氣の中に浸つたやうな氣がして、默つて唯顏を見合せた。

從弟は溜息を吐いた。

六

しかしその時からは、S夫婦の狀態は一時大分よくなつて、互ひに深く爭ふやうなことはなくなつた。二人は何う思つたか、二里ほど隔てたある村の寺の高德の僧を訪ねて種々話を聞きに出かけるなどゝいふ噂であつた。

從弟は成るたけ觸らぬやうに、足を遠くして暮してゐた。一年二年はさうした狀態の中に過ぎた。老

母は從弟の家にやつて來て、『でもな、此頃はちつとは好いだよ。お寺詣りをするやうになつてから、段々考へ直したと見える。』などゝ言つた。

ところが、今度、再び以前にも增して凄じい爭鬪が夫妻の間に起つた。

それは例の暗鬪、默鬪ではなく、近所の人達にも心配されるやうな凄じい爭ひであつた。從弟も遂にまた引張り出された。

いくらなだめても、なだめても効がないといふやうに、Sの妻は腹を立てた。

『何うしても、もう、私は里に歸して貰ひます。四十二三になつて、今更、離緣を取るの何のと言つて、恥かしいことですけれど、何うも爲方がありません。私は私の女としての價値をかう蹂躙されてゐるのですから……。それをも忍んでゐるわけには行きません。』

『女としての價値を蹂躙されたといふのは何ういふことですか。』

かう從弟が訊くと、

『それは私に訊かずにSに訊いて下さい。Sは知つてゐる筈です。』

Sの方に行つて訊くと、

『里に歸すことなどは、今更出來ない……。爲方がなければ、別居でも何でもして、今の狀態を避けてゐるより外に爲方がない……』かう言つたきりで、その理由については、默して語らないのであつた。

いろいろなだめたり話したりしてゐる中に、從弟はふとあることに氣が附いた。かれは考へた。(さては、またお元との關係が元に戻つたかな……。それで、かうした爭ひが始まつたんではないかな……。しかしかうは思ひ附いたけれども、はつきりさうだとは斷定することは出來なかつた。

從弟はそれからそれへと想像して見た。と、いろ〳〵なことが思ひ當つた。何處にゐるかわからないが、兎に角　お元がこの近所にゐるといふことだけは確かである。現にそれを見た人がある。それからまたお元が一時東京に行つてゐたといふことも確かな事實である。またSが一時度々東京に行つたことも事實である。(或は、或は)と從弟は考へた。(或は、あの二三年前に、二月ほどSが家を明けたことがある。あの時なども或はそのかげにお元がゐたのではなかつたか。或はまたその頃まではわかれてゐたが、その時分からかれ等の關係は復活したのではないか。)

かういふ風に想像して來ると、何うもさうらしい……。それから新しい爭ひが二人の間に再び芽を吹き出したに相違ないらしい。無論、Sはそれを秘密にしてゐる。Sの妻には殊にそれを秘してゐる。それでありながら、それが何處からかSの妻にわかつて來る。その事實をつきとめないまでにもその氣分なりその空氣なりからわかつて來る……。それで要領を得ないながらに爭鬪が起つて來る、(それに相違ない。)と從弟は思つた。

從弟はそれとなくSに訊いた。

『そんなことはない……』

かうSはすぐに否定した。

『でも、事實なら……それを僕に話して貰ふ方が好い……。さうすれば、また僕にも考へることがあるんだから。』

一歩を進めてかう從弟は言つた。

『いや、そんなことはない……』

かう強くSは言つた。

しかしこの強く言つた言葉の中に、一層事實が確められてゐるやうな氣が從弟にはした。

從弟は凝つとSの顏を見詰めた。と、それをSは避けるやうにした。《いよ〳〵それに違ひない。》と從弟は深く思ひ込んだ。

從弟にしては、それに對して、別に反感を抱かなかつた。始めの時に感じたと同じやうに、さういふことが起るのもSに取つては無理はないと思つた。もしまたそれが事實ならば、今度こそは、Sのために、またSの妻のために、すつかり問題を解決してやる方が双方のためだと思つた。Sの妻には氣の毒だが、それにはそれ相應に方法の立てやうがいくらもある……。あゝして年中互に苦しんでゐるよりは好いと從弟は思つた。

從弟はその足で、何處かでお元に逢つたといふ人を一里ほどある町に訪ねた。

その人は言つた。

『え、逢つたには逢つたけれど、それはもう餘程前のことですよ。Sの渡頭で、何氣なしに見ると、そこにお元さんがゐる。え、無論一人ですとも……。年も取りましたよ。それやね、あゝいふ元が意氣な人だから、それほどではありませんけれど。それから、おやめづらしい、此頃は何處にゐますつてきくと、何でもA町あたりにゐるやうな話でした。矢張誰かに圍はれてゐるやうな風でしたぜ。』

『それがSぢやないかしら?』

『さア、な——』

『何うもさうらしいと思ふですが……』

『しかし、それなら、それで、知れさうなもんですがな。』

『でも、A町あたりなら、ちよつと世離れてゐますからな……』從弟は考へて、『はつきりA町つていふことはわかつてゐますかしら?』

『それがわからない……』

かう言つたが、その人はちよつと頭を傾げて、『さう、好いことがある。あそこには、お元さんは何うかすると顏を見せるやうだ。あそこのお上さんに行つて訊いて見ると好い。それが好い。』

で、從弟はその教へられたところに行つて見た。しかし、そこでもお元の所在はよくわからなかつた。A町にもゐたにはゐたが、今は無論そこにはゐない。東京に行つてゐるらしいといふことであつた。(ぢや、矢張、僕の想像かな。Sの言ふ通りに、矢張關係はあの時きりなのかな。)こんなことを思ひながら從弟は自分の家の方へ歸つて來た。

七

『や、お元さん！』

かう言つて、從弟は驅け寄つた。

それはそれからいくらも經つてゐないある日の夕暮のことであつた。かれはちよつと用事があつて、Kまで行つて下りの四番の汽車で歸つて來た。

かれの下りた驛は、丁度列車の交換驛になつてゐて、かれの乘つて來た汽車がそこに着くと殆ど同時に、上りの汽車が轟然とした響を立てゝそれに入つて來るのをかれは見た。

かれは列車から下りて、急ぎ足に、橋を渡つて、向う側に下りて來たが、その下り切らうとする處で、ふと、その上りの汽車の三等室の窓にお元が青白い顏を夕暮の空氣に浮び上るやうにしてゐるのに從弟は眼を留めた。

『や。お元さん！』

『まア旦那！』

『久し振りだつたね！』

『本當に……』

『此頃は何處にゐるんだね。この間から、ちよつと氣になることがあつて貴方のゐるところなんかを訊いたり何かしてゐたんだ。』

『私を！』

『あゝ……』

『……』

『何處にゐるんです。此頃は？』

『何處つてきまりもありませんけれど。』

『A町かえ？』

『A町にも行つたり來たりしてをります……』

『今日は何處へ行くんだね？』

『K町まで。』

『K町にゐるの？』

『さういふわけでもないんです。』

『一度、逢つて話をしたいことがあるんだがね。』

『私がお伺ひ致しませうか。』

『でなくつても好い。この町にも來ることがあるのかえ？』

『滅多に來たことは御座いません。』

『ぢや、K町の？』

『K町のAつていふ家に、今ではをります。』

もつときゝたいことが澤山に澤山にあるのに、此時汽笛は鳴つて、上りの汽車は靜かに動き出した。

『ぢや、また……』

『では、左樣なら。』

で、すれ違つて了つた。《Sの旦那によろしく》とか何とか言ひさうなものだつたが、それも言はなかつた。かう思ふと、矢張自分の想像かしら？　といふ風に從弟には考へられたが、しかしそれをひつくり返して考へて見ると、それは言はないのが却つて關係があるのを示してゐるのではないかといふ風に思はれた。夕暮の灯の涼しい町をかれは靜かに歩いた。

八

ある日の午後、近來にめづらしい凄じい雷雨があつた。

A岳の方からやつて來た雲とN岳の方から寄せて來た雲とが一つになつて、墨を潑したやうな空には縱横に電光が交叉し、それにつれて凄じい雷聲が天地をも撼かすやうに轟きわたつた。

從弟はその妻と一緒に畠に出て働いてゐたが、白箭を投げるやうな驟雨がやつて來たので、慌てゝそこから家の方へ戻つて來た。

『今日のはNの雷が一緒に來たからひどいぞ。』

『でも好いおしめりだ。』

夫婦はこんなことを言ひながら、大きな笠を臺所に脱いで、そして家の方へと上つて來た。そこにこはがつて末の女の兒とその上の男の兒が寄つて來た。

『それ、定、裸でゐると、雷さまにおへそを取られる。』

こんなことを言つて、細君は急いで單衣を女の兒に着せた。

凄じい、凄じい光景がやがてそこにあつた。どしやぶりに降る雨、縱横に交叉する電光、樋といふ樋から、雨水が瀧津瀨のやうに落ちて、樹も草も草の葉もすべてそれに震へ戰くやうに見えた。あまりに

強く凄じく驟雨が降り込んで來るので、裏の雨戸を從弟が引寄せた時には、野は白く茫と飛沫に蔽はれてゐるやうに見られた。大きな電光が鍵を引いたやうに眼を掠めたと思ふと、それと殆んど同時に、轟然として雷聲がその頭上にとゞろき渡つた。

『これはひどい！』

思はず從弟はかう言つて首をすくめた。

凄じい雷聲はそれからそれへと來た。子供達は母親に嚙り附いて、生き心地もないやうに突伏して眼を閉ぢ耳を押へてゐた。大人達も默つてそれに壓迫されたやうにして、一刻も早く恐ろしい雷聲の過ぎて行くのを待つた。突然、耳を劈くやう雷聲が鳴りわたつた。

『今のは落ちましたね。』

『桑原、桑原……』

思はずさうした言葉が從弟の口から出た。かれは線香を持つて來て立てた。

頻りに五つ六つ大きな奴が鳴つたが、それからは、次第に雷聲は遠く退いて行つた。『あゝもう、雷樣もお歸りだ……。平生おとなしくないものは、かういふ時に怖いんだよ。わるいことをすると屹度雷樣に打たれて了ふんだから。』こんなことを母親が子供に言つてきかせてゐる中に、次第に雷聲は小さく低く、雨もいくらか小降りになつて來た。

『いゝおしめりだ。本當に好いおしめりだ。』

こんなことを言つて、從弟が雨戸をあけた時には西の空は既に一面に晴れて、さやかな日の影が、ぬれた草の葉やら畑やらにキラキラと照つてゐた。

『怖かないには怖かないが、雷樣は氣持が好い。あとがからつとするからな。』

二人はかう言つて、まだ仕事から上がるには早い時間なので、そのまゝ臺所に下りて笠を取つて、前の畠に出かけた。

畔のほとりの小川は、凄じく濁流を漲らして流れてゐた。

で、二十分ほどそこでかれ等は働いてゐたであらうか。ふと見ると饅頭笠をかぶつた一人の農夫らしい男が家の中へ入つて行つたが、子供が、(父ちやんや母ちやんはあそこにゐる。)と敎へたと見えて、そのまゝ出て來て此方へとやつて來た。

『作公ぢやねぇかな。』

『さうだ、作公だ。』

こんなことを言つて二人は此方から見てゐたが、その作は遠くから、

『旦那さ、大變だ！』

かう言つて呶鳴つた。

『何だんべい、大變だつて言つてるな。』
『さうだね。』
畠から此方の上つて行くのを待ち兼ねたやうに、
『大變なこと出來ただァ……』
また續いてその作は呶鳴つた。
『何だな、一體？』
かう言つて近寄つて行くと、
『Sさァおつ死んだ？』
『え？』
『Sさァべいぢやねえ、Sさァ上さまもおつ死んだ！』
從弟は耳を疑ふやうに、
『え？』
『俺ァお袋さまに頼まれて、慌てゝ、知らせに飛んで來たゞ。』
『何うして死んだゞ？』
『何してッちふこともねえ、さつきの雷樣に打たれたゞ。』

『え？　さつきの……』
かう言つて、間を置いて、
『二人ともか？』
『上さまも一緒だァ。』
『え、……それは大變だ。』
かう從弟は言つたが、二三歩妻の方に戻つて、
『Sが死んだとよ。夫婦とも……。さつきの雷樣で……』
『え！　姉さんも？』
畠の中に棒立に立つてゐた細君もびつくりして了つた。
『何んちふこんだんべな……』
『何うして、二人とも打たれたんだ。一緒にゐたんか？』
『俺ら知らねえが、大急ぎで知らせに來たゞァ。』
『それは大變だ……』
從弟夫婦は慌てゝ田から上つて此方へとやつて來た。
『お袋さまは大丈夫か？』

『お袋さまァ、すぐ下にゐたんださうだが、大丈夫だつた！　屋根から黑い煙が出るのでびつくらして近所で行つて見たら、二人打たれて死んだ中に、お袋さまァ、死んだやうになつて突伏してゐさつしやつた。』

『兎に角、俺が先きに行く……。お前はあとから來う。』

かう言つて、足を洗つて、着物を着改へて、從弟は作と共に大急ぎで出かけた。

いろいろなことが颱風のやうに從弟の頭の中をかけめぐつた。《あの夫婦が――あの一生を喧嘩で送つて來たやうな夫婦が雷に打たれて死ぬとは！　しかも一緒に死ぬとは！》第一にさうしたことがかれの胸を塞ぐやうにした。目に見えないある不思議の力があつて、そしてそれが必然的に自分達の上に働いてゐるやうにも考へられた。お元のことなどもそれに雜つて浮んで來た。

隣村までは足も地に附かないやうであつた。かれの眼には、忽ちそのS家の周圍に大勢人達の集つてゐるのが映つた。一ところ穴の明いたやうに雷に燒けた屋根から、火を消したあとの煙が薄く白くのぼつてゐるのが映つた。かれはそこらに手傳に來てゐる近所の人達に挨拶するのも匆々に、舊い大きなSの家の中に入つて行つた。一番先きにSの妻の慘めなさまをして俯伏になつて倒れてゐるのがかれをぎよつとさせた。それは丁度二階に上る階梯の下のところになつてゐた。

『Sは？』

『二階です。』

かう言はれて半ば燒けて危なくなつてゐる階段を上つて行くと、果して其處にぴたりと押潰したやうに黑焦になつて死んでゐるSが横はつてゐた。

『ふむ……』

かう言つたきり、從弟は暫しは口も明けなかつた。

老母は奥の一間に小さくなつてすくんでゐたが、その嚴かな光景からは、今だに恐怖の念を脫することが出來ないやうに、ぶる〳〵と體や手を顫はしながら從弟を見た。話してきかせやうにも容易に話してきかせることは出來ないといふ風であつた。『罰だぞな！　矢張、あまりに我儘をした罰だぞな。』かう言つてまた體を顫はせた。

傍でいろ〳〵なことを言ふのを老母は押へるやうにして、『罰だともな……。あらたかなもんぢや、恐ろしいもんぢや、でなくつて、何うして二人がこんな死にざまをしよう！　罰だ罰だ！』かう言つて手を振つた。

その怖ろしい光景は、顫へおの〻かずにはゐられないやうに今も老母の眼の前にあつた。老母はどもりながら絶え〳〵に話した。『なァ、その少し前にだつて、二人は喧嘩してゐただ。見なされ、それ、そこに荷物が出來てゐるだらう。嫁は、何うしても、もうゐられないつて言うて、荷物をまとめて里に歸る

支度をしてゐたぢや。あゝ、さうぢや、さうぢや、お元――あの女のことがあつたぢやよ。隱して、せがれが圍つて置いたのぢやよ。それがな、おのし、』小聲で、從弟の耳の傍に口を寄せて、『昨日あたりすつかり嫁に知れてな……。それから一喧嘩ぢやつたのぢや。私はもう聞くのがいやぢやで耳を塞いでゐたぢや。ところがな、あの雷樣ぢやらう。二階の戸が外れてそれがガタ〳〵する。雨が降り込む。せがれは一度上つて行つたつけ……。下りて來て、戸を釘で打ちつけるとか何とか言つて、また上つて行つたぢや。そしてな、おのし、カン〳〵やつて御座つたが、長い釘がないとか何とかで、M子を上から呼んだぢや。M子も喧嘩はしてゐても夫婦ぢやでな、何かぶつ〳〵言ひながら、せがれの言つたものを持つて上らうとした――その時ぢや、あの雷樣は……』

『釘か、金槌かに感電したんですね。』

『さうぢや。嫁のは、二階に上らうとするところを簪か何かに落ちたといふことぢや……。罰ぢや。罰ぢや。罰に違ひないぢやが、それにしても、二人一緒に死ぬとは！　あの一生喧嘩して來た二人が一緒に死ぬとは、よく〳〵のことぢや。これも前世からの劫ぢやなあ！』かう言つて老母はさめ〴〵と泣いた。

『その時伯母さんは何處にゐたんです？』

『私はすぐそこにゐたぢやがな……。私一人取殘されて。因果ぢやな。』

『そんなことはない。兎に角、伯母さんだけでも助かつて好かつた。』

『私なんか死ねばよかつた……』

老母はさめざめと泣いた。

九

その夜、遲くそれを聞いて轉ぶやうにして入つて來たお元は、奥の間に二つ並べられた死骸に取附いて、

『私だけ何故殘して行つて下すつた……。奥さんは、一緒に行かれたから好い。私は、私は……一人殘された私は！』かう言つて泣いて泣いて泣き盡した。

號泣

一

順吉が寢臺の上で朝の牛乳と小量の粥を食つて了つた時であつた。

體が起されないので、それを見ることは出來なかつたが、ふとかれは釣臺のギチギチする音だの、柴折戸を明けて、そらそら突つかゝるなどと注意する聲だのを耳にした。もう役場の人が釣臺を人夫に擔がせてやつて來たのであつた。

『あゝ來た！　今日は行かなくちやならない。』

かう順吉は思つた。

續いて叔父は來てるかしらと思つて耳を欹てた。まだ來てゐないやうであつた。妹はさつきちよつと顏をかれの寢臺のところに見せたが、何か用事でもあるやうにそはそはして、やがて何處かに行つて了つた。順吉は淋しい氣がした。

庭では人夫等が何か言つてゐる聲が聞える。大方緣側にでも腰掛けて煙草でも吸つてゐるのだらう。と、涼しい朝の庭に釣臺の置いてあるさまだの、澤山並んでゐる盆栽だの、朝顏の花だのが眼に見えるやうな氣がした。空が紺靑のやうに美しく晴れてゐるのは、窓からさし込んで來てゐる明るい日影で知れた。

人夫の話聲に雜つて、をりをり役場の人らしい太い聲がしてゐたが、突然叔父の『御苦勞さまです。』といふ聲がした。矢張叔父は來てゐるのであつた。

順吉は此處に來て、もう十日以上になることを思つた。人間一人を生かすためとは言へ、またさうした行懸りであつたとはいへ、見ず知らずのかれのために、此處の院長、細君、看護婦から受けた手厚い深切な取扱ひをかれは感謝せずには居られなかつた。從つてかうしたかれを、引取手のないかれを、言はば追ひ出すやうにして養育院に送り出さうとするのをも順吉は決して憾みには思つてゐなかつた。順吉は事件があつてから、散々促されてそして昨日漸く田舍から叔父が出て來たことを思つた。役場の役人と院長と叔父と、かう三人して種々善後策について話したことを思ひ出した。叔父は最後に、『それはとても私には出來ません。さういふ資力はありません。いくら叔父でも何うも爲方がありません。』と言つた。と、役場の役人は、いくらかその薄情に激したといふやうにして、『好う御座んす。それなら、私の方でします。』かう言つて、そして直ちに養育院に送る手續をしたことを順吉は思ひ出した。

順吉は何故あの時死んで了はなかつたかと思つた。

しかしさうした考も、既に餘りに度々起したので、始めのやうに、始めて遊女屋から此處に擔ぎ込まれた時分のやうに、強い刺戟をかれの心に齎さなかつた。かれは何方かと言へば、ぼんやりしたやうな心持で、自然の成行に任せるより他に爲方がないと思つた。

叔父だの妹だの役場の人だの書生だのがやがてぞろぞろとかれの室に入つて來た。かれは妹の肩に體を寄せ、足を書生に持つて貰ひ、胴中を叔父に支へて貰つて、そしてその十日間ゐた寢臺から廊下に出て、それから庭の石の上に置いてある釣臺の方へと伴れられて行つた。廊下や緣側には、赤兒を抱いたやさしい此處の細君や、その上の幼い兒を負つた老婢などが皆な出て見てゐた。老婢の涙ぐんで見送つてゐるのを順吉は見た。

『いゝよ、いゝよ、敷布はその方が好いよ。そつちの方が綺麗だよ。』

かうやさしい細君は言つた。

釣臺には既にさつぱりした蒲團が敷かれ、枕の布も新しく、寢心が好いやうに十分に設備されてあつた。順吉はそこに移された。

『氣をつけてね、あんた等……』

老嫗はいくらか聲をうるませて人失達に言つた。

順吉は病院の人達に何か一言お禮を言ひたいと思つたけれども、しかもそれすらかれには言へなかつた。

朝の庭の樹の葉の影が日影を透してかれの顏やら手足やらにチラチラ動いた。人足達はやがてそのまま釣臺を擔ぎ上げて、庭から柴折戸の開いたところを靜かに戸外へと出て行つた。

二

順吉は誰か一緒に尾いて來るのだと思つてゐた。しかし人足達はそのまゝ足を留めなかつた。釣臺はぐんぐん動いて行つた。叔父も、妹も、役場の役人も誰もついて來なかつた。

かれはさびしい悲しい氣がした。涙が胸につき上げて來た。

美しい晴れた夏の朝がかれの周圍にあつた。碧い空、そこに浮いてゐる引きちぎつたやうな白い雲、朝の中にだけ見られる町の凉しい影、凉しさうな浴衣がけで、歩いてゐる男や女の影、その間を釣臺は輕い動搖と靜かな足取りで動いて行つた。そしてその動搖の中にかれの悲しい涙と悲痛と追憶とが雜り合つた。かれは胸の上に手を固く組んで、爲方がないといふやうに弛んだ瞼をつぶた。果てなく流れひろがつて行く洪水の中にその身が浸つてゐるやうな氣がした。

きらきらと照りかゞやく日の光は、釣臺にかけてある白い布を透して、黃く明るくかれのつぶつた眼

に映つた。かれはをりをり眼を明いた。と、忽ち硝子の破片のやうにきらきらする光が眩しくかれの眼を壓した。かれはまた眼をつぶつた。

何處を通つてゐるのだらう。時には、こんなことを思つて、首を少し振つて、横に頭を伸して、三角にひらいてゐるところから外の樣子を覗いて見た。

そこには白く光る廣い道があつた。暗い低い家がゆらゆらと流れるやうに搖いて行くのが見えた。電車の線路もなく、人通りもあまり澤山ないのから押して、こゝは山の手のさびしいところだらうと思つた。

をりをり人夫は立留つて肩を替へた。時には豫備について來た一人がそれに代つたりした。かれ等は『重い病人だから』と豫め吩咐つて來てゐると見えて、さういふ時にも成るたけ靜かに丁寧にするらしかつた。歩く時にも成るたけ靜かに、釣臺が動かないやうにして歩いた。俺のやうな碌でなしを、叔父にもあれほど罵られたやうなこの身を、假令重い病人であるとは言へ、かうして劬つてやつて呉れると思ふとまたしても涙が出さうになつて來た。

時にはまた順吉には、かうしてあるところからあるところへと移されて行く途中が、かれの數奇な、ロマンチツクな半生のある際立つたシインのやうに思はれた。出て來たところも見ず知らずの他人なれば、これから行き着かうとするところも社會の最も底の暗いところである。かれは昨日、養育院の二字

を耳にした時の暗い心を再び心にくり返した。

俺はそこに行つて死ぬかも知れない……。かう思ふと、いつそ死んだ方が好かつたと度々思つたそれとは丸で違つた悲しい心が湧くやうに簇り上つて來た。かれは養育院で死ぬべく生れては來なかつた筈だ。まだ希望も理想もあつた筈だ。何うかして人間として浮び上りたいばかりにいろ〳〵な苦痛をも難儀をも凌いで來た。……それが僅か一年ばかりの間に颶風のやうに捲き上つて來たこの事件、そこまで考へて行つた。かれは、急にさうした考へから離れるべく努力した。その先には、思ひ出すにすら堪へられない悲慘なシインがあつた。女はうんと唸聲を立てゝぐつたりとなつた……。

かれはまた體の流れて行くのを感じた。かれは何をも思ふまいとした。かれは再び眼をつぶつた。

肩をかへた人夫達は、

『暑いな！』

『何うも暑い……』

かう言つて、だらだら落ちる汗を拭ふらしい氣勢がした。釣臺はまた靜かに動いて行つた。今度眼を開いて見た時には、順吉の眼には阪のやうになつてゐるところが映つた。そこにある店の前では、若い丸髷の上さんが頻りに何か話してゐるのが見えた。自轉車が飛鳥のやうにかれの傍を掠めて下りて行つた。

三

妹はそれでもよく來て世話をして吳れたとかれは思つた。

妹の身にしても可哀相だ。親のない二人は互に援け合はなければならない筈であるのに……。妹は兎に角東京に出て、兄には世話もかけずに、自分で奉公口をさがして、二三年そこに奉公して、その家族の人達にも信用され、行く行くは、そこから嫁にやつて貰ふことが出來るまでに辛抱したのに、かうしたことを自分がやつたがために、それが新聞に書かれたために、その家族の中に奉公してゐることが出來なくなつて、そしてそこをも出なければならなくなつた。それは今は別に奉公口を搜して、困つてはゐはしないけれども、そのことがあつた時には、一番先きにかけつけて吳れて、それから何のかのと言つてはよくやつて來て吳れた。こんな腑甲斐のない兄を持つた妹は可哀相だ……。

かれは昨日、始めて叔父が田舍から出て來た時にも、口をきかなかつた。かれは叔父の顏を避けた。覗かれる時にはわざと眼をふさいだ。叔父も重大な病人と思つたらしく、强ひて口を利かうともしなかつたが、日が暮れてから、叔父はギィ〳〵と蟲のなく庭の方へ足を投げ出しながら、暗い方に眼をやつて、團扇をつかつてる妹に小聲でいろ〳〵なことを話した。

『本當にしやうがありやしない。何處にだつて顏向けも話も出來やしない。だから、順吉がかう〳〵だと言つて相談に行くことも出來やしない。これが當り前の病氣つて言ふんなら、親類にでも誰にでも相談のしやうがあるんだけれど、恥晒しな、本當に、馬鹿なことをしたもんだ。』

『……』

妹は何も言はなかつた。

四

ふと氣が附くと、大きな寺の門が見えた。かれは頭を横に捩つてあたりを眺めた。廣い白い埃の立つ通りがかれの前にあつた。

『護國寺だな。』

かう順吉は思つた。

こゝらはかれが東京に出て來た時によく歩いたところであつた。あの長い廣い通りの山に寄つたところにSといふ國の友達がゐて、そこにかれはよく遊びに行つた。寺の境内などをもよく獨りで種々な空想に耽りながら歩いた。櫻の見事に咲いてゐる山門の下の休茶屋の赤毛布の上にも休んだことが何遍もあつた。

矢張失敗して國の方へ歸つて行つたSのことなどをかれは思ひ出してゐた。

『もうぢきだ。』

『あそこだ……。あの坂を登つて、大塚に出ればもうすぐだ。』

こんなことを言ひながら、人夫達は立留つて肩を代へた。

順吉も養育院のあるところをよく知つてゐた。その長い板塀につゞいて大きないかめしい門のあるのを通りから覗き込んで、かういふところに入れられる人間もあるんだと思つたこともあつた。壯健な、まだ年若いかれには、そこは人生の最も悲慘なところ、暗いところのやうに思はれた。そこに入るやうな人達は、生きながら地獄にでも墜ちたものゝやうに思はれた。可哀相を通り越して、淺猿しくすらも思つた。其處に今はかれも行きつゝあるのであつた。

だら〳〵した坂を上り切ると、そこに電車のレールの通つてゐる大きな白い埃の立つ通りがあつて、そこを斜に横切つて、向う側の日蔭のところの方へ人夫達は寄つて行つた。

『あそこだらう?』

『あそこだ。』

かうかれ等は指し合つた。

間もなく向うに、右に、長い板塀の連つてゐるのが見え出して來た。大きな石の門の柱の立つてゐるところまでは、もうそこからいくらもなかつた。

靜かにその大きな門の中に鈎臺を入れて行つた人夫の一人は、すぐ左のところにある門番のところに行つて、

『新宿の役場から病人を伴れて來ましたが……』

かう言ふと、

『はァ、はァ。』

と面倒臭さうに門番の爺は答へて、『これからずつと行くと、正面の玄關に行く前に、左へ行く廣い道があるから……そこに行つたら、左に小屋があるから、そこに行つてお聞きなさい。』

それでも爺さんは下駄をつゝかけて、表へ出て、その道を人夫に指し示すやうにして言つた。

人夫達は默つて、また鈎臺を擔いで、褐色をした土地のやゝ小高くなつてゐる、潤い、兩側に檜の坊主形に刈り込んである庭樹の傍をゆらゆらと靜かに歩いて行つた。

日は暑くキラ〳〵と照つた。

少し行くと、果して門番の言つた通りに、正面の大きな嚴めしい玄關に突當る前に、左に入つて行くかなりに大きい道があつて、その向うに新しく建てたらしい小さな家屋があつた。そこらには芝草が一面に綺麗に刈込まれてあつて、その彼方には、硝子窓のかなりに古くなつたペンキの色の褪めた大きな家屋があつた。

『此處だらう？』

『さうだ、此處に違ひねえ。』

こんなことを言つて、かれ等は釣臺をそのまゝ其處に下した。

小屋の方へ行つたらしい人夫はやがて戻つて來て、

『誰もゐねえや。』

『何うしたんだ？　がら空きか？』

『がらあきだ……』

かう話し合つてゐたが、爲方がないので、そのまゝ始めの人夫は、奥の古い家屋の方へと行つた。

下した釣臺の上には、高い樹が涼しい蔭をつくつて、梢では油蟬がディヂィ暑さうな聲を出して鳴いてゐた。あとに殘つた二人の人夫は、棒端に身を凭らせかけて、頻りに汗を拭いてゐた。風の通る度に涼しい影が釣臺の白い布の上に搖いた。

暫く經つた。

やがて白い消毒衣を着た若い男とそれよりはいくらか年を取つた男とが、さつき行つた人夫を先きに立てゝ、その大きな古い家屋の方から歩いて來た。年を取つた方の男は白い着物を抱へてゐた。

かれ等は何も言はなかつた。また病人にも話しかけようともしなかつた。かれ等は唯默つて傍に寄り

て來て、釣臺の上を蔽つた白い布を人夫と一緒に外した。

と、急に、青い明るい空の光線がぱつと順吉の顔に落ちた。

順吉は眼をつぶつた。

消毒衣を着た若い男は、小屋の方へ歩を運んで行つたが、やがて其處から戸板を一枚其處に持つて來た。その上には既に薄い白い蒲團が敷かれてあるのを順吉は見た。

矢張かれ等も人夫も何も言はなかつた。かれ等は人夫と共に默つて順吉の頭と足と胴とを持つて、かれの體を釣臺から戸板の上へと移した。年を取つた方の男の持つて來た白い着物を枕にして……。

しかしそこは前のところよりも、いくらか涼しい樹の影の深いところで、風が靜かに傍の芝草の上を吹いて通つた。

人足はこれで自分だちの仕事はすんだといふ風に、そこそこにあたりを片附けて、そして歸る支度をした。

『元の路を歸るかな！』

『あそこよりも、橋の方へ出て行く方が近いだらう。』

『さうだ……あの方が近い。』

こんなことを言つてゐたが、別に挨拶をするでもなく、また消毒衣の男達に言葉をかけるでもなく、

そのまゝ釣臺をかついで、靜かに向うに行つて了つた。

消毒着の二人も、しばし其處に立つてゐたが、これも矢張默つたまゝ、元來た古い家屋の方へと引返した。

一人そこに置き去りにされた順吉は、悲しいとも何とも言はれないやうな心持がした。病院の柔かい蒲團、あのやさしい細君の拵へて呉れた枕、白い毛布、さういふものは皆な持つて行かれて了つて、薄つぺらな一枚蒲團の上に古着物を丸めたのを枕にして、かうして一人地上に——戸板の下はすぐ土である地上に横はつてゐるのを何とも言はず悲しく思つた。これでは、これから先き、どんなことをされるか知れないとすら思つた。

蟬が頻りにヂイヂイと鳴いた。

五

かうしてかれは一時間近くもそこに横はつてゐた。

涙は絶えずかれの青白い頰を流れた。

樹の間を洩れて來る日影は、濃淡の縞を横はつたかれの體の上に投げた。大きな茶色の犬がちよつと傍に寄つて來て、あたりを嗅いで、そしてそこにゐるかれを不思議さうにして見てゐたが、それもやがてはのそのそと向うに歩いて行つて了つた。

構内はしんとして蟬の聲の他には何の物音もきこえなかつた。

また暫く經つた。

ふとまた向うの古い家屋からさつきの二人の此方にやつて來るのが小さく見え出して來た。それを見た時には、順吉はぽつとした。救はれたやうな氣がした。

今度は二人の後に、さう若くもない醫者がついて來た。

三人はこの戸板の周圍に來て立つた。

二人は順吉の傍に寄つて、今まで着てゐた着物を脱がせて、持つて來た院の白い着物を着せた。

繃帶が彼方此方にしてあつたり、手足や體が自由にならなかつたりするので、その着物を着せるにも容易なことではなかつた。傍で立つて見てゐた醫者までがぢれつたさうにして、

『何うしたんだ？　一體……』

かう突慳貪にかれに訊いた。

『……』

かれは何とも言はなかつた。

漸く院の着物を着せたあとで、醫者は傍に寄つて來て、かれの身體を診察した。嚴めしい鬚の生えた

默つた不機嫌らしい顏が順吉の靑白い憔悴した顏と相對した。他の二人も矢張默つて見てゐた。

診察はごく簡單であつた。

『よし。』

と言ふやうな表情をして、醫者は向うへ歩いて行つた。

と、今度は二人は傍に寄つて來て、戸板に載せたまゝでなしに、そのまゝかれをぢかに抱きかゝへようとした。順吉は戸惑つたやうな氣がした。かれはするがまゝに任せた。

胴を抱へ、手足を持つた二人は、足早に向うに見える古い大きな家屋の方にかれを伴れて行つた。

順吉の眼には、古い、田舍の紡績工場のやうな家屋が映つた。棟は高いが、あたりはがらんとして、低い二三段の入口の階段を上ると、ひろい板の間に種々の病人を乘せた寢臺がごたぐゝと置いてあるのが見えた。

かれの重い體を抱いて來た二人は、寢臺と寢臺の置いてある板の間にぢかにかれを下した。二人ははアはア呼吸を吐いた。

そこは人の通る道だつた。

あたりにゐる人達は、皆なめづらしさうにして、さながら蜜に集る蜂のやうにして、板の間にぢかに置かれたかれを覗くやうにした。二人も、三人も……。すぐかれの頭の上の寢臺にゐる病人もわざ〳〵

首を伸ばすやうにした。

さつきとは違つた醫者がやつて來た。周圍の視線は益ゝ密に彼の身に集つて來るのを順吉は感じた。

『何うしたんだ！　一體……？』

かう醫者は訊いた。

『……』

矢張、默つてはゐたけれども、もう何うせ聞かれずには置かれまいと思つて、かれは腹の中で覺悟をしてゐた。しかし、かれに取つては、かうした大勢の人達のゐる中で聞かれるのが辛かつた。何處か別なところで調べるなり聞くなりして貰ひたいとかれは願つた。しかしそんなことは言つてゐられなかつた。

醫者は胸の傷だの、首の傷だのを調べてゐたが、

『何うしたんだ？　此處は？』

かうまた繰返した。

順吉はいくらか自暴氣味になつた。面倒臭いなアとも思つた。あらひ淺ひ言つて了ふ氣になつて、

『自分でやつたんです。……女と一緒に短刀で突合つたんです……左の方の傷は女がつき刺したんです……首の方は……』

二人で情死を計つて、自分一人死にそくなつたんですと言へば、一番わかりが好くつて好かつたのだ

けれども、何うも順吉にはさうは言へなかつた。それから順吉は、自分でやつた傷ばかりでないと言ふことを言つたのを、何だか殊更に責任を他に嫁して、しかも死んで了つた女に嫁して了つたやうな卑屈さを感じたけれども、情死とはつきり言ふことの出來ない上は、何うしてもその狀態をそのまゝに言ふより他爲方がなかつた。

『何うしてそんなことをしたんだ……』と醫者がつゞけて聞くかと思つたら、醫者はそれはきかずに、却つて、

『えらい事をやつたな。』

いくらか親しみを持つたやうな調子で言つた。

『相手は何うした？』

つゞいて小聲で訊いた。

『死にました。』

『フム。』

醫者は頭を振るやうにした。すぐ言葉をつゞけて、

『で、今日まで引取られた病院にゐたんだな。』

順吉は點頭いて見せた。

『幾日になる。』

『もう、今日で十一日目です。』

それだけで、外に何もきかずに、醫者は胸の傷を檢した。しかし別に病院にゐた時のやうに詳しく診るでもなく、ちよつと見て、顏をしかめて、そして今度は首の傷を檢べた。

かうした重い患者である。死ぬか生きるかもわからないやうな病人である。從つてそれと知つたならば、重い傷痍を檢べたならば、一刻も早く此身を何處かに伴れて行つて、寢臺の上に寢させて呉れるだらうと順吉は思つた。しかし醫者にはさうしたことは望まれなかつた。醫者はそれがすむと、さつさと向うに行つて了つた。そのまゝかれを板の間の上に殘して——。

以前にもまして、そこにゐる大勢の人達の眼はかれに注がれた。その短かい會話、ほんに短かい會話であつたけれども、女と短刀で突き合つたと言ふ言葉は、人達に情死を思はせるに十分であつた。囁くやうな聲はそこにも此處にも起つた。近いところから段々遠くへと波でも傳はるやうにして傳はつて行つた。

『情死だとよ。』

『えらいことをやつたもんだな。』

『女は死んだんだとよ。』

『誰も、引取手が無いんだとよ。』

こんな言葉が一時ガヤ〳〵とあたりに喧しく聞えた。皆な首を擡げて、――重い病人らもわざわざ首を擡げて、そしてかれを見るやうにした。順吉は身の置きどころもないやうな氣がした。

六

しかしそれも暫くの間で、何んなめづらしいものでも、見るものを見て了ひさへすれば、それでたんのうしたと言はぬばかりに、または他のことよりもてんでに自分の身が顧みられるといふ風に、皆なかれから注意を離して了つた。

いろいろな聲や、話聲や、笑聲がまたガヤガヤと廣いその一間の空氣に滿ちた。

それは順吉のやうな悲慘な境遇に身を置いたものゝ眼から見ても、あさましい悲しい情ない氣のするやうなシィンであつた。此處は離隔室と言つて、此處に入つて來た病人を、病室のきまるまで一時ゴタゴタに入れて置くところであるが、かうしたところに入つて來るものだけあつて、一人として滿足な人間のさまをしてゐるものはあたりに見當らなかつた。青白い顏、鐵色をした顏、餓ゑ切つたやうな顏、死に瀕した顏、病に衰へた顏、さうしたものが丸で地獄へでも行つたかのやうにごた〳〵とあたりに滿ちた。かれの置かれた向うの寢臺にゐる中年の女は、今にも死ぬかと思はれるやうな呼吸で、時々氣味の

わるい唸聲を立てた。

そして、かうした混雜した一間の中を、自分も曾て收容者であつた男が、世話役とか、働きとか言ふ名に呼ばれて、その多くの寢臺の間を縫つて、いろいろと病人達の世話をして歩いた。

その世話役の男は、何遍となく、また何人となく、かれの横はつてゐる傍を通つて行つたけれど、また傍に近寄つて來る度に、きめられた寢臺へ自分を伴れて行つて呉れるのかと期待したけれども、しかもいつも知らん顏をして、そこに板の間に物か何かのやうに轉がされてあるかれの傍を何の注意も拂はずに通つて行つた。

午はもうとうにすぎて了つた。否、尠くとも午からはもう三時間は經つた。護國寺を通る少し前に、かれは午砲の音のひゞくのを聞いた。それからもう隨分時は經つた。見ると、日差しもかなり傾いて、廣い間の西の硝子窓からは、廊下の板の間に二尺も日光がさし込んで來てゐた。

午の牛乳もお粥も順吉は竟に得ることが出來なかつた。

と、不意に、風呂敷に長い箱を包んだやうなものを持つた男が入つて來た。と、

『おい！』

『おい、此處だ。』

『菓子屋、此處だ。』

あつちからもこつちからも聲がかゝつた。

その男は先づ手近なところから、一つ一つ用をすまして、そして多い寢臺の間を縫つて、段々呼ばれた方へと近寄つて來た。

始めは順吉にはそれが何であるかちよつと飲み込めなかつたが、やがてそれは小芝居や活動小屋などでよく見る仲賣のやうなものであるといふことがわかつた。かうしたところにゐる人達も、矢張午後には茶受が欲しいのであつた。

『おい、早く來て呉れ。』

『此處だ、此處だ。』

などといふ呼聲がそこからも此處からも起つた。

丁度順吉の横はつてゐる前にその男がやつて來た時には、そのすぐ上の寢臺に寢てゐる患者が呼んだので、男はそこに黑い風呂敷に包んだ菓子箱をひろげた。其處にはビスケットだの菓子パンだの安い餅菓子だのがゴタゴタに入つてゐた。

『これを二つ。』

かう言つて、その患者は鹿の子らしい菓子を手で取つて、寢臺の蒲團の下からいくらも入つてゐないらしい財布を出して、そこから銅貨をチャラチャラ音させてわたした。近いところにゐる體のきく患者は、

待ち兼ねて立つて來て、二人も三人もその周圍に集つた。

『今日は遲いぢやないか……』

かうその一人が言つた。

『え、向うで手間を取つちやつて……』

辯解するやうに、菓子屋が言ふと、

『もう二人三人來ても好いんだ。賣れるぜ、本當に……。好い儲けが出來るぢやねえか。もう一人は何うした……』

『岩松、何うしたか、さつき、そこらにゐたつけがな。』

一人買ひ、二人買ひして、菓子屋は段々向うに行つた。順吉の横はつてゐる傍を通る時にも、何の注意を拂ふでもなく、そこに人が寢てゐるのも何も知らぬやうにして平氣で掠めて通つて行つた。

順吉は堪らなく悲しくなつて來た。

これでも人間だううか。生きてゐる人間だらうか。かう思ふと、今更ながら突落された深い悲痛な谷底、浮び上りたくても容易に浮び上ることの出來ない谷底が深く顧みられるやうな氣がして、またはこのままにいつまでもいつまでも永劫に此の板の間に死體か何ぞのやうになつて横はつてゐなければならないといふやうな氣がして、かれは聲をあげて泣き出したくなつた。

七

やがて入つて來た叔父も由子も、流石にあたりのさまを見ては、はつとせずにはゐられなかつた。かれ等の眼には、板の間にころがされて、じつと眼をつぶつて、痩せこけた頰に涙をほろほろと流してゐる順吉のさまが映つた。

息も絶え絶えに見えた。

『これは！』と叔父は思つた。

傍には働きの男が立つてゐたので、『や、いろいろとお世話さまです、』と言つたが、その聲にはつとして眼を明いた順吉は、其處に叔父と妹の立つてゐるのを始めて見て、急に嗚咽が込み上げて來て、顏の筋肉がひッつるやうになつて、思はずウオオと泣いた。

『何うした、うん、何うした……』

叔父と妹とは傍に寄つて來た。

働きの男も、此さまを見ては、流石に氣の毒になつたといふ風で、生憎、空いた寢臺がなくつてとか何とか言つてゐたが、そんなことには頓着せずに、また大勢そこに人が見てゐるといふことにも頓着せずに、

『叔父さん、僕は飛んだ事をしました。僕は……僕は……』かう言つてまた順吉はウオウオ泣きつゞけた。

彼の一日

『順さん、順さん。』

かう言ふ聲が耳に入つて、はつとして眼が覺めた順吉は、爺さんが床の中て眼を明いて笑ひながら此方を見てゐるのを見た。さうだ、昨夜頼んだ通り、爺さん、忘れずに起して吳れたのだ……。かう思つてかれはすぐ飛び起きた。

もう外は明るくなつてゐる。何時かしらと思つてゐる途端に、何處かの工場での汽笛がボウと長く引くやうに鳴つた。いつも聞く汽笛である。爺さん、よく忘れずに起して吳れた——。

『五時のボウだね。』

『さうだ——』

爺さんは笑つてゐる。

『お爺さん、よく眼がさめるね。昨夜頼んだ通りに起して吳れたね。』

『さつきから、もう眼が覺めてゐるだよ。年寄は何うも寢られねえ。』

『何うも難有う……』

かう起して貰つた禮を言つて、そして順吉は着物を着改へた。

『何處へ行くだね。こんなに早く……』

『朝、一廻りして來ように思つて……。此頃は今時分、町を歩いて來ると、好い心持だからね。』

『さうだらうな。』

順吉は昨夜爺さんに酒を買ふ錢をいくらかやれば好かつたと思つた。二三日前かれは親方から給料を貰つたので、財布の中にはいくらか金がある。可哀相な爺さんだ。親方が親身の子でありながら、食はせて置くのさへ餘計な者のやうに言はれて、始終ぶつぶつ言つてゐる。好きな酒も滅多に飲めやしない。時々カブトをきめて來るが、それは親方の妹の他に嫁いでゐるところから貰つて來るので、親方は一文だつて小遣をやりやしない……。爺さん、今年七十五だ。かう年を取つて、かうした眼に逢つても、それでも生きてゐたいのかしら？　この爺さんでも、矢張若い時は種々なことをして來たのかしら？

……俺はあの時死んでたら？　ひよいとさうした考が順吉の頭を掠めたが、その時のことは、既に餘りに多く思ひ出したり、考へたり、涙を流したりしたので、もうかれにもめづらしくなくなつたと言ふやうに、別に深くもかれを動かさずにそのまゝ頭の中を通り過ぎて行つて了つた。

『昨夜、二十錢もやれば好かつた……』

通りに出ても、かれはこんなことを思つてゐた。

しかし、親方が下にゐるから、それが知れると、また面倒だ……。親方のゐない時にしよう。かう思つてやめたかれの心が、歴々とかれの居る小さな理髪店のさまをかれの眼の前に展げて見せた。

そしてかれは其處に來るまでの徑路を繰返した。死ねば好いと思つた創痍が治つて、誰も引取人のないために入れられた養育院から戻つて來たが、それからかれは、其處と、彼處とを訪ねた。何處でもやさしくして呉れた。昔のやうに人が辛くかれに當らなかつた。またかれからその話を、悲慘なその話を、誰も聞かうとはしなかつた。人は唯かれの顔と體とを捜した。

新聞配達、勞働夫、印刷所の職工、牛乳配達、さうしたものゝ中から、かれが以前にやつてゐた職業の中から、かれは生活の道を求めなければならなかつた。しかしもう何も彼もする氣はなかつた。殊にさうした烈しい勞働めいたことは――。で、かれは砂塵の立つ古着屋の店に一月ほどゐた。そこにそのまゝゐても好かつたのだが、そこの主人は深切で、かれのやつて來た悲劇に同情して呉れて、いつまでゐても好いと言つて呉れたけれど、ふと十七八の頃に二二年年期を入れた理髪店にまた入つて見る氣になつて、そして此處にやつて來た。此處の親方はその時分知つてゐた人だ……。

朝の空氣が好い心地にかれの周圍にあつた。まだ都會はすつかり眼覺めない。電車はもう通り始めたけれど、大通りにはまだ人も車も多く通つてゐない。六月の朝霧が薄くしつとりと濡れたやうにあたりをこめてゐた。

その薄い霧の中に、黑ずんだ割下水が見え、つゞいて橋が見えた。橋の上を通る時、ふと綺麗な白髮頭の中老の人が立つて川を見てゐるのを見た。すれ違ひさまに見た顏が誰かに似てゐるのだと思つたら、それは自分が半年ゐた養育院のMといふ收容者上りの役員の顏に似てゐるのだといふことが思ひ出されて來た。あの男だつて、この人のやうにネルの着物でも着せて、綺麗にしてゐたら、立派な旦那になるだらうと思ひながらかれは歩いた。

順吉が今朝特に早く起きたのは、店の仕事を始める前に、いつも親方に起される時間までに、頭を刈つて來ようと思つたからであつた。人の頭は刈つてやつても、自分の頭は刈るひまがない。毛が延びてぼさぼさしてゐる。それに、今日は一つ好い理髮店の職人の刈るのをよく見て來て、そしてそれを自分の參考にしやうなどとかれは思つた。

かうして朝早く町を歩くのは、かれに取つても、久し振りなので、全く好い心持がした。ふと新聞の配達をした頃のことが思ひ出されて來た。あの時分は、よくかうした朝を早く出て歩いたものだ。何も苦勞といふ苦勞もなかつた。無邪氣だつた。今の中はかうして苦學してゐても、今に、豪くなつて見せるぞと思つてゐた。それが今では……。氣が附くと、一人の若い新聞配達が、向うの横町から走つて出て來て、その横町の角の家の戸の隙から新聞を一枚さし入れて、そしてまた向うに走つて行つた。その男が何處か、横濱の支局にゐる時分、集金を拐帶して逃げて行つた男に似てゐるので、かれはその時分のことを思ひ出した。

……また眼の前に見えて來た。眞黑な女の唇が蟻のやうに白く、觸ると圓く冷くなつた顏、自分の左の胸の傷口からは血がどうどうと流れた。漏斗の口から醬油の出るやうに……

かれは簇るやうに起つて來た心の繪をかきのけるやうにした。

大通りを通つて行く人の方にその心を移すやうにした。

氣が附くと、橋の畔だ。

もうそこには、電車の來るのを待つてゐる人がチラホラゐた。かれも乘つて行かうと思つたが、何うせ、橋を渡ればすぐ乘り替へるのだから、それよりはと思つて、ずんずん歩いて行つた。大きな鐵橋が朝霧の中に見える。川が晴々と見わたされる。傳馬が碧い水の上を滑るやうに動いて行く。向うの岸の二階屋はまだ雨戸が閉つてゐるのが見える。……男の長く床の外にはみ出した手の向うに、床と不平行に

なつて、臺の上に、ぽつとりとした血を塗つて、柄まで血に汚れてゐる短刀がほうつてあるのが見えた。女の左手の傍にも投り出された血塗みれの短刀があつた。……

さうした心の光景を押へ押へ、かれは橋を渡つた。しかし、さうした悲慘な光景も、その當時乃至は病院にゐた時分、または養育院にゐた時分とは違つて、さういふ風に思ひ出して來ても、決して烈しい强い悲哀や悔悟を誘つては來なかつた。古着屋の店にぼんやりしてゐる時分には、よく死んだ女のことを思ひ出しては涙を流した。俺はもう一生獨身だ。俺には死んでもあの女がゐるのだ……。俺のこれからの一生は、あの女のために働くのだ。かう痛感してよく心の中に絶叫したが、今ではもうさうした色濃い感じは起らなかつた。かれは自分のやつたさうした悲劇を、單に繪として見ることが出來るやうな氣がした。

しかし、單に繪としても、決して好い繪ではなかつた。かれは漸く橋を渡つて、電車の交叉するところに來た。

ふと路を隔てゝ向うに、娘を伴れた田舍の人が通るのがかれの眼に入つた。その娘がお新に似てゐる。會て自分に熱くなつて來たN町のお新に似てゐる。もしやさうでないかと思つたが、さうでなかつた。

やがて電車が來た。

かれは其處に待つてゐる大勢の人達と一緒に乘つた。

暫しの間は立つてゐたが、やがて腰を下すことが出來るやうになつた。それと同時に、彼と並んで立つてゐたセルの袴をつけた學生も彼の傍へ腰をかけることが出來た。

その學生は車掌に訊いた。

『K町へはまだでせうか？』

『え、まだずつと先きです。』

かう車掌は素氣なく答へて、向うの方へ行つた。

順吉は餘計なことだとは思つたが、傍から、

『K町はまだ七つ八つの停留場を越してから、乘り替へるのですよ。』

『さうですか、難有う……』

『まだ隨分ありますよ。』

その學生は、今朝、用事があつて、S町まで行つて、それから學校に行かなければならないのであつた。

『間に合ふでせうか。』

『合ひますよ。』

學生は十七八で、何でも三田に通つてゐるらしかつた。にきびだらけの顏をしてゐた。

順吉は去年あたりまでは、學生を見ると、一種の刺戟を心に受けるのが常であつた。自分も夜學をもつと勉強しなければならないと思つた。しかし、今はもうそんな氣は起らなかつた。一年を隔てゝ、かれは全く別種の人間になつたことを思つた。

H の大通りに來て、

『さよなら。』

と言つてかれは下りた。

學生と並んで腰をかけてゐる間も、ちよい〳〵亡女のことが思ひ出されたが、HからS行の電車に乘換へると、空いてゐたためか、妄想が盛んに起つて來て、押へても押へても押へ切れなかつた。何うして、今日はかう思ひ出すんだらう？　かう思つて考へて見ると、月こそ違へ、日は同じであつた。不思議な氣がした。續いて、一年の間に降つたやうに起つて來た事件が、益々不思議な念を、かれに誘つた。かうした念は、これまでにもかれは幾度も起したことはある。しかし幾度起して見ても、その不可思議は消えない。かれがあそこに行つたのは『一夜遊ぶ』といふ外には別に意味はなかつたのである。亡女は亡女で、大勢の娼妓と一緒にそこに店を張つてゐたにすぎないのである。それが、何うしてあの亡女が最初にかれの眼についたか。また何うしてその情が路傍の人とは思へないやうに深くなつて行つ

たか。その遊女屋に上つてからその事件に至るまで、僅かに三月の月日しか經つてゐないのである。順吉かれ自身にしても、何うしてさうした心の形になつて行つたかわからないのである。勿論かれ自身も金がなくつて困つてゐた。亡女も好いお客がなく、借金が澤山にあるらしかつた。しかし、約束して短刀を持つて行つたまでは、まだ戯談のやうな氣がしてゐた。

……妓夫が飛び上つて來た。障子を兩方に手荒く明けひろげた。家中は急に騒ぎ出した。『なんだつて、こんなことをしやがつたんだな。』妓夫はかう呶鳴りながら、蚊帳を拂つて二個の死體を足下に眺めるやうにした……。

その聲が今だに耳に響いて來るやうな氣がした。

氣が附くと、電車は思ひがけない處を走つてゐる。O町に行く筈なのがN町の方へ來てゐる。その饅頭屋の招旗は確かにさうだ。見覺えがある。で、電車の方向を書いた箱を周章てゝ見ると、S行だつたのが、いつかO行に變つてゐる。何處かで改へたものと見える。それを、妄想に耽つてゐたので、かれは氣が附かなかつたものと見える。

此處等でも好い。好い理髮店さへあれば……と思つてあたりを見渡して見たが、何うもありさうにもない。爲方がないので、その次のH町まで行つて、車掌に話して、更に乘替の切符を貰つて下りた。

本町の理髮店にかれがゐた時分、H町からわざわざ來たものだといふ髭の生えたパナマ帽を冠つたお

客のあつたことを思ひ出したりした。

矢張、初めから目當にした神田に行くより爲方がないので、かれはS町まで電車で戻つて來た。其處では賣子が鈴を鳴して新聞を賣つてゐる。日曜でなければ附錄がついてゐないから面白くないと思つたけれども、それでもかれは讀賣を一枚買つた。それに、この新聞を買つた理由はまだ他に一つあつた。それは、こつちも理髮店の職人だといふことを思はれたくなかつたからであつた。現に、讀みもしないのに、家を出る時、『文章世界』を一册持つて來たのもその爲めである。まさか、理髮店の職人がかうした雜誌や新聞を持つてゐるとは思はないから……。

かれ等理髮店の職人は、何處でも、晝間は出られないので、朝早くとか、夜遲くとか頭を刈りに出かけて行くが、何うも同じ職人だと見られると、此方も面白くないし、先方もあまり好い氣がしない。それで成るたけそれを隱すやうにするのが例になつてゐる。

青物市場の前を通る時には、其處ではもう野菜の荷車が一杯集つて、ほつぽつせりを初めてゐるのを順吉は見た。O町に來て電車を下りたかれは、其處に、好い理髮店のあるのを知つてゐるので、ちよつと其方へ行つて見たが、戸がまだぴつしやり閉つてゐた。爲方がないので、かれは朝の通りを歩いて行つた。

かれはもう一軒好い理髮店のその近所にあるのを知つてゐた。で、そつちの方面へ曲らうとしたが、

ふとそこにかれが曾て新聞配達をしてつとめてゐた新聞販賣店があるのを思ひ出した。見られるのはいやだと咄嗟の間に思つた。で、かくれるやうにして、N町の細い通りに曲つた。生憎、向うからR新聞の半纏を着た配達が、一軒々々新聞を家の戸に挾み挾みやつて來るのを見た。で、また傍の路に外れた。しかしそこでも順吉は同じ配達のやつて來るのを見て、またかくれるやうにして小路に曲つた。しかし、暫くしてかれは、何も遁げかくれることはないぢやないかと思つた。會へば、あそこの者は誰だつて、『ヤア』と驚いたやうに、またはなつかしがるやうに、聲をかけるに相違ない。あの事件が新聞に書かれたとて、わるいことをしたのではない。顏を見られて、きまりがわるいたつて爲方がない。それにT君の樣子もきくことが出來る——。

さう思つて引かへして見たが、その時にはその配達の姿はもうあたりには見えなかつた。

N町の通りに出て、その理髮店の前に來ると、丁度そこは今起きたばかりといふ風に戸が明いてゐて、こまつちやくれた頭の刈方をした小僧が頻りに床を拭いてゐるのを順吉は見た。

『やれますか。』

かう言つてかれは入つて行つた。

小僧は伸び上つて、きよとりとして順吉を見た。『氣のきかない野郎だ……。早くから、まだ掃除もすまない中からやつて來やがつた。』かうその小僧は思つたらしかつた。尠くとも順吉にはさういふ風に思

へた。

腰掛に腰を下して、暫し待つてゐると、やがて主人が出て來た。

順吉の想像では、職人が眠さうな顔をして、また、小僧が思つたと同じやうな思ひをして、そして出て來るだらうと思つてゐたのであるが、その豫想はすつかり外れた。見てゐると、主人が刈るらしいので、

『すみませんね、早くから……』

かう言つて、かれは主人の命ずるまゝに、鏡の前にある椅子の方へと行つた。回轉する椅子はふわふわとして好い氣持をかれに與へた。

幸ひにまぎるゝものがあるので、悲慘な心の繪は再びかれを脅かさなかつた。それに、刈り方をよく注意して參考にしようといふ念が、かれの心をそつちの方に伴れて行つた。

主人はやがてぱちぱちと鋏を使ひ出した。極めて無造作である。始めバリカンで裾をかけた時にも、隨分刈上げるなとかれは思つた。

白米の粉を髮にふりかけながらぱちぱち刈つた。

かれは始めの中は、じつとそれを見てゐたが――何んな風に刈るかといふ興味に惹かれて見てゐたが、

ふと氣がさして、鏡の中を見詰めるのをよして了つた。お客に鏡の中をじつと見詰められるのは、彼にしてもあまり好い心持ではない。出來るだけ上手に刈らうとする努力、殊にちよつとむづかしい頭に對する時の熱心、その時、客に鏡の中の自分の頭を氣にするやうな風をされると、何となく氣分が焦々して來て、お客はそんな神經過敏にせずに、應揚に眼でもつぶつて刈る人のするまゝに任せて置けば好いと思ふものである。――で、彼もつぶつた。それにその主人の刈方が一生懸命に見てゐるほど器用なやり方をもしなかつたので……。

むしろ親方よりも職人にやつて貰へば好かつたと順吉は思つた。何處の理髮店でも、親方よりも職人の方が上手だと言はれてゐるが、それがきまつた言葉のやうに言つてゐるが、成程さうだと思つた。何處でも職人は、生意氣に氣取つて、何うだ！　かういふ風に刈るものだらうと見せつけたがるやうにやるものだ……。

しかし、眼をつぶると、初めはそんなことを考へてまぎれてゐたが、すぐあとから、その恐ろしい續きが、隙もないやうにまたかれを襲つて來た。

……かれは急に氣附いた。俺れは生きてゐるのだと思つた。女は死んで了つたのだ。かれは不思議のやうに思つた。かれはぢつと考へて見た。……短刀を互に心臟部に當てた。みりみりと突き刺した。苦しさを互に思ひやるなどといふ餘裕はなかつた。互に一生懸命であつた。死にそくなつてはならないとい

ふ思ひが唯一の努力となつた。……女は二三分で、ううんと最後のうめきをしてぐつたりとなつた。彼は女の胸に刺した短刀を周章てて拔いた。女はかれの胸にさした短刀から手を弛めて了つてゐた。かれは自分だけ死にそくなつてはと慌てゝ女の刺した短刀を拔いて更に右の胸を刺した。しかし痛苦に力が入らない。それに氣が附いたかれは、疊に柄の頭を立てて、自分の體の重味をかけて、ずぶずぶとつき刺した。それでもかれはまだ意識がはつきりしてゐた。彼はもうこれで今に死ぬであらうと思つたけれど、女のやうに死に達する瞬間の狀態にまだ自分が達してゐないことを思つて、更に咽喉に二ヶ所、短刀を突き立てた。しかしそれは無駄であつた。力の弱つた彼の狼狽した手のすることは、大變創をつけたやうに自分では思つても、傷はいくらもつかないのであつた。しかし、かれはぐつたりとなつた。咽喉が非常に乾く。ひりつくやうに乾く。で、苦痛をこらへつゝ、枕元の水差の水を飲んだ。夜が薄く明けて來た。かれは女の死顏を見た……。そこにあの新造のおとらがやつて來たのだ。

——眼を明くと、自分の顏が鏡に映つてゐるのを順吉は見た。そこに、その亡女の顏もあるやうな氣がする。かれは今でも決して馬鹿なことをやつたとは思はなかつたけれど、何うしてあんなことをやつたのだらうと思つた。悲しくなつて來た。かれはまた眼をつぶつた。

頭の上で鋏の音がしてゐる。もうかなり時間が經つたと思ふのに、まだやつてゐる。今度はかれはそれを見る氣になつて注意すると、始めは元氣よく無造作にやり出したが、あつち此方曲つたり角張つた

りして、それを旨く仕上げるのに、主人が焦々してゐるのが順吉にはわかつた。

顏は無造作にやつた。殆ど無料のお客でもやるやうに——。

しかし、兎に角綺麗には刈れたと順吉は思つた。一方ではまだ亡女の顏が鏡に映つてゐるやうな氣がしながら……。かれはその刈方が少しも自分の顏に似合つてゐるとは思はなかつたが、兎に角もう一度刈上つた顏を鏡に映して見て、その奥に亡女の顏をも見て、そして二十五錢拂つて其處を出た。

かれは二十錢で好いのに、ばら錢を五錢さがして、そしてそれをそこに置いて來たのである。少し歩いて來て、何故五錢やつたのだらう？　かう思つたが、その何故がかれには說明が出來なかつた。二十五錢！　馬鹿々々しいと思つた。そのため、何ういふ利益があるかしらと思つた。

それは店が上等で、場所が好ければ、高い金が取れるのである。中流以上の人々は、金を餘計さへ拂へば好いと思つてゐる。しかしあの主人は、この自分などは問題にはしてゐやしない。こんな汚ないなりをして、再び來るお客と思つてゐやしない。ずつと大切にしなければならないお客は、他に澤山にあるのだ。

或は身裝が好かつたなら、もつと丁寧にやつたかも知れない。ひがみではない。自分だつて、矢張さうである。好い身裝をした人が來れば、自然丁寧にする。さうかと言つて、自分はその好い身裝に恐れ

て、それで丁寧にするのではない。好い身裝をして來るものは、丁寧にして貰ひたがる。ぞんざいにすればもう來はしない。

それに引かへて、身裝のきたないものは何うだ。かれ等はお客でゐながら、お客でも何でもないやうに、ぺこぺこと頭を下げて、お世辭をつかつて、そして賴むやうにして刈つて貰ふ。丁寧にしてやると、賃錢を餘計置かなければならないやうに氣遣ひをする。

それは兎に角として、ぞんざいにやる處を見るために、かれはわざ〳〵やつて來たのではない。その位なら、家でも、近所でも出來るのだ。ちやんとした刈方を見るには、お馴染になるのか、でなければ好い身裝をしなければ駄目だ。もうあそこに行くのはよさう。こんなことを取留めもなくかれは考へながら歩いた。そのため、亡女のことはちよつと念頭から離れた。

かれは思つた。しかし、亡女がさうして常にかれにつき纏つてやつて來るのは、決していやではない。流石に、血みどろな、悲慘な光景だけは、時が經つて、繪のやうになつて、以前のやうに強く苦しく思ひ出さなくなつて來てゐても無氣味だが、亡女の來るのは、決していやでない。また無氣味でもない。忙しい日なんか、爲事に追はれて、一日思ひ出さずにゐるやうなこともあるが、さういふ時には、何となく淋しいやうな氣がする。かれは今でもその寫眞の一枚を持つてゐる。

かれはまた收容されたその廊の病院を思ひ出した。そこに始めてやつて來た時の妹の顏！　かれは何

故生きたかと思つた。死んで行つた女は仕合せだと思つた。それでも唯一人きりの妹なので、何彼と深切にして呉れた。養育院に行つてからも、困る中から、小遣を十錢、二十錢と呉れた。そして、『今度こそ兄さん、本當に、眞劍にやつて下さいよ。』と涙をこぼして言つた。親身なればこそあのやうに言つて呉れるのだ。しかし、この俺に何が出來るだらうとかれは思つた。世の中の悲慘な壁に突當つたかれだ。魂も粉微塵に碎かれて了つた身だ。一度はかの亡女の爲めに、その爲めにのみ働かうと思つたけれど、今ではさうした張詰めた心もない。

かれは世間の人達が、殊にかれと同じ年頃の若者が嬉々として笑つたり騷いだり女と戯れたりしてゐるのを見ると、自分はそれとは丸で別種類のまたは別世界の人間であるやうに感じられた。世の中のあらゆる艱難と歡樂とを嘗め盡したやうな底深い淋しさがいつもかれの心を占領した。

K橋行の電車がやつて來たので、かれは乘つた。そして何も考へてゐないやうな、またあらゆることを取留めもなくごた〳〵と考へてゐるやうな、そしてまたその隙間々々を世間の艱難や、亡女の顏や、悲慘な光景や、情ある世間と無情な世間との錯雜したさまや、好いが好いでなくわるいがわるいでない心が縫つてゐるやうな心の狀態で、停つたり動いたりする電車の進行をぼんやりと眼にしてゐたが、氣が附くと、もう其處は自分の近所のK町であるのが分つた。かれはそこで下りて、また乘替へてちよつと

行つてE町で下りた。

自分では、隨分手間を取つたつもりであり、町の往來の繁くなつた樣子から推して、もう朝も餘程遲くなつたやうに思つたが、歸つて來て見ると、店の硝子戸のカアテンがぶら下つたまゝで、まだ誰も起きてゐなかつた。で、聲をかけて起して、店を少し片附け始めたが、これから上さんや親方が起きて飯を炊くまでは、まだ大分間があると思つたので――それに、いくらか腹もへり加減になつてゐるので、近所に牛乳を飲みに行つた。

歸つて來ても、まだ家の人達は起きてゐない。さう度々起すもわるいと思つて、かれは店を掃除に取かかつた。それのすんだ頃、上さんは起きて、漸く飯を炊きにかゝつた。

例の通り氣が滅入りさうだ。午前中、客がないので、『文章世界』を讀んだり、國語漢文の本を讀んだりした。なんのために、こんなことをやるのか、また何の希望でこんな本を讀むのかわからない。あの悲慘な光景を、あの事件を、何うかして曲りなりにも書き殘して置きたい。かう思つてさうした雜誌を買つて來たりするのだが、今はそれさへもう何うでもよくなつた。

午後、飯を食つてから、親方は午睡をした。順吉は埃りつぽく風の吹いた表を眺めながら、ぼんやりして暫くそこに腰をかけてゐたが、今朝早起をしたから、自分も少し晝寢をしようと思つて、親方の寢

てゐる傍に、上り口からごろりと仰向けにかれは寢て見た。しかし、眩しくつて眠れない。それを無理に眼をつぶつて眠らうとする。やがてうとうとと半眠狀態になると、妄想が――いろいろな妄想が、夢ともつかず、現ともつかず、頭の中を往來し始めて、生活のどん底のどん底に自分は落ちて行つてゐるやうな氣がした。

無智な社會へ社會へと自分の魂が散つて行くやうな氣がした……。

はつと思つて起きた。丁度深淵の中に今一歩で陷るところを漸く引きかへして來たといふやうに――元の火鉢の處に來て、また暫くぐづぐゝしてゐたが、今度はかれは午前に讀んだ雜誌を取出して、短篇小說を讀みにかゝつた。半頁までも讀んだか讀まない中に、『顏を一つ』と言つて、お客が入つて來た。

お客は金緣の眼鏡をかけてゐる。いつも來る自働車の會社員である。平生は火鉢の處でのんきさうに話をするのが例だが、今日は急いでゐるやうなので、順吉はすぐ椅子へと指した。

相變らず、女の話が始まつた。二三日前、活動で女にひつかゝつたなどと――。順吉は唯調子を合せた。

ふと、自分の今の境遇も、矢張女郎のやうなものだと順吉は思つた。種々なお客を相手に、自分の心は深く包んで、好い加減に、まことしやかに調子を合せて行く。と、また亡女が眼を掠めて通つた。

つくづく順吉はさびしい氣がした。かうした生活が厭さに、何うかしてそこから脫却したいために、かれは一度は奮鬪した。あの時分はまだヒュマニチィの爲めに働いてゐる氣がしてゐた。それが、その事件のために、悲劇のために、すつかり變つた。それをある人は爲めになつたと言つた。『順吉もこれから本心に立かへるだらう、』と言つた。何方が本心なのか。前の心の狀態か。それとも今の心の狀態の方が好いのか。『それにしても、自分は何うしてあんなことをしたのか。』かう思ふと、ひとり手に溜息が出て來た。

『何うかしたかね。』

かう客はじろじろ笑ひながらいふ。

『なんでもありません……』

『女のことでも思ひ出したかね。』

この客はかれの悲劇を知つてゐる筈はないから、この『女』は、普通に言ふ女のことである。しかも、順吉にはそれがぐつとゐぐるやうに胸に來た。

種々と女の話を始めるのに調子を合せながら、成るべく丁寧に順吉は剃刀を使つた。で、暫くしてすむと、客は五錢のところを十錢置いた。餘計置いたからとて、それが自分の金になるのではない。それでも氣持がわるくなかつた。

客は腰掛のところで親方と話を始めた。順吉は順吉で、難かしい本を、雜誌を、――床屋の職人には小生意氣な本を、その客に見られないやうにそつと隱した。

相槌を打つと、際限がないので、かれは成るたけそこから身を離してゐた。その客は誇大妄想狂に近く、頻りに自分のことを大袈裟に話し出した。W大學にゐたことなどを話した。新聞記者をしてゐたこともあるなどゝ言つた。

ふと、順吉は田舍にゐて、小さな新聞の通信員をしてゐたことを思ひ出した。

その時はまだ元氣だつた。無邪氣でもあつた。來年は是非東京に出て、好きな文學をやらなければならないなどと思つてゐた。かれはその時分から、今も讀んでゐる『文章世界』を買つて讀んでゐた。いろいろな青年達の書いた文章を見て、自分にもこの位のものなら書けさうなものだなどと思つてゐた。それは山裾の町と言つたやうな小さな町で、外側には綺麗な小石交りの川などが流れてゐた。その時分にも、矢張かれが相手にしてゐた娘があつた。お照と言つたつけ……。その町を出て、東京に來るやうになつた時、年來の希望の達せられるのは嬉しかつたが、その娘にわかれて來るのが辛かつたつけ。あの女ももう人の妻になつてゐるであらう。

極樂と思つてやつて來たところが地獄で、又希望が達せられると思つてやつて來たところが絕望の都會で、かれはそれからそれへと漂泊した。新聞の配達、牛乳配達、勞働夫、砲兵工廠の職工、活版所の

職工、それかそれへと落ちた。富豪を呪ひ、社會を呪ひ、また世間を呪つた。それにしても、あの社會主義のKは、今何處に行つたであらうか。何處に行つても、刑事につき纏はれて弱つてゐたが、田舍に歸つたか、それともまた外國に行つたか。かれの悲劇の記事の新聞に出た時には、無論、それを何處かでKも見たであらうが、何う思つてゐるであらうか。

『お歸んなさい、難有う。』

親方の聲に氣が附くと、客は今歸つて行くところだつた。

客が歸つて了ふと、かれは再び一人になつた。親方はまた蒲團をかぶつて寢て了つた。

また思ひ續ける……。

今朝早く電車通りで見たお新に似た娘を思ひ出した。つゞいて、お新のことが思ひ出された。あれと夫婦になつてゐたら……。かう思つたかれは、さうしたら、仕合せであつたかも知れないと思つた。お新のお袋も贊成だつたし、自分だつて、そんなにイヤではなかつたのであつた。唯、さうして小さく家庭なんかつくるのがイヤさに、無理をして、そこを出て來た。

お新は壁の處で泣いて居たつけ……。かう思つて來ると、あの亡女が、ちよつとした行きがゝりで、寧ろあの最初の晩、あの店に並んで坐つてゐたばかりに、または自分のさびしさを慰めるつもりで懷にいくらかあつた金に誘はれて、そしてあがつて行つたばかりに、自分の一生を附いて廻る重荷となつたことを深く深く考へられて來た。

……『男は生きてゐる。』妓夫は女の腹の上から男を下しながら、驚いたやうに言つた。

『溫たけぇんだ、まだ。』

『檢屍が今、下に來たから、動かしてはいけねぇんだ。』

かう誰かが言つて妓夫を制した。……急にまたさうした光景が眼先にちらついて來たので、かれは急いでそれを打消すやうにした。

此頃、かれは午後の日影が溫くなつて來る頃、獨りで店にゐると、うづついて來るやうに、ひとり手に情慾の湧いて來るのを覺えた。

それも身體が健康になつて來たためであらう。そしてさういふ時には、きまつて亡女のことを思ひ出した。

かれはその事件以來、丸で僧侶のやうな生活をして來た。街頭で見る美しい色彩とか、艶な句とか、またはやさしい表情とか、さういふものがちよいちよい眼には映るけれども、また、人々がさうした廓の女の話などをするけれども、かれの胸は單に亡女の追想で一杯に塞がれて、世間の女達は決して、かれの體に入つて來る餘裕はなかつた。かれの心は全く世間を離れて了つた。そして體の情慾が起つて來る

と、屹度、亡女が恐ろしい眼をして睨んだ。

かれは此間、かれ等の仲間の交際が斷り切れなくつて、花見に行つた歸りに、一緒につれ立つてなかをひやかしたことを思ひ起した。無論、かれはあがる氣にはなれなかつたが、また仲間の一人は、それを知つてゐて、知らない人達から遁れさせてかれを歸らせて呉れたが、そこを歩いてゐる間の心の痛さをかれは忘れることが出來なかつた。其處にも此處にも亡女がゐるやうな氣がした。また、其處にも此處にも血まみれになつた二人がゐるやうな氣がした。またそこらにゐる女達の淺ましい生活を、外面は派手やかに内部は悲慘な生活をじつとして見てはゐられなかつた。一緒に伴れ立つて歩く仲間の男達の浮いた心は又かれに不愉快な心を誘つた。灯の明るい賑やかな夜櫻の狹斜街も、かれには墓場のやうに暗かつた。

かれの禁慾ももう一年以上になつた。かれはをりを睨むやうにするその亡女の眼の一生ついて廻ることなどを胸に描いた。

夜になつてから、客が込んで來たので忙しかつた。そのためかれの心がいくらかまぎれた。かれは遲くなつてから、親方と一緒に湯に行つて、歸つて來てすぐ二階に行つて寢た。

彼女の幻影

一

横須賀の停車場に着いたのはその日の夕暮であつた。順吉は急いで構外に出たが、一番先きに懷に持つてゐる手紙を出して見た。それは、周旋屋の爺が、『これを持つて行けば好い。大丈夫使つて呉れる。』かう言つて渡して呉れたものであつた。封筒には、A町理髮店高島利作殿と大きく拙い字で書いてあるのがはつきりとかれの眼に映つた。

かれは兎に角人の大勢歩いて行く方へと歩いた。赤い煉瓦塀が左に長く連つて、右は全く山であつた。妙なところだと順吉は思つた。

『いかゞです、いかゞです。』

暫く行くと、かう見つて、路傍にゐた車夫が二三人寄つて來て勸めた。懷には金は一文も持つてゐなかつたけれど、知らない處を聞き聞き歩くのも面倒だと思つた。何うせ、行つた先きでは使つて呉れる

にきまつてゐるのだから車賃位すぐ借りたつて構はないと思つた。

『A町に、高島つて言ふ床屋があるかね？』

かう寄つて來た車夫に聲を懸けた。

『あります、あります。』

『ぢや、そこまで……』

かう言つて、順吉はそこに引き寄せられて來た一臺の車に乘つた。

汚い車だつた。車夫も五十先きの何方かと言へばよぼよぼした爺で、ちよこちよこと走つては足を留め、足を留めてはまたちよこちよこと走るといふやう風であつた。路もわるいと見えて、ガタガタと車は絶えず動搖した。

長い煉瓦塀が盡きると、大きな門があつたり、またその前に廣い草原があつたり、その向うに思ひもかけず碧い碧い海が狹く崖で圍まれたやうに立つて展げられて見えたり、造船所らしい混雜した建物を中心に白い黄い烟が夥しく渦まき上つて見えてゐたりしたが、猶今暫く行つた時には、碧い海波の上に大きな白色の一本マストの軍艦の碇泊してゐるのがはつきりと手に取るやうに見えた。あそこいらが（横須賀の鎭守府だな……海軍の工廠だな）ひとり手にさうしたことが順吉の頭に上つて來た。

何處からともなく薄暮の色があたりを籠めて來て、町の大通りらしい賑かな家並の附近に來た時には、電燈の光が既にキラキラと彼方此方に點いてゐるのを順吉は見た。しかし町の通りは狹く、さう賑かといふほどでもなかつた。『これが、横須賀の町か　？』順吉にはさういふ風に思はれた。

その通りを二三町ほど行つた。

ふと、車は横町に入つて行つた。いとゞ淋しいのが更に淋しくなつて行つた。山の崖下のやうな、または暗い坂道のやうなところを暫しがほど通つて、空地などのある處を向うに抜けたが、またそこに裏町らしい汚い狹い町があらはれ出して、やがて一軒、田舍風の理髮店がその前に見えて來た。と思ふといきなり其處に車夫は梶棒を下した。

唯一度ところと名とを知らせただけで、其あとは訊きもせずに、よくこんな店が車夫にわかつたものだ。これも矢張田舍だとかれは思つた。

店にゐた白い服を着た人達は、かれが車から下りると、きよとんとして皆な不思議さうにかれの方を見た。

車から下りた順吉はおづおづしながらその店へと入つて行つた。

主人と見える五十歳位の男と、職人だかそれとも弟子だかちよつとわからないやうな若い男とが、今、頭を刈つて貰つたばかりらしい客を相手に何か頻りに話をしてゐたのであつたが、急にそれを止したといふやうにして、一樣に順吉の方を見た。無論、かれが客でないことは、かれ等にも初めからわか

つたが、さうかと言つて、それが何ういふ用事を持つて來たものであるかといふことがわからないといふやうに――。

『私は……私は……』

少し狼狽して、『あの、横濱から參りましたんですが。』

『横濱？』

『芳本からです。』

これで漸くその用件がわかつたらしく、親方は、『あゝさうですか。』

順吉はすぐ周旋屋の爺から貰つて來た手紙をそこに持出した。と、痘痕面の、眼の赤い、見るから一癖ありさうな親方は、それを取つて、起上つて、それを電燈にかざして見た。もうあたりは昏くなつてゐた。

『さよなら。』

『あゝ、何うも難有う。』

順吉が入つて來たので、話を端折られたらしい容は、やがてかう送られて出て行つた。暫く親方は手紙を見てゐたが、

『わかりました。しかし、實は私のところでも……』

かう言つて、手紙を卷きながら、元の座に戻つて、立膝で親方は坐つた。『まア、しかしおかけなさい……。私んところでも、此間、もう一週間も前に、芳本に頼んではやりましたんですがね、ちよつともよこして呉れないもんだで、つい二三日前、若い衆を頼みましてね。』

親方は下を向いて煙草を吸つたり、時々順吉の顔を見たりして言つた。

『はア。』

と順吉も當惑して了つた。

『親方、すみませんが、兎に角、この車屋を返して下さい。』

突然かう順吉は言つた。思ひきつて言つた。何うせ一文なしのかれである。そんなことをぐづぐづ考へてゐても爲方がない。無いものは無いんだから爲方がない。かうかれは思つた。

『あゝ、おい、車屋に、お錢をやんな。』親方は別に厭な顔もせず、奥の方にゐる上さんにかう聲を懸けた。上さんはちよつとかれの方を見たが、しかし別に何の感情も起さないといふやうな風で、亭主の言ふまゝに、きさくに車屋に金を拂つてやつた。神經質らしい、蒼白い顔をした、しかも何處となくやさしいところのある上さんだつた。

順吉はこれでいくらかは氣安くはなつたが、しかしまたその一方では、いかにも自分が旅のわたり職人のやうな態度に出たことを後悔するやうな、または濟ないと詫びたいやうな氣がして來た。親方がそ

んなことは何でもないといふやうに、平氣でやつて呉れただけそれだけ一層不安な心持が萠して來た。しかし、親方はそんなことは念頭に置いてゐなかつた。親方はすぐ言葉をつゞけた。『けども、折角來たもんだ……。こつちで遊んで行く氣なら、何うだね、家で世話してやるがね。』かう順吉の顏を見い見い言つて、『それとも、歸りなさるつて言ふなら、汽車賃は何うにでもして上げるが――』

『ぢや、何うか、折角、來たもんですから、何處でも宜しう御座いますからお世話して頂きます。』

順吉はやさしいわかつた親方の言葉に感激したやうにして言つた。流石はこの社會の人達だとも思つた。書生だの、事務員だのを雇ふ小さな會社や、職工を雇ふ工場などでは、とてもかうした人間らしさを味ふことは出來ないと思つた。不安はいつかあとをひそめた。

二

今日の午後に横濱を發つて來たことが繰返してかれには考へられた。垢に汚れて、襟や袖口など黑光りになつてゐる筒袖一枚の自分の姿――、その姿が、白いバナマを被つた紳士の胸の金鏈や、綺麗な女の紗の羽織を着た姿などに雜つてゐるさまが歷々と眼に刻みつけられたやうに殘つた。何も彼も、下駄の音も、靴の音も、荷物を運ぶ車の音も、すべて皆なかれの尖つた神經を刺戟して、ゐても立てもゐられないやうな氣がした。『まア、田舍にでも行つて落附いて來る方が體のために好いから。』かう言つて、切

符まで買つて汽車に乘込ませて呉れた周旋屋の親方も腹の中では何う思つてゐたであらうか。『これで、厄介拂ひをした、』と思つてはゐなかつたであらうか。

あの遊廓の一間での悲劇以來――一度死んで、蘇生しなくとも好いのに蘇生して以來、もう二年は經つた。あれから新しい生涯がかれのために始まらなければならないのであつた。かれ自身にしても、生れ更つた氣で眞面目に働かなければならないのであつた。否、かれは創痍が治つて、長い間世話になつた養育院を出てから、眞面目に眞劍に働くつもりであつた。それが亡女の靈を慰める唯一の道だと思つた。現に、本所にゐた時には、落附いて働きもした。しかし、しかし、しかし……。

かれの頭には、半年以上も性慾を壓抑してゐた頃のかれが浮んで見えた。性慾と一緒に屹度その女が出て來た。死んだ女が出て來た。かれが突き刺した短刀に、迸る血と共に後にたぢたぢになつて斃れた女が出て來た、かれはいかなる時でもその亡女の姿から離れることは出來ないのに痛感して、自棄になつて行つたその後一年のことを繰返した。さつきもある停車場で、かれの頭は大腦や小腦の代りに、烟が一杯詰められてあるのではないかと思つたことを思ひ出した。窓外を走り行くすべての景色も、車室に乘つてゐる澤山の客も、何も彼も、唯茫然とかれの開いてゐる眼に映つてゐるばかりであつたことを思ひ出した。

ところが、それが、

『逗子、逗子？』

といふ車掌の聲を耳にすると、かれの頭は忽ちある烈しい刺戟を受けて、俄かにキとなつたからくり人形のやうに身を起してあたりを見廻した。

そこに白いペンキで塗つたブリッチがある。同じペンキ塗の改札口がある。その向うに構外の砂利地が見えてゐる。その砂利地だ、かれが妹をその奉公してゐる家から無理に伴れ出して來て、その背負つて來た大きな荷物を下に下したのは——。

その時分にも矢張辛い悲しい心の重荷の持主ではあつた。何うかして金をつくらなければならない。二十圓、三十圓の金は何うしても要る。妹がいくらかは持つてゐるだらう。かう思つて其處に訪ねて行つた。しかしその希望は外れた。妹は金は持つてゐなかつた。爲方がないので、妹をそこから引張り出して、別の奉公口をさがさせて、それでいくらかの金をつくらうとした。『僕は年頃になる妹の白粉氣ひとつなしでかうして働いてゐるのが可哀相なんです。』かう大きな聲をして順吉は呶鳴つた。そしてその頬からは涙が流れてゐた。妹の奉公先の主人は、彼が妹を無理に暇を取らせて酌婦にでもするだらうと思つた。しかし、あの時分は心の重荷があつたにしても、まだそれは輕かつた。かう思ふと、鮮血の漂つてゐる中に、かけつけて來た妹が、『まア兄さん、何うしてこんなことを……』と言つた言葉が今でもはつきりと耳に聞えた。

三

落附かない夕飯ではあつたけれども、それでもかれは遠慮なしに御馳走になつて、半日何も食はなかつた餓を醫やした。

『何うも突然上つて、いろいろ御迷惑をかけてすみませんでした。』

かう丁寧に上さんに挨拶して、そして店に出て來た。

若い職人は、丁度一人の客の鬚を當りかけて、小刷毛に石鹸をつけて、それを顔やら耳の周圍やらに塗つてゐるところだつた。默つて口もきかなかつた。

順吉は店から戸外へ出て見た。

それは暗い淋しい通りだつた。片側は町らしく家並がつゞいてゐるけれども、電燈の光も稀れに、人通りもなく、いかにも田舍らしかつた。すぐその向うには、樹の深く生ひ茂つてゐる山が眞黑に見えた。星がキラキラとその上の圍の空に輝いた。

四

『それぢや行きませう。』

親方は晩酌をすました赤い顔をして出て來た。

深切にも今夜すぐ伴れて行つてやらうといふのであつた。で、順吉はそのあとについて行つた。

さう大して遠くはなかつた。それに、いくらかは場所も好く店も綺麗に出來てゐた。話をしてゐる中に、いろいろなこと――主人夫妻はこの道には全くの素人であるといふこと、店は職人二人に任せてあるといふこと、その一人がゐなくなつたがためにあとをもとめてゐたといふこと、今ゐる一人の職人は、かれよりも年は三つか四つ上で、いやに權力を振つてゐるといふこと、主人は海軍の工廠の古い職工で、この店は寧ろ主人よりも上さんの内職にやつてゐるやうなものであるといふこと、さうしたことが次第にそれとなく順吉には飲み込めて來た。否そればかりではなかつた、この家では、上さんが女王であらゆる權利を持つてゐて、十一二になる娘を姫のやうに、亭主と二人ある息子――これも、矢張朝早く青い服を着て工廠に通つてゐた――を店の職人のやうにしてゐるのを順吉は見遁がさなかつた。亭主や息子は上さんの呉れるものをおとなしく食つて、朝は早く出て行つた。夜は遲く歸つて來て寢た。

順吉ともう一人の職人の寢るところは二階であつたが、その二階の奥の間の六疊には、亭主と息子がいつも寢ることになつてゐた。上さんは階下で娘を抱いて寢た。

かれをつれて來た親方は、茶を飲んだり話をしたりして、一時間ほどして歸つて行つたが、それから間もなく、居を閉めて、順吉は上さんに教へられて、自分の寢るところに行つた。

夙起きの癖のついてゐる順吉は、何處に行つても、いつまでも床の中にゐることは出來なかつた。健康のため、一つは一日の中でその身の得られる自由の時間として、かれは朝の散歩を樂むのを例としてゐた。何處に行つても職人にはめづらしいと言つて褒められた。その癖その夙起を迷惑がつてゐるのではあるけれども――。

其處に行つたあくる朝も、順吉は早く目覺めた。かれはそのまゝ立つて雨戸を明けた。初夏の晴れた朝の爽やかな空氣は曉の光と共に流るゝやうに窓から入つて來た。ふと氣が附くと、その傍に昨夜二語三語口をきいた職人がいぎたなく熟睡してゐた。頭から蒲團をかぶつて足を出してゐたが、恐ろしく毛の生えた丈夫さうな足で、しかも何處か床屋の職人らしく痩せてゐるのを順吉は思つた。昨夜此男が何處かへ出かけて行つて、歸つて來て寢たのをかれは少しも知らなかつたのである。(まア、まア、寢首を掻かれなくつて好かつた)といふやうな心持が何處かでした。

順吉は暗い階段を下りた。襖を明けて、まだ電燈のぱつと明るくついてゐるのに驚いたが、更に異樣に感じられたのは、大きな息子が胡座をかいたまゝあつい飯を吹き吹き食つてゐながら、じつと順吉を見詰めた姿であつた。青い服を着てゐるので、やつと工場に行くのだなといふことがわかつた。臺所の方では、主人と上さんとが何か頻にごたごたやつてゐたが、默つて順吉が店に下りようとすると、

『順さんかえ、早いぢやないか。』

かう上さんが臺所から首を出してびつくりしたやうに言つた。

『ちよつと運動に――』

かう言つて順吉はさつさと出て來た。

空は明るいが、路はまだいくらか暗かつた。何處の家でもまだ戸がぴつしやりと閉つて、朝炊の烟を立てた家もたまにしか見當らなかつた。順吉は好い心持で、身を離れずに絡みついてゐる重荷も暫しは忘れられたやうにして、靜かに茫とした朝の空氣の中を歩いた。ふと、前に新緑に包まれた低い丘、その丘をよぢよぢと曲つて上つて行くやうな路――急に、そこに登つて見たくなつて、かれは草原の露をわけつゝ行つた。

それは丸太を置いては土が盛られ、土が盛られてはまた丸太が置いてあるやうな路であつた。さうした路はかれは何年にも歩いたことはなかつた。ふと、故鄕の山のお宮がほつかり浮んで來た。

こゝにも何かお宮でもあるのか知らと思つて上つて行つたが、別にさうしたものも見當らずに、かれはやがて山の頂きのやうな廣い處に行つた。

そこからは市街――眠つた市街、朝の海近いしつとりした空氣に包まれた市街、狹くごたゞゝと連つた不揃ひな人家の屋根が三角形に碧い海に向つて開けて行つてゐる市街をかれは見た。かれは長い間そこに立つて海を眺めた。

五

三日目に、横濱の周旋屋の親方がひよつくりやつて來て、主人から順吉の世話料を取つて行つた。『まア、田舍は靜かで、體にも好いに違ひないから、辛抱してゐて呉れ給へ。』などゝ言つて歸つて行つた。給金もその時分にはもうきまつて、前からゐる寅さんよりは二圓だけ少く、九圓呉れることゝなつた。田舍にしては、先づ優待された方で、横濱で貰つた給料といくらも違はなかつた。それと言ふのも、昨日こゝの親類の親方だといふのが來て、ちよつと順吉に顔を剃らせて、その腕を認められたためであつた。かれは先づ落附いて此處で暮さうと思つた。田舍ではあるし、誰も知つてゐるものもないし、存外落附いた氣分でゐられさうにも思へた。唯、性慾だけ抑制しなければならないと思つた。何處に行つても、かれはそのために、その土地にゐられなくなるのであつた。女に關係しさへすれば、かれは何うしても深間にならずにはゐられなかつた。自分でそれがわるいといふことも、それが亡女の思ひだといふことも、はつきりわかつて考へられるのであるけれども、しかもいつとなく深い陷穽の中に墮ちて行つた。本所でも、横濱でも、其處にゐられなくなつたのは、皆なその爲めだ……。(今度こそ十分に抑制して新しく生れ變らなければならない。)かう順吉は心から思つた。

月日は經つて行つた。土地の客にも習慣にも次第に馴れた。横濱と比べては、同じ市でも、此處は比

較にならないほど田舍であることもやがてわかつて來た。横濱では二十五錢の料金は平氣で取つた。客も皆よかつた。仕事場も、ツルツルと滑かな板の間で、職人も皆なスリツパを穿いて仕事をした。それに引かへて、此處は未だに昔ながらの鷺鳥椅子で、運轉椅子などは藥にしたくもなく、土間は三和土、料金は十五錢、客は大抵海軍々人のぐるぐる頭で、これまで丁寧な仕事をしてゐた順吉には、何だか馬鹿馬鹿しいやうな氣がした。寅さんの爲事なども、何うかすると、見てゐられないほど下手なことがあつた。

しかし居心地のわるい家でないことは事實であつた。主人夫婦が素人で、仕事の上には何の干渉もしないといふ點がのんきだし、來た當座は、氣心が知れないと思つた寅さんも、段々つき合つて見ればさうわるい人ではないし、それに、給金の他に、店の收入が一月五十圓以上になつた時には、その剩つた分は四分の一を呉れるといふやうな規定などもあつて、田舍と言つて馬鹿にされないやうな金が段々入つて來るのも順吉には面白かつた。

寅さんは夜業がすむと、湯に入つて來て、上さんのいつも坐つてゐる長火鉢の處で、胡座をかいて、樂しさうにちびりちびりと酒を飲んだ。素人の主人夫妻に取つては、仕事が何んなに拙くとも、長年ゐて氣心の知れた寅さんが大事らしく、上さんもそのために毎夜酒の肴をちやんとつくつて置いてやつたりした。

順吉が二階に上らうとすると、

『順さん一杯飲まないか。』

かう寅さんはいつも聲をかけた。

『僕は澤山です。』

かう言つて大抵は斷つたけれども、それでも三度に一度はそこに行つて坐つて、一杯二杯の相手はしなければならなかつた。しかし、此頃餘り酒を飲まなくなつたかれは、いつまでもそこに坐つてゐるやうなことはなかつた。やがて座を外して二階へと上つて行つた。かれの室には、奥の電燈の光りがさして來ないので、窓から、外の星の光りがよく見えた。順吉は何うかすると、床も延べずに、暗い座敷にひとり坐つて、凝と何か考へてゐることなどもあつた。

六

『順さん、君、質屋へ行つて來ないか。』

かう不意に寅さんが言つた。それは目見得がすんだ翌日のことであつた。

『え？』

かう言つたきり、順吉は押默つて了つた。何故なら、(質屋に使ひに行けとは、人を餘り馬鹿にしてゐ

る）と思つたからであつた。人を嘗めてゐる爲方だと思つたからであつた。しかし、寅さんは平氣で、窓の敷居のところへ頭を押つけて、天井に眼を置いて、何か頻りに考へてゐたが、

『そして、着物を一枚買ひ給へ。』

と言つた。

順吉ははつと思つた。

人を馬鹿にしてゐるどころか、寅さんは深切に自分の着物を質に置いて、そして順吉のために新しい着物を拵へさせようとしてゐるのであつた。

『いゝえ……』

『だつて、袷ぢやもう暑いや。』

暑いのは我慢が出來るにしても、垢染みて汚くよごれた袷が順吉にも氣になつてはゐたのであつた。白い上衣の服の下から裾の汚れた袷の出るのを順吉が絶えず氣にしてゐるのを寅さんは知つてゐたのであつた。

寅さんはそのまゝ二階に自分の着物を取りに行つたが、やがて風呂敷包を小脇にかゝへて下りて來て、それを順吉の傍にソッと置いた。

『これを入れて來たまへ。』

『いゝえ……』

『そんなに遠慮するには當らんよ。何うせ、返しては貰ふんだから。』かう寅さんは言つて、其處からそんなに遠くない質屋を教へて呉れた。

順吉は幾度となく辭つたけれども、寅さんは言ふことをきかないので、餘りしつこく辭退して却つて氣をわるくしてはと思つて、順吉は質屋に行つて、金を借りて來て、その言ふなりに單衣を拵へた。

その時以來、順吉は寅さんを深切な人だと思つた。段々打解けて、いろいろな話もすれば、湯にも一緒に行くやうになつた。酒を飲まない時には、町に揃つて二人して出かけて行つたりした。

寅さんは、順吉のためにいろいろなところを教へて呉れた。市と言つてもさびしい町とばかり思つてゐたのに、思ひもかけず、夜も晝のやうに賑やかな活動寫眞があつたり、見世物があつたり、夜店が並んで出たりするところへも段々順吉は伴れて行つて貰つた。

『此處が一番、横須賀で賑やかなところさ。』

かう寅さんは教へた。

時には角のそばやに順吉を促して入つて行つて、これまで順吉が食つたことのないやうなめづらしいものを誂へたり、酒を取寄せて飲んだりした。そしてその勘定は決して順吉に出させなかつた。勿論順吉もさういふ金は持つてゐなかつたけれど……。

ある夜、寅さんは、洞へ行かうと言つた。わけもわからず順吉は唯その後について行つたが、それは他でもない、目見得の翌日にやつて來て、順吉に顏を剃らせた親方の家であつた。そこにも色の黑い、肥つた口の重い職人が一人ゐたが、懇意だと見えて、寅さんは親しげに話した。小角力のやうに親方は肥つて大きいのに引かへて、上さんは子守のやうに背が小さく且つ若かつた。順吉は不思議な氣がした。一時間ほどしてかれ等は歸つて來た。

七

十七日が來た。一月に唯一度しかない休日――それを如何に過さうかといふことは、かうした稼業をするものに取つては、かなりに大きな問題であつた。何處に行かう、彼處に行かう、かう誰も十日も前から指折り數へて、その日の來るのを待つてゐた。その日は遲くまでゆつくり寢てゐて好いのであつたが、却つて早くから目が覺めて、床の中にゐるのが惜しいやうな氣がした。順吉は一番先きに湯に行つて歸つて來て、いつものやうに朝飯の膳に向つたが、遊び先きで今日は食ふ筈の午と夜との御馳走が胸につかへでもしたかのやうに、何故かその飯が旨くないので、二杯でかれは箸を捨てた。

順吉と寅さんが食後の一服をやつてゐるところに、洞の職人がやつて來た。

『今日は何處へ行かう?』

『さァ。』

こんな事を言つて三人は笑つた。やがて寅さんは、新調した着物の出來てゐるのを取りに行くために出かけた。順吉と洞の職人とは將棋をさした。

かれ等の揃つて出かけたのは、もうかれこれ晝頃であつた。何處に行かうの、彼處に行かうのといふ計畫は、皆な駄目になつて了つてゐるのをかれ等は見た。

爲方が無いので、三人の足は洞の方へ向いて行つた。途中寅さんは、牛肉を買つたり果物を買つたりした。順吉も夏蜜柑を三つ四つ買つた。夜來た時と違つて、そこからは美しい海が見えたり、海の中にぽつつり浮んでゐる島が見えたりして、こんなところだつたかといふ風に順吉には眺められた。

休日だけに、洞の家は綺麗に片附いてゐたばかりで無く、何處となく靜かで、落附いて、世離れた感じがした。此處でも一月の中の一日の休暇の樂みが、小さい巴渦を卷いてゐるやうな氣がした。肥つた親方もにこにこしながらかれ等を迎へた。

寅さんはやがて買つて來たものを其處に出した。順吉が夏蜜柑をごろごろと其處にころがした時には、『まァ、まァ、大變に……』と言つてその小さな上さんは喜んで手にした。上さんは何處か出て行くところらしく、何事か亭主に言つたり、または寅さんに話しかけたりしてゐたが、やがてちよこちよこと して出かけて行つた。

皆なはドヤドヤと奥の三疊の方へ行つた。

『順さん、來給へ。』

かう寅さんはそこから手招きした。

順吉が行つて見ると、もうその眞中には花札が出されてゐた。

順吉は知らないことも無ければ、また嫌ひでも無かつた。で、莞爾してそこに坐つたので、忽ち遠慮無く花は始まつた。

順吉には昔のことが思ひ出されて來た。苦學生をして東京にゐた時分のこと、神田の新聞配達の店の二階で、今は高等工業に行つてゐたり、明治大學に行つてゐたりする筈の友達とよく一緒に花を引いたことなどが……。今も皆丈夫で學校へ行つてゐるだらうと思はれた。と、順吉は悲しくなつて來た。

何番となく花は進行した。順吉には不思議にも好い役がついたり、起きがよかつたりして、一厘花にすぎなかつたけれど、一二時間の中に、一圓近く順吉は勝つた。

『またやつてらあ！』

かういふ聲がしたので振返ると、上さんはいつか歸つて來てゐて其處に立つてゐた。上さんはわざとむづかしい顔をして皆なを睨むやうにした。

一座は皆な笑つた。

『冗談ぢやないよ。』上さんは眞面目な顔をして、親方の腕を引張つた。

『あはゝ、勘辨々々。』親方は意氣地なく轉がされた。

『さア、よしたり、よしたり。』今度は上さんはかう皆なに向つて言つて、『本當にしやうがありやしない。直ぐそこに交番があるのを知つてゐながら。』

女王の意見とあつては爲方がないといふやうに、皆な强情を張らずに、そのまゝ素直に片つけ始めた。

誰が先きともなしに立上つて、三人は店の方へ來た。

『海の方へ行つて見よう。』やがてかう其處の職人が言つた。で、三人は出かけた。あとから、上さんは、『皆な夕飯時分には歸つて來なよ。』と聲をかけた。

それから海岸に行つたり、あちこちと歩いたり、酒を飲んだりして、夕暮近くまで三人は一緒にゐた。洞の家に夕飯を食ひに歸らうなどとは思はなかつた。

寅さんと順吉の姿は、十一時頃に、活動小屋から出て來た。小屋の中は馬鹿に暑かつた。順吉は寅さんを促がして、そしてそこから出て來て了つた。洞の職人はまだそこで見てゐた。

空はいつか曇つたと見えて、星の光も見えなかつた。夜風は生溫くかれ等の顔を吹いた。それでも活動小屋の中と比べては涼しかつた。二人はあてもなく歩いた。

『一杯飲まう！』

『ウム。』

順吉の懷にも、今夜はいくらか金があつた。(これがわるいのだ……夜がわるいのだ、十時すぎがわるいのだ、懷に金があるのがわるいのだ。)かう自分ではちやんと知つて居りながら、わかつて居ながら、また、これから酒を飲むと女のところに行かずにはすまされない、女の處に行けば、また深い陷穽の中にはまらずにゐられないといふことを十分に心得て居ながら、何うしてもそれを抑制することが出來なかつた。

順吉には醉つたり、喋つたり、ふざけたり、または女と騷いだりする自分が悲しかつた。しかし何うすることも出來なかつた。つい順吉は酒をすごして了つた。

したゝかに醉つて飲食店から出て來た二人は、いつか遊廓の方への坂をのぼつて行つてゐた。順吉の頭には、ある重い物が載つてゐるやうな氣がしたけれど、行かうと約束がきまつてからは、反つて順吉は寅さんを促すやうにした。『たまには好いさ、』などと寅さんは言つた。

(全くだ!)

かう順吉は心に思つた。つゞいてたまだけですまされる人達が羨しいやうな氣がした。あそこでの凄じい慘劇、その凄じい光景が眼の前に浮び上つて來るのを、順吉は酒の力で何遍も何遍も押へた。(氣のせゐだ。そんなことを考へてゐられるもんか。そんなことを考へてゐては一生女の肌に觸れることも出來

ない……。もう過ぎ去つたことだ。)かう考へながら順吉は歩いた。

遊廓までの距離はかなりにあつた。かれ等は背につかまり合つたり唄を大聲に唄つたりして歩いた。やがてさびしい遊廓がかれ等の前にひらけた。

寅さんの馴染があるといふので、あまりどつとしない小さな店にかれ等はあがつた。階段から引附へ通されて、大きな膳を挾んで二人は坐つたが、薄暗い電燈や、汚れた古い唐紙などが馬鹿に陰氣な感じを順吉に與へた。何故かれは懲りもせずにこんなところにやつて來たかと思つた。いつそ遁げて歸らうかと思つた。しかしそれも出來なかつた。順吉の顏は蒼白く電燈に映つて見えた。やがて少しばかりの酒が運ばれて、二人の女は出て來た。

『まアしばらくぢやないの?』

こんなことを言つて、寅さんの馴染の女は、いきなり寅さんの傍へ寄つた。三十位の、頰の赤い、伊勢音頭の芝居で貢に顏を切られて西瓜になるやうな女だつた。

順吉に當てられた女は、十七八位にしか見えない顏の色艶のわるい女だつた。こんな女を馴染にするものもあるかと思へた。

『好いでせう、若くつて?』かう遣手がつくり笑ひをして言つた。

やがて二人は廻し部屋らしい狹い座敷に、女に伴れられて行つた。

順吉の部屋には、丸い大きな窓があつて、特に嚴重に取圍まれた戸外の矢來塀が悲慘に眼に映つて見えた。外は眞暗であつた。

薄暗い廊下の灯だけ取入れてあるといふやうな安直な部屋の中に、色のいやに蒼白く黑い女を發見した時には、順吉はゾッとした。しかし（なんだ！）といふ氣がすぐそれを打消した。女は傍に來るには來たけれども、まじまじと眼を大きく開いたまゝ、いつまでも何か考へて順吉がゐるので、やがてソッと出て行つた。

いつか順吉はとろりとしたと見えて、ふと廊下で客が騷ぐのに眼が覺めた時には、何時の間にか女は順吉の傍に來て寢てゐるのを見た。すやすやと蒼白い小さな顏が其處にあつた。ふと見ると、その唇は紫であつた。そしてその唇からは血が流れてゐた。順吉ははつと思つて飛び起きた。

『何うしたの？』女は驚いて首を上げて言つた。

『あゝ、夢、夢を見たんだ。』かう順吉はまぎらした。しかし順吉は女の方を見ずに、唯窓の方を見た。そこには亡女がしよんぼり立つてゐるやうな氣がした。

山上の震死

二人の學生が向う側の溪谷の小さな溫泉場から、二千米のS岳の頂上近くにあるS溫泉に來た時には、全く思ひもかけない驚きに目を睜らずにはゐられなかつた。人々が右往左往に織るやうに往來する。そしていづれも何か異常の事件でも起つた樣にいやに興奮した顏をして居る。山合からは白い溫泉の湯氣が凄じい勢で五六十尺以上も高く噴き上がつてゐるのが見渡される。熱湯の瀧は何條となく樋から樋に傳つて流れ落ちてゐる。そして無數の群集が列をつくつて、折れ曲つた山路を蟻の行列のやうに登つて行くのが黑く連つて見えた。

全く思ひがけない混雜、雜遝、不整頓がその前にあつた。何等か不思議の力に、または何等か大きな異常な事件に全くそこにゐる人達は引寄せられて了つたやうに、またそれにすつかり魅せられて了つたやうに、顏の輪廓の線は緊張し、眼の光はかがやき、耳はあらゆる微細な響をも聞くやうに見えた。一種魂をそゝるやうな囁きが一つになつて集つて、それが重苦しくその一帶の平地を壓した。犬までがき

よときよと駈け廻つて頻りに空に向つて吠えた。

もし虚心平氣なすぐれた畫家が此處にあつたならば、何をも忘れて、この世の常でない、世間ではとても見ることが出來ない、外面は靜謐で内部は夥しく沸騰したあたりの光景を描いたであらう。そしてその畫の持つた印象は、滅びずに永久に人を動かしたに相違ないであらう。しかしいかなる天才の畫家も、恐らくは或は落附いてそれを描いてはゐられなかつたに相違なかつた。忽ちその身もその動搖、混亂、不整の中に捲き込まれて行つて了つたに相違なかつた。その平地にゐる多くの群集と同じやうに。

『變だな――何うしたんだ、一體――』

『本當だな。』

かう二人の學生は小聲で囁き合つた。

テントの周圍を駈け廻つてゐる子供等、鍋や釜を大勢一緒になつて洗つてゐる上さん達、洗濯をしてゐる女達、ぢきその前からぞろぞろ出て來る銅色をした裸體の人の形態、深く澄んだ空氣の中にレリイフか何ぞのやうに浮き上り盛り上つて見えてゐる青い色の褪めたペンキ塗の建物――『何だか舟のやうな家屋ぢやないか。』ついさつきかう下から指さしてのぼつて來たことをかれ等は思ひ出した。

何うしても今まで眼にしてゐた世界とは思はれないやうな特殊な氣分と空氣とがかれ等を壓した。

かれ等はぢきその近くにゐた一人の上さんに訊いた。

『何うしたんです？　一體？』

『……』

何も言はずに、こんな難有い不可思議がわからないかといふやうな顔をしてその上さんは此方を見た。

『何うしたんです？　一體？』

學生の一人はもう一度かう言つて訊いて見た。

『あれを見なされ！』

上さんはさう言つて、山の上に續いた黑くなつた群集を指さした。二人の學生もさつきから、それと氣はついてゐたが、かう指さされて凝と眼を据ゑて見た時には、長蛇のやうに黑くうねつてつゞいて行つてゐる群集の上に、小さな古い堂見たいなものがあつて、そこに谷を越した夕日が明るくかゞやいてゐるのが見えた。空氣のせゐか何だか、それが金色の明光を放つてゐるかのやうに見えた。

『あれが何うしたんだね？』

『勿體ねえ！　お前さん方あれを知らねえのか、生佛さまが彼處に御座るだ！』

『生佛が？』

馬鹿々々しいと云ふ語氣をして一人の學生は笑つた。

『そして皆なあゝしてお參りに行くつて譯かね？』

一人の方の學生はかう問ひ重ねた。

『皆なの罪を負つて、あの生佛さまがあそこで涅槃にお入りならつしやると言ふんだ……今の世には、こんな難有いことはねえ。お前さん達も行かつしやれ。そしてな、難有いお說法を聞いてきなはれ。あの生佛さまがお出現になつてから、こゝは、この溫泉場だけは、淨土になつたぢや、極樂になつたぢや。』

その熱心な調子は學生達を笑へなくした。かれ等は默つて歩いて行つた。不思議はそれに留らなかつた。その溫泉場に入つて行くにつれて、その所謂生佛に對する渴仰のあらはれは其處にも此處にも見えた。ある女は洗濯をしながらをりをりその手を留めて、手に持つた珠數を繰つて禮拜した。ある男は路傍に立つて山上の堂の方に向いて合掌した。癩病らしい男は大地に跪いて禮拜して淚を流した。

此溫泉場には旅舍はなかつた。そしてその代りに事務所があつた。七月十日から九月二十五日まで。それから後は全く深雪に蔽はれて、あくる年に再び戸を明けるまでは、誰もこの山の上にやつて來るものはなかつた。ところが、今年事務所の老人が來て驚いたことは、自分達より先きに、その上の堂——それは堂と言ふよりも、七八年前に硫黃を採取する人達の住んで起臥してゐたところで、それもその事業の思はしくないために全く捨て去つて了つたものであるが、そこに一人の金緣眼鏡をかけた、珠數を腕にかけた、眼光の凱々とした、俗ともつかず、僧ともつかないものが一人趺坐してゐたことであつた。

かれは默つて口も明かなかつた。恐らくは誰もかれが何處から來たか、また何時そこにやつて來たかを知らなかつたであらう。また如何にしてかれが其處に生きてゐたかも知らなかつたであらう。事務所の老人は話した。

『初めは、可哀さうだと思つて、私が米を一日おき位にもつて行つてやつたでさ。……それがなあ、何時の間にか、あんなに大勢に大騒ぎをされるやうになつた。……何でも、始めは女が行つたでさ。それから何でも、M縣の大金持の衆が行つたでさ。その衆は夏になるといつもやつて來る方だがな。それが一度ですつかり信者になつたぢやな。』

學生は訊いた。

『それで說教でもするんですか？』

『するどころぢやない。それはえらい說教ぢやさうぢや。大膽な說教ぢやさうぢや。世間の罪惡と言ふものに對して、一歩も假さない說教ぢやさうぢや。それに、大きな聲で、丸で、鐘でも撞いたやうで、その時の顏の恐ろしさといつたらないといふことぢや。不動明王の前にでも出たやうぢや。それに、近い中に死ぬと言ふぢや。世間の人達の罪を負つてそして死ぬから、それを見てをれと言ふぢや。』

『ふむ……』

かう二人の學生は言つて考へた。暫くして、